

324

187

キング博士著
加藤直士譯

イエスの倫理

下

東京 警醒社書店

324-18



イエスの倫理

下卷

加藤直士譯

ヘンリー、チャール、キング著

東京 警醒社書店

明治
43.10.8
内交

譯者の緒言

- 一 本書の上巻は本年四月著者キング博士の來朝中に譯了して出版せり。今夏約を履んで此下巻を譯述し終るを得たるは余の深く光榮とする所なり。蓋し我邦の人心を一新する道は、宗教の大信念に基ける倫理思想の普及に依るの外なく、斯かる思想はイエスの倫理を措いて他に求むべくもあらざるを信ずればなり。本書が我邦心靈界の刷新に貢獻する所多大ならんことは譯者衷情の至願なり。
- 一 著者の序文、同略傳、譯者の緒言は上巻に掲げたれば茲に再録の煩を避く。只だ上巻の目次のみは、初めて下巻のみを讀む人に思想上の聯絡を與へんが爲め卷末に再録することゝなせり。
- 一 本書の下巻は其中に路加傳の比喻の著者獨特の解釋、及び山上の説教の有名なる解説を含む點のみを以てしても、上巻に獨立して愛讀せらるべき充分の價值あるを認むと雖も、原著は固と一卷として現はれたるものに

して、上下二卷に分ちたるは單に譯者と出版者の都合に依れる者なれば、
早晚再版の節は一冊に合本せらるべきことを預告す。

攝州六甲山麓、我洋書屋に於て

明治四十三年八月下旬

譯者誌

目次

下卷

第四章 馬太又は路加にのみ特有なるイエスの語に 於ける倫理訓の研究

茲に研究すべき馬太傳中の章句——以上の句の概括——警戒並に審判の調子——慈悲寛容の
調子——馬太傳記者の意見——愛は人生の目的——一個人に對する要求——他人に對する關
係の要求——此等の要求の窮極する所——馬太傳に特有なる教訓の總括——路加傳に特有な
る材料の分量及び信憑——茲に研究すべき路加傳特有の部分——路加傳中にある慈悲及び警
戒の調——慈悲の調と警戒の調とは矛盾せず——路加傳中の短文句の特徴——研究の二題目
——猜疑と傲慢との對照としての信仰と愛——分離主義の誤謬——二人の負債者の比喩——
敢て人生の最高力に信頼する事——善きサマリヤ人の比喩——愛の奉仕——必要に應ずるの
愛——寛容の愛——路加傳十五章——十五章に於ける比喩の配置——聖善の二見解——其一
マリサイ人の聖善觀——其二、イエスの聖善觀——此等の比喩に於けるイエスの主張——是

等の比喩の仕組——宗教的形式に於ける倫理訓——神は作業主に非ず又刑の執行者にも非ず
 ——神の愛顧と憂慮——神の捜し求むる愛——人は神の爲に造らる——無慈悲の精神——長
 子の罪——亡ぶるは神より離るゝ事なり——此等の比喩中の倫理的教訓——愛は凡ての制度
 以上に位す——報償を思はず必要に應じて愛を實行す——赦す所の愛——審判と警戒との方
 面——富める愚者の比喩——用心深き僕の比喩——此等の教訓の動機は倫理的なり——悲惨
 なる出来事の教訓——果を結ばざる無花果の比喩——謙遜の奨励——費用の豫算——イエス
 の英雄的召致——危機に對する覺悟——人生の苦役に辟易する勿れ——忍耐持久して己が靈
 魂を救へ——金錢財寶に關する教訓——不義なる番頭の比喩——此比喩の實際教訓——道徳
 的生活に於ける先見の必要——金錢をして愛の奉仕の器たらしむ——更に大なる信任の爲め
 の訓練——生命の必然的統一——富者ミラザロの比喩——愚龍の比喩の概括——警戒の比喩
 の概括——重罪句との比較對照——凡て是等は路加傳中にて在り——結論

第五章 山上の説教の概論

最初の談話中になき句節——馬太傳の記録を研究の材料とするの可——山上説教全體の瞥見
 ——此説教に於けるイエスの創見——イエスの獨創性如何——山上説教の特徴の解説——山
 上説教に於けるイエスの心靈的創見——是等の重要な主張の概括

第六章 人生の根本性質に關するイエスの觀念。

八福の研究

人生の根本義とは何ぞや——山上の八福中にある答——性格——幸福——感化——第一福の
 性質——謙虛——第二福の性質——悔悟——第三福の性質——克己——第四福の性質——熱性——第五
 福の性質——仁慈——第六福の性質——純潔——第七福の性質——平和——第八福の性質——犠牲——
 八福の順序——個人的教訓と社會的教訓——謙虛と悔悟——克己と義を追求する熱性——同
 情と尊敬——平和の増進者——犠牲の愛——結論——此世の憲法八ヶ條——此世の憲法と正
 反對なるイエスの法則——幸福の條件としての謙虛——幸福の條件としての悔悟——幸福の
 條件としての柔和克己——自惚心の除去——他人の喜びを分つ——克己者の幸福——幸福の
 條件としての品性の熱求——幸福の條件としての慈悲愛憐——無慈悲の損害——幸福の條件
 としての清き心——敬虔なる者のみ啓示を受く——見神の道——幸福の條件としての平和を
 求むる事——幸福の條件としての犠牲獻身——神の生命を分與さる——八福の性質は凡て幸
 福の根本條件なり——八福の性質は感化の源泉——幸福なる生活の感化力——善の感染力——
 ——神國建設の事業——總括三則——其一、品性——其二、幸福——其三、感化

第七章 山上の説教に於ける人生の大動機

終局の問題——問題の困難なる所以——四大動機（思想）の山上の説教に於ける適合——動機は果して有効なりや——神の天父親は其根本動機なり——内的生命の統一と云ふ原理の適用——生命の統一は内部的にして不可抗的なり——二個の標準は兩立せず——愛は生命の種子——終始一貫の統一の要求——山上の説教に於けるイエスの此原理の應用——律法の眞の成就是外形的器械的ならずして内部的精神的なり——律法の外形的嚴守の危険——律法の内的完成は人をして謙遜ならしむ——義務は大生命に到るの途を示す——新しき自由——山上の説教に於ける此原理の應用——同胞とは如何なる意味ぞ——他人との不可離なる關係——根本的類似——類似點を判別する事——階級的區別の打破——誘惑の類似——凡ての人は神の子なり——人は皆な神に愛せらる——無限の伏能——兄弟は審判官ならず——山上の説教に於ける此原理の應用——人は愛の爲に造らる——世界の中心に於ける愛——天父の愛を分與さる——眞個の勝利——愛によれる勝利の幸福——天父に信賴するの結果——天父親は他の凡ての動機の根柢なり——愛の方の源泉——馬太傳五章に於ける四大動機の適用例證——不潔の罪に對する統一と成就との思想——不潔は根本的の罪なり——不潔の罪の誘惑力——内的の救ひ——天父親より來る動機——同胞親より來る動機——虚偽の罪に對する四大動機

機の適用——統一の原理——成就の思想——同胞親の原理——天父親より來る動機——復讐に對する四大動機の適用——成就親の適用——同胞親の適用——天父親の適用——結論

第八章 結論

山上の説教其者がイエスの教訓の總括なり——其の然る證據——シムミールの支柱句中の倫理訓——パーキットの重證句中の倫理訓——Qと調和す——馬可傳及び馬太路加の特有教訓とも調和す——何等の學術的系統なし——然かもイエスの教訓には徹底的統一あり——神を天父とするの思想の推論——愛の要素——人生の最高善——人格の價値——内的正義——心靈の獨立——倫理生活の自由——イエスの天父親は感情的ならず——嬰兒の如き性質——イエスの教訓の統一の今一の見方——最後の問題——イエスは倫理觀を有する乎——イエスの最高善の觀念——イエスの義務觀——イエスの眞心觀——イエスの道徳的自由觀——結論

イエスの倫理 下卷目次終

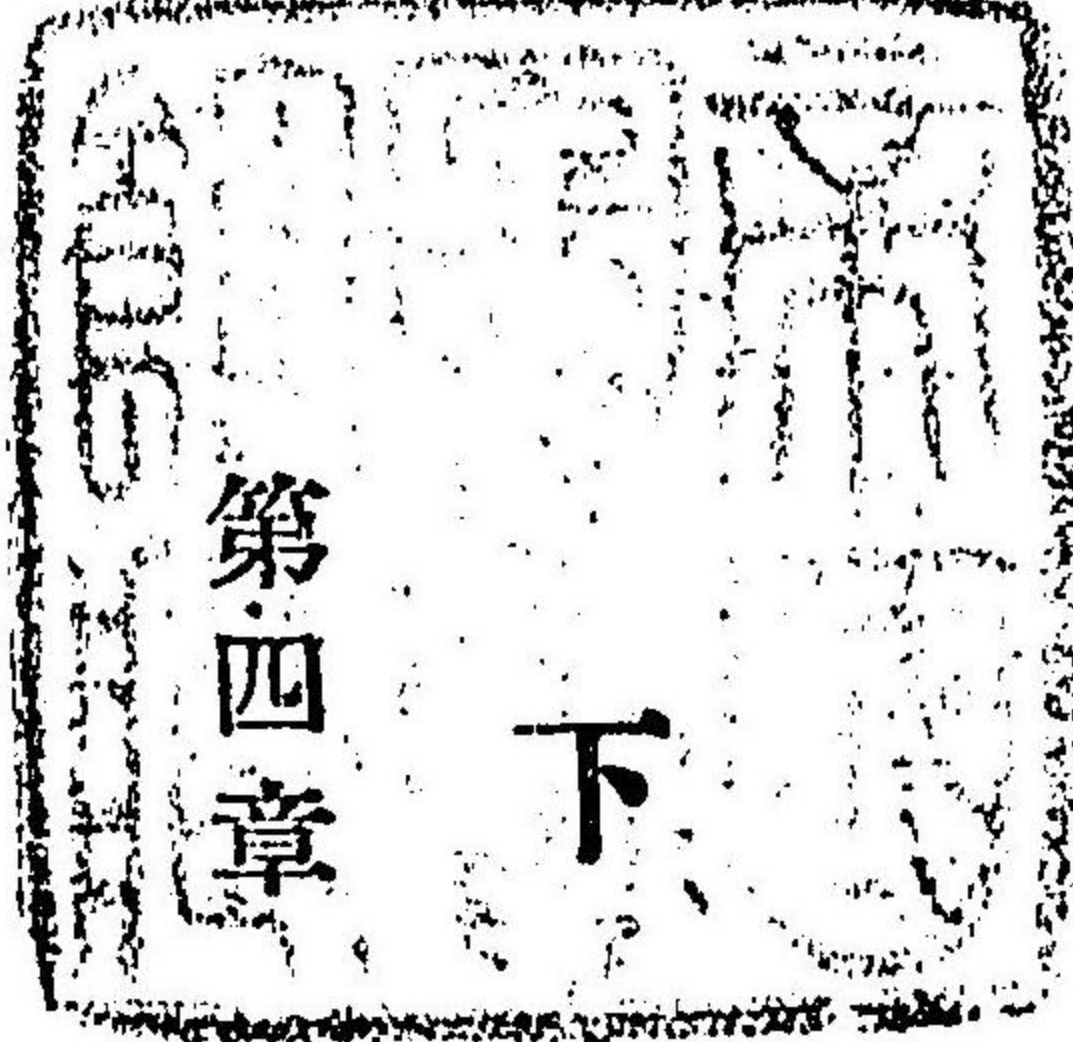
茲に研究
すべき馬
太傳中の
章句

イエスの倫理

ヘンリー、ナヤークル、キング著

加藤直士譯

下卷



馬太又は路加にのみ特有なるイエスの語に於ける倫理訓の研究

一、馬太傳に特有なる倫理訓

『萬國批評註解書』に於けるアレン氏の馬太傳の解拆を其儘採用して、唯だ彼が馬太傳のみに見出さるゝとして列擧した事柄の表中より、凡ての物語の部分、凡ての記者の言説、凡ての倫理的以外の部分、山上の説教に關

第四章 馬太又は路加にのみ特有なるイエスの語に於ける倫理訓の研究 一

する凡ての章句、及び吾人が已に論述せる凡ての句節を削略し去る時は、吾人が此の章に於て取扱ふべく残る所のものは以下の表中に收める事が出来る。

- 一、太十章十六節、四十一節——「蛇の如く智く」——「預言者なるを以て預言者を接くる者は云々」。
- 二、太十二章七節、十一節より十二節、三十六節より三十七節——「われ矜恤は欲て云々」『羊安息日に坑に陥らば云々』——「凡て人の云ふ所の虚言云々」。
- 三、太十三章五十一二節——「天國について教へられたる學者は云々」。
- 四、太十五章十三節——「我が天の父の植えざるものは皆抜かるべし」。
- 五、太十八章三四節、十節、十四節、二十三節より三十五節——「若し改まりて嬰兒の如くならずば天國に入る事を得じ云々」——「爾曹此の小子の一人をも慎みて輕視る勿れ」——「此の小子の一人の亡ぶるは天に在す爾曹が父の尊旨に非ず」——他人の負債を免さざりし僕の比喩。

- 六、太十九章十二節——「夫れ母の腹より生來たる寺人あり云々」。
- 七、太二十章一節より十五節——葡萄園に於ける勞働者の比喩。
- 八、太二十一章十六節、二十八節より三十一節——「嬰兒乳哺者の口に讚美を備へたり云々」——二人の子の比喩。
- 九、太二十二章四十節——「凡ての律法と預言者は此二の誠に因れり」。
- 十、太二十三章二三節、五節、七節より十節、十五節より二十二節、二十四節、三十二節より三十三節——「學者とパリサイの人はモーセの位に坐す云々」——「彼等の行は凡て人に見られんが爲になすなり」——「爾曹はラビの稱を受くる事勿れ」——「爾曹徧く水陸を歴巡り一人をも己が宗旨に引入れんとす云々」——「善者なる相者よ云々」——「爾曹先祖の量を充せ云々」。
- 十一、太二十五章一節より十三節、三十一節より四十六節——十人の童女の比喩——審判の日の光景。

以上の句の概括

以上の章句を概括すれば、免さざる僕と葡萄園の勞働者と二人の兄弟と

十人の童女との四個の比喩、パリサイ人に對する譴責及び審判の日の光景、數個の短語、嬰兒に關する三個の言より成立つて居る。

馬太に特有なる章句は一面に於て甚だ強く警戒並びに審判の調子を高調じつゝある事を見るであらう。即ち二十三章に於けるパリサイ人の譴責、二十四五章に於ける終りの審判の光景、葡萄園に於ける勞働者の比喩、「凡て天の父の植えざるものは抜かるべし」なる語、及び虚言に關する警戒等であつて、以上は何れもイエスの眞摯なる人生觀を表示するものである。

同時に他の一面に於て甚だ明に仁愛謙遜及び寛恕の調子を見る事が出来る。即ち『われ矜恤を好みて祭祀を好まず』なる語、安息日に羊を救はざるか云々の言、二十二章四十節に於ける愛神愛人の法則に關する言、免さざる僕の比喩に於ける慈愛の調、及び二十五章三十一節以下に於ける小なる愛の奉仕に依りて審判の日に恵まれる事等である。げに審判の警戒は同情並びに愛の缺乏を示す所のものに向つて特に發せられつゝあるのである。馬太傳に特有なる以上の章句に關聯して自然に起り來る所の問題は、直

警戒並に審判の調子

慈愛寛恕の調子

馬太傳記者の意見

接しイエスの言として見らるゝよりは寧ろ馬太傳の記者自らの意見として見るを適當とする部分は果して何であるかと云ふ一事である。此の問題に答へる爲に『基督及び福音書辭典』中にある馬太傳に關するアレン氏の簡短なる總括を採用するを得策とする。アレン氏の説に據れば、馬太傳記者自身の意見の影響が、第一律法の永久性に關する事と、第二神の國の目前に近く迫れる事と、第三福音の傳へらるべき範圍に關する事との三點に於て頗る明に認める事が出来る。さりながら馬太傳の是等の特徴は實際上イエスの倫理訓に何等の影響をも及ばさないのである。即ち馬太傳記者が如何なる自分の意見を以てイエスの傳記を綴つたにせよ、爲にイエスの倫理訓は其の固有の特色を没却された點が認められない。イエスの倫理訓の章句に關してはシューミードルの言が最も適當である、曰はく『吾人が事の真相を諒解するに於て最も適當なる位地に置かるゝのは、イエスの純粹に宗教的並びに倫理的なる發言が研究の題目となる場合のみである。吾人が基礎的支柱句と呼びし所のものと符合する凡ての點を、信用すべきイエスの

言として承認すべしと云ふ原理が、特に此の場合に於て遺憾なく適用され得るのである。假令斯かる發言が第一世紀に於ける猶太教的基督教なるエピオナイトの色彩を帯ぶる事如何に大なるにせよ、從つて字句通りの正確を期し難き點あるにせよ、又假令更に後世の時代に於て起りし所の基督教的社會の狀況に適合すべく無意識的に變化されたる點が如何に多くあるにせよ、從つて其語の意味が當然屬すべき關係以外に移植されて或種の曲解を施された嫌があるにせよ、凡て是等の外來の變化がイエスの發言に附着して傳へられてあるにせよ、其等の語句中に存する所のイエスの精神其のものは全然誤るべからざる所のものである。茲に吾人は他の總ての缺點を償ひ得て餘りある程の全く信用すべき充分廣き領分を有するのである。』シニミデルの此の言は馬太傳中に存するイエスの倫理訓の信用するに足る理由を披瀝し得たものと云はねばならぬ。

扱て馬太傳中にある山上の説教は之を後章に譲る事として、茲に吾人は馬太に特有なる其他の種々なる倫理訓を簡単に研究せんと欲する。但し前

愛は人生の目的

一個人に對する要

章所謂重證句なるものに關して吾人が詳述した『人生の法則』と之を比較して吾人の議論を進めんと欲するのである。

先づ第一に吾人は馬太が馬可にも劣らざる程に明かに人生の目的に對するイエスの信仰を表示して居る事を發見する。即ち以下記載の點に關するイエスの信念の發表である。『我が天の父の植えざるものは皆抜かるべし』(二五ノ一三)なる語に明かなる惡の勢力の必然なる敗北の信念、葡萄園の勞働者の比喻(二〇ノ一—一五)に於て明かなる萬人に對する機會の均等の信念、『凡ての律法と預言者は此二の誠に因れり』(二二ノ四〇)に明かなる愛を以て人生の總括とするの信念、及び終りの審判の標準に關しての信念(二五ノ三一—四六)。是等は皆人生の目的に關するイエスの信仰の發表に外ならぬのである。

云ふ迄もなく馬太傳に特有なるイエスの是等の倫理訓は、一個人に對する人生の法則を明示すると同時に、一個人が他人に對する關係の法則をも明示するのである。先づ一個人に關しては絶對的に眞實であらねばならぬ

事の要求 (二三ノ五、一五―二二、二四、三二―三三) 内的生命に關する
要求 (二三ノ三、二八、其他同上) 油断なき警戒に關する要求 (三五ノ一
―一三) 及び『それ母の腹より生來たる寺人あり又人にせられたる寺人あ
り又天國の爲に自らなれる寺人あり之を受納ることを得るものは受納るべ
し』(一九ノ一二) なる語中に暗示されたる犠牲と服従の精神に對する要求
等が例に依つて高調されてある。人生の眞實で且内的であらねばならぬ事
の要求は、殊にイエスのパリサイ人譴責の語に於て表はれて居る。茲にイ
エスは彼等が人に見られんとするの動機や聖からざる宗派根性より生ずる
改宗運動や、盲者にして盲者を手引する精神や、蠅を漉出して駱駝を呑む
の愚や、誤まれる祖先の量さかを充すの醜を極力排斥して居る。

他人に對する關係の要求

他人に對する關係に就ては、イエスは又愛の根本的にして抱擁的なる精
神 (三二ノ四〇、一一ノ七、一一―一二、二三ノ七一―〇) 人に役ふる活
動的の奉仕 (三五ノ三一―四六) 人格に關する不變の尊敬 (二〇ノ四一、
一八ノ三一―四、一〇、一四、二一ノ一六、二三ノ二―三) 及び罪を赦すの

義務 (三八ノ二三―二五) を要求して居る。同時に茲にも嬰兒の如き性質
の價値の承認が含蓄されて居る (一八ノ一一―一二、二三ノ七一―〇)。人の
言語に對する嚴肅なる責任は十二章の三十六七節の虚言に關する語中に確
がめられて居る。即ち『われ爾曹に告ん凡て人のいふ所の虚言は審判の日
に之を訴へざるを得じそれ爾その曰ところの言に由りて義とせられ又其い
ふ言に由て罪ありとせらるゝ也』とあるのはそれである。智慮と順應の必
要は十章十六節の『故に蛇の如く智く鴿の如く馴良かれ』なる語と十三章
五十一節以下の『天國に就て教えられたる學者は新らしき物と舊き物とを
其の庫より出す家の主の如し』なる比喻の中に充分に奨励されてある。而
して人を判断するに其の氣質と行爲の最後の結果を常に眼中に置く事の必
要は三十二章二十八節以下の父の命を受けし二人の兄弟の比喻の中に示さ
れて居る。馬太傳に従へばイエスが殊更に此の比喻を用ひたのは、税吏や
娼妓の有望なる態度と宗教上の權勢家の盲昧なる福音の拒絶とを兩々對照
せしめんが爲であつた。即ち云ふ所のものに非ずして行ふ所のものが神の

聖旨に適ふのである。

他人に對する關係に就てのイエスの教訓の精神を云ひ表はすに於て、彼の終りの審判の光景に描き出されたる愛の奉仕の認識に勝れるものはない。即ち審判の王は宣言して曰はく『わが此の兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり』云々と云つて居る。あゝ基督教會はイエスの此言が如何に深く徹底せる意味を有するかを曾て充分に認め得たであらうか。

人格に對する尊敬の精神も亦十八章三節に於て人各々嬰兒の如くあるべしとの言や、十八章十節に於ける爾曹この小子の一人をも慎しみて輕視する勿れなる語や、同十四節の『斯の如くこの小子の一人の亡ぶるは天に在す爾曹が父の尊旨に非ず』なる語等に最も明確に云ひ表はされてある。而して人の罪を免さざる精神が愛の生活と伴ひ能はざる事は、十八章二十三節以下に一種の諷刺の言句を以て説かれたる無慈悲なる僕の比喩の中に示されて居る。げにイエスが諷刺の語を用いたのは唯此時ばかりである。人の罪を免さざる所の精神は必然的に生命から閉ぢ出さるゝのである（二八

此等の要
求の窮極
する所

馬太傳に
特有なる
教訓の總
括

ノ三四十三五。

以上述べたる所の馬太傳に特有なるイエスの倫理訓は、吾人が前章に於て認めし所の特徴を一層確實にし、又全然其等と符合する事を示すに過ぎないのである。即ち吾人が如何にしても見逃し得ざる所のものはイエスの熱誠及び眞摯なる人生觀、道徳的生活の誠實にして飽くまで内部的なるべき事の要求、他人に對する關係に於て人格の尊嚴を認むるの必要、而して最後に宗教はイエスにとりて徹頭徹尾倫理的であつた事等である。是等の點に於て彼れの教訓が當時の宗教道徳と著しく相反して居た事を示すと同時に、此の世に對する憫憐の精神が全教訓を一貫して居るを見ねばならぬ。

二 路加傳に特有なる教訓

ホーキンス HAWKINS は路加傳に於ける千百四十九節中の六百十二節が全く此の傳に特有なるものである事を計算した。而して此特有なる材料は Plummer の總括に據れば、六個の奇蹟と十八の比喩とを含んで居る。

路加傳に
特有なる
材料及び
その分

是等の材料の大部分はイエスの教訓に關する記録としては何等の疑を容れる餘地のないものであり、従つて多少精密なる論究を必要とするものである。此の路加傳特有の材料を精査して、其中より物語的の部分と、倫理に關係なき部分と、山上の説教と並行する部分と、吾人が既に論述せる部分とを取り除いて、跡に残れる所のものはホーキンスの類別に従へば以下の表中に網羅する事を得る。

茲に研究
すべき路
加傳特有
の部分

- (一) 路七ノ四〇―五〇。シモン及び或る悪事をなせる婦、及び二人の負債者の比喩。
- (二) 路九ノ六二。『手を犁すきにつけて後うしろを顧かへる者は神の國に當あはざる者なり』。
- (三) 路十ノ二八―三七。善きサマリヤ人の比喩。
- (四) 路十二ノ一四―二一。同四七―五〇。貪慾なる兄弟。愚なる富者の比喩。扑たたる、事多き僕。我が受くべきのバプテスマ。
- (五) 路十三ノ二―五。同六―九。同五一―一六。殺されたるガリラヤ人。

實を結ばざる無花果樹。庭の牛及び十八年鬼につかれたる女。

- (六) 路十四ノ七一―一。同二一―一四。同二八―三三。婚筵の席順。人午餐或は晚餐を設くる時。城を築き戦をなす前の豫算。
- (七) 路十五ノ八一―三二。失はれたる貨幣と放蕩息子の比喩。
- (八) 路十六ノ一―二。同四―一五。同九―三一。不義なる番頭の比喩。慾深きパリサイ人の嘲笑。富者とラザロの比喩。
- (九) 路十七ノ七一―一〇。命せられし以外の勤務の比喩。
- (十) 路十八ノ九―一四。パリサイ人と税吏の比喩。
- (十一) 路十九ノ九―一〇。ザアカイに關する言。
- (十二) 路加に特有なる短文の句。
- (一) 路十二ノ三五―三八。『爾曹腰に帯おびし火燈たいちやうを燃もして居れ云々』。
- (二) 路二十一ノ一九。『爾曹忍耐して其の生命を全まうせよ』。
- (三) 路二十三ノ三四。『父よ彼等を赦し給へ其のなす所を知らざるが故なり』。

路加傳に於ける慈愛の調

以上の中路加傳中のイエスの教訓の著しき二個の方面は、馬太傳の場合にも云ひし如く慈愛と警戒との二面である。而して警戒は凡て愛の生活を送る事を欲せざる者に向つて發せられて居る。而して慈愛の調子は二人の負債者、善きサマリヤ人、失はれたる貨幣、放蕩息子、パリサイ人と税吏の比喩、並びに牛と婦人に關する言、ガリラヤ人とシロアムの塔に關する言、晚餐の準備及びザイカイに關する言等に表はれて居る。次に警戒の調子は恐なる富者、實らざる無花果、婚姻の坐席、無法なる建築者と王、不義なる番頭、富者とラザロ、命令以外の勤務、パリサイ人と税吏等の比喩の中に表はれて居る。而して比喩以外の語に於ては手を鞦すに著くる者、火とバプテズマに關する言並びにパリサイ人の嘲笑に對する答に、同じく警戒の調子が表はれて居る。

以上述ぶる所に據つて見れば、或人の云ひし如く馬太傳には警戒と審判の調のみあつて、路加傳には慈愛と恩恵の調のみあると云ふ見方が如何に誤つて居るかを知るに足る。げに此の特別なる材料に於て路加傳は恩恵よ

慈愛の調と警戒の調とを併せて調はせず

路加傳の特色

りも寧ろ警戒の比喩に富んで居ると云はねばならぬ。されば馬太も路加も二つながらイエスの教訓が必然此の二重の方面を有するものとして書いて居るのである。如何となれば神の生命其の物が慈愛の生命である事を認めると同時に、人生に於ける嚴肅なる眞摯の方面を認めない事は全く不可能であり、而して愛の方面が嚴肅なる人生に伴はない場合には、人生は忽ち萎縮してしまはねばならぬからである。故に慈愛の眞相は單に優しき物語の中に存するよりは、寧ろ警戒の文句中に最も痛切に認められ得るのである。此の點はイエスの教訓の或る批評家が兎角見落す所である。

ホーキンスの調査に従へば、路加傳に特有なる短文の句は總數百十三あるが、其中既に言及されないで直接にイエスの倫理訓に關係あるものは唯二つあるのみである。即ち二十一章十九節の『爾曹忍耐たがひびて其生命を全うせよ』なる語、主の十字架上の一言なる二十三章三十四節の『父よ彼等を赦し給へ其のなす所を知らざるが故なり』と云ふ語との二つである。而して此二語は共に慈愛と警戒との二方面を充分に高調しつゝあるものである

事は云ふ迄もない。以下吾人は路加傳に特有なるイエスの言を研究するに方りて、自然に其材料が二種の部類に區別さるゝ事を見る、即ち所謂『恩寵の比喩』並びに之に關聯せる語と、所謂『警戒の比喩』並びに之に關聯せる語との二つに別るゝのである。

一、恩寵の比喩

先づ路加傳の恩寵の比喩から初めるならば、吾人は第一にシモン及び鬼に憑かれたる婦の話及び二人の負債者の比喩を見出すであらう(七ノ三六―三五〇)。何人もこの美はしき話の解説を試みるに躊躇するであらう。何となれば虚心平氣に讀み去り讀み來るだけにて其の美はしき意味を理解するに充分であるからである。此の話は基督がパリサイ人と食を共にし、且罪人を赦す事に於て彼れの寛宏なる同情と慈愛深き態度とを示す點に於て、飽くまで路加傳獨特の調子を帯びて居る。路加がイエスに於ける是等の點を最もよく活躍せしむる爲に此の出來事を巧に撰び出した事は充分に認め

られ得る。此の全體の出來事は婦人の方に於ける悔悟遷善の信仰と、イエスの方に於ける信任宥赦の慈愛とを一面に高調して、其の背景にパリサイ人の同情の缺乏と猜疑と傲慢とを巧に描き出して兩々對照せしめたるものである。イエスは此の物語に於て當時の二個の明に區別されたる階級に接觸して居る、即ち一方にはパリサイ人あり他方には税吏と罪人とある。而して此の一人のパリサイ人は他の普通の者よりは遙かに廣濶なる度量を示して居るに拘はらず、イエスは天父の愛の福音を以て寧ろ好んで此の義しきパリサイ人よりも指彈されたる罪人等に近づき給ふた事が見えて居る。當時の社會が此の二個の階級に區別されて居つたを云ふ事情は、疑もなくイエスをして宗教的生活の根本性質に謙遜と信頼とを高調せしめ、同時に傲慢と猜疑とを最も大なる罪として誣はしめたる理由となつたであらう。更に傲慢と不信仰との罪はイエスが其ものゝ爲にも他人の爲にも最も悲しまれたるものである。即ち其者の爲には凡ての渴仰の念を妨げ謙虛の態度を傷け、從つて凡ての成長を妨ぐるものは此の傲慢の罪である。而して神

と人との愛を信じ禍を轉じて福となすの信念を抱くに、最も妨害となるものは即ち此の猜疑の精神である。次に他人に對しても、吾人が彼等を理解し同情と尊敬とを以て之に對する上に於て、傲慢と猜疑ほど有害なるものはないのである。イエスが極力此の二つの罪を譴責し給ふたのは之れが爲である。

此の物語は又當時のパリサイ人が預言者の特徴として認めつゝありし所の誤まれる思想を指摘して居る。彼等思へらく預言者たるものは一見直ちに罪人を看破し従つて容赦なく之を排斥し、義人と罪人との區別を明確にする筈のものであつて、同情を以て悪人を正義に導くが如きは預言者にあるまじき事柄であると思つて居た。斯かる誤まれる思想は從來の國家をして悪人に對する刑罰一遍の態度を取らしめたものであつて、現代に及んで世人は徐々に其誤謬を悟り初めつゝあるのである。トルストイが彼れの小説『復活』に於て極力論争せる所のものに大なる力の存するのは即ち此の點である。路加傳は他の福音書の何れよりも明かに、イエスがパリサイ人

分離主義
の誤謬

の謬見と戦ひ給ふたのは獨り其の外形主義に對してのみでなく、寧ろ正義を以て單に惡より分離するにありとせる彼等の消極的正義觀に對して反抗せられたのである事を示して居る。正義は單に惡より離るゝに非ず、惡をして善に移らしむるにありとはイエスの夙に抱き給ふた思想である。然るにパリサイ人の名詮自稱たる分離主義は彼等の宗教的思想の全部に感染して居つた。即ち神は全然罪人より自らを隔離し給ふものであり、従つて神の御心に適ふ善人も亦斯くすべきものであると考ふるのが彼等の宗教的生觀であつた。さればパリサイ人シモンはイエスの柔和なる同情深き罪を赦すの慈愛に於て何等神性の徴を見出さざるのみならず、寧ろそれがイエスの一預言者にも非ざる事の證據であるかと考へた。此の點は路加傳に特有なる彼の放蕩息子の比喻に於て更に明かに現はされて居る。

吾人はシモンの心中の不服に對するイエスの答を、二人の負債者の比喻と其の中に存する彼れの言語に於て見出す事が出来る。イエスは『是故に我れ爾に云はん此の婦の多くの罪は免されたり之に依りて其の愛も亦多き

二人の負
債者の比

なり、免さるゝ少きものは其の愛も亦少し』と云はれたのである（七ノ四七）。即ちイエスの意は彼の女の大きな愛の行爲は赦罪の結果を示し、彼女の深き罪惡の觀念を示し、従つて其の悔悟の實を示して居ると云ふのである。而して彼女の救はるに足るべき信仰は實にイエスの同情に富める愛の態度に依つて惹き出されたものであつて、決して同情なき嚴酷なる譴責及び隔離に依つて此の信仰が起るものではない。彼女が罪を脱して正義に立ち還つた所以のものは正しく此の愛の力であつて、彼女自らが愛の生活に入る事に依つて彼女はよく自らを救ふに足る信仰を得たのである（五十節）。斯くて彼女の罪は赦され彼女は全く神と調和するものとなり、而して天父の子たる眞の平和に入る事を得たのである。

而して單に倫理の世界に於てのみでも、吾人の現代の生活は到る處に此のイエスの同情に富める救の精神を要求しつゝある。過去の時代に於ては其基督教の感化を受けた時代に於ても、幼兒及び悪人を取扱ふ上に於て甚だしき非道の行爲が演せられた事がある。現代の監獄制度及び刑事裁判に

敢て人生
の最高力
に信頼す
る事

關する改良進歩は、最もよく社會を保護するの道として、罪人を有益なる義しき生活に導かんとするイエスの此の愛の精神に基いてなされつゝある。従つて社會改善の大目的はよく人を理解し之を尊敬し其の自重心に訴へ信仰と愛の大なる克己力に於て自らを助けしむるに依りて初めて成就せらる。之は決して感情的姑息主義ではない、寧ろ人を正義に導く爲に最も有力なる勢力を用ひんとするの斷乎たる處置である。即ち肉體上の力や暴行を用ひて單に惡より彼等を制御する事は最も無力なる方法である。判事リンゼー Judge Lindsay の刑法改正事業の最大なる光榮と彼れの成功の秘訣は、即ち彼が敢て此の最高の力に信頼するの方針を採つた點に存する。現に判事リンゼーの成功を是認しつゝある現代に於て、偉大なる新らしき神的原理並びに精神が政府の諸般の事業の上に、又法律の凡ての解釋の上に、而して又社會的並びに行政的活動の各方面の上に、次第に普及し來る事を希望するは決して無謀の舉ではあるまい。蓋し之れ吾人が人生最高の勢力に信頼せんとするの新信仰であつて、イエス自身が敢て用ひ給ふた所の方法

善きサマリヤ人の
比喩

に外ならぬのである。
路加傳の第二の特別なる比喩、善きサマリヤ人の喩は、それが一面愛の行為の實例たると共に、他の一面無慈悲なる精神に對する警戒の比喩たるは勿論の事である（十ノ三〇—三七）。ルカが此の比喩を以て『我が隣とは誰なるか』と云ふ問に答へんが爲にイエスが語り給ふたものとして記して居るのは、果して正當の見地であるかどうかは一個の疑問であつて、余の如きは寧ろ淺薄なる批評が此處に挟まれたものと考へるのであるが、併し少くとも此の比喩が眞乎の愛隣の精神を發揮しつつある事は毫も疑を容れない。而して又此の比喩が誠律の總括を愛なりとせるイエスの言と直接に關聯せるものであるや否やは是亦疑問であるけれども、此の中にイエスが彼れの要求し給ふ愛の實際的例證を語り給ふた事は路加の記録に依りて明かである。

愛の奉仕

此の比喩の細かい點に亘る事を避けて唯三個の要點だけを擧げやう。
第一に愛の生活は必ずや其の表現を要するものであつて、たゞ一個人の

必要に應ずるの愛

心中に樂しまるべき一種の氣分たるのみではなく、寧ろ常に活動的であり奉仕的であらねばならぬと云ふイエスの深き確信が茲に現はれて居る（太二五ノ三一—四六。約一三ノ一—一六參照）。即ち愛は單なる憫憐の情に非ず慈悲の實行である。憫憐の情は祭司もレビの人も恐らく持つたであらう。さりながら彼等は全く自らの勞を厭はず注意周到身を捧げて他人の爲に盡すの愛を缺いたのである。多分彼等は何か急ぎの前約でもあつたのであらう、而して不愉快な途中の故障を避けんと欲したのであらう。
第二に此の比喩は愛とは到る處に當嵌まるべき人生の法則であつて、其の内容は全く無制限である事のイエスの解釋を示して居るものである。イエスの思想に従へば其の愛とは萬人の中に天父の子を認め其の必要に應じて之に奉仕するの謂ひである。されば隣人とは缺乏に於ける凡ての人を指すのであると此の比喩は教へて居る。

寛容の愛

第三に此の物語の主人公が祭司でもなく又レビの人でもなく一人のサマリヤ人である事は決して偶然でない。路加傳の記述が正確でありとすれば、

イエスは教法師の間に對する彼れの答の中心點を高調して、永久の生命とは唯愛のうちのみ存するものであつて、正統神學や宗教的儀式や聖職やに存するではない事を教へられ、異邦人に近き一サマリヤ人の例に依つて、萬人に於ける愛の精神の存在を認める事から生すべき寛容の大精神を發揮せられたものである。

云ふ迄もなく路加傳に特有なる最も著名なる恩寵の比喩は失はれたる貨幣と放蕩息子の比喩である（一五ノ八一—一〇〇。一一—三二）。而して若しも馬可傳に二個の特有なる語あるが故に其の全福音書が保存せらるゝ價值ありと云ふブルース氏の言が眞であるとするれば、吾人は確かに路加傳に就きても此の放蕩息子の一比喩の故のみを以てしても路加傳の永久に保存せらるべき價值は充分であると云ふ事が出來やう。げに路加傳の十五章はルカの最大特徴を發揮して居る特別なる一章であると言はねばならぬ。此の章はルカ自身に取つても又吾人に取つてもイエスキリストの全教訓の眞髓を含蓄して居る。

路加傳十
五章

十五章に
於ける比
喩の配置

是等の比喩が話された場合として路加の傳ふる所に就ては多少の疑問があり、従つて此の比喩の教訓の意義は必ずしも茲に記されたる如き前後の關係に限らるべきでない事は明かである。併しながら余自身に取りては十五章の一二節に於てルカは正確に此の比喩の話された周圍の境遇を示して居る様に思はれる、蓋し此の比喩は茲に記載されてある場合に最もよく適合するからである。イエスの一般人類に對する同情と之を助けんとする希望とは次第々々に其度を強めて來たのであつた。それ故に税吏や罪人は次第に多くイエスに近よりつゝあつた。此の事實が學者やパリサイ人の側に於て次第に激しき批評と反抗とを惹起したのである、何となれば彼等は税吏や罪人がイエスの親愛なる仲間である事を見て、それは彼自身が一個の憫れなる聖者であり宗教上の憫れむべき一教師であるに過ぎない證據であると考へたからである。即ち是等の比較的に見捨てられたる人々をイエスが歡迎して居る事實其のものが、學者やパリサイ人の爲めに眼前の問題を決定して居るのである。彼等は之を以てイエスの眞預言者にもあらざるこ

とを決定した。勿論彼等の心中には是等の憫むべき階級が次第に善に導かれ生命と善心と神とに立ち歸りつゝある事を見て何等の喜悅をも感じないのである。

パリサイ人とイエスとの全然反對せる此等の態度は、今も尙世上に有り勝なる聖善に關する二個の正反對なる意見を代表して居るのである。

パリサイの原理に依れば聖善とは惡の接觸より避くる事であつて、其所には惡は恰も汚がす所の塵芥の如き一個の積極的なる勢力として取扱はるゝのである。故に人其の聖善を保たんと欲せば彼は飽くまで嚴重に惡のあらゆる接觸から自らを分離せねばならぬ。之が聖善の何よりの證據であると考へられた。パリサイ人の最初の動機は善かつたのである。乍併彼等の態度は大なる危險を含んで居つた。即ち彼等自身のみは正義であつて凡ての他人に卓越して居ると自負し、従つて他人に對する同情と諒察とを缺き、他人の爲に盡さんとする一切の善意を有せざるに至つた。勿論之に伴ふ結果は、何等の愛の行爲に出づる事なく、又愛の實行のみが惡に對する

聖善の二見解
其一、パリサイ人の聖善觀

其二、イエスの聖善觀

眞乎の防禦力である事を見遁すに至つた。斯くて聖善は一個の排斥主義となり單に死滅の接觸より分離する事となり終つた。

之に反してイエスの見解に従へば、聖善とは圓滿健全並びに生命との接觸に外ならぬと云ふ事が出来る。イエスは健康が病よりも感染し易く、正義が罪惡よりも傳播し易き事を信せられた。従つて惡に對する最大の防禦は充溢せる仁愛と正義である事恰も疾病に對する最大の防禦が充ち溢るばかりの健康であるが如しとイエスは信せられたのである。故に此の意見に依れば聖者は到る處に彼れの生命を齎らして人をして之に接觸せしめねばならぬ。彼は他の人類より彼自身を隔離するの態度を取つてはならぬ。而して人々をして聖善の域に達せしむる唯一の道は充實せる生命、健全なる生命、即ち神の生命をして不完全なる病弱なる罪深き人々の上に接觸せしむるに存する。即ち惡は善に觸れて自然に消滅する事恰も病の健康に於けるが如しと見られたのである。此の意見は罪惡にあらで寧ろ聖善こそは偉大なる積極力であり且つ其れ自身惡に對する眞乎唯一の防禦力である事

を意味して居る。イエスに取つては聖善は神の生命である。而して其生命は愛である、神の優しき恵み深き憐む事なき進んで與へんとする大なる愛である。之はイエスが常に示さんと努められた所であるが、別けても路加傳の是等の比喻に於て高調し給ふた所である。故に基督の教に従へば吾人が神の同情並びに愛を他人にまで分與する分量に應じて其れだけ聖善に近づくのである。

かくて此の章の三個の比喻即ち失はれたる羊と失はれたる貨幣と而して放蕩息子との比喻は、第一^①パリサイ人の批評に對する直接の答、第二^②彼等自身の感情並びに理性に訴へて神の愛を表はす事、而して第三^③に人の執るべき唯一の態度はパリサイ的排斥の態度ではなく神が萬人に有し給ふ如き忍耐深く熱烈なる愛の態度である事を示して居る。イエスは茲にパリサイ人自身の實驗に訴へて彼等の慈悲心を動かさんと努められた。而して税吏や罪人に對する彼等自身の態度の避くべからざる方向を發見せしめんと試み給ふたのである。之は第四節にある『爾曹の中誰か』云々の語中にも見

此等の比
喩に於ける
イエスの
主張

是等の比
喩の仕組

ゆる訴への語氣に依りて明らかである。尙第四の點はイエスが此の比喻の物語に於て双方の階級にまで優しく接近しつゝある事を示して居る。パリサイ人も亦神の子等で而かも衷心最も多くの缺乏を感じつゝある仲間ではないか。天の父は同じく彼等をも探しつゝ居らるゝのである。故にイエスはよし彼等が所謂罪人の如く直ちに應じ來らぬにしても、熱誠以て彼等をも救はんご努められたのである。即ち第三十一節に於ける『子よ』と呼んで長子に訴へられた父の語は、此のパリサイ人に對する直截にして而も柔和なる訴の語調である。

以上三つの單純にして適切なる物語即ち迷へる羊紛失せる貨幣及び放蕩息子の三比喻は、自然に基督の温情を通して彼の口より迸り出でたるものであらう。

是等の比喻の仕組は極めて單純直截なるものであつて何等特別の研究を要するものではない。且又三比喻全體を貫いて居る大眞理は同一の眞理であつて、別々に研究する必要もないのである。余は放蕩息子の比喻に於け

る長子の物語が固くイエスの言に屬するものでない云ふブライデル Pfaider の説を正當なりとする何等の理由も見出し得ぬ。げに其の部分はイエスが此物語をせられた場合の全體の境遇に最もよく適合して居るもので、パリサイ人一般の苦情に對するイエスの答辯中の最も直截にして有力なる部分であると云はねばならぬ。そは比喻の他の部分に全然相應しきものである。寧ろイエスの思想は其部分無しに完備するものと云ひ得ぬであらう。

勿論余は是等の比喻の主要なる意義は宗教的であつて、其目的は神の恩恵深き倦む事なき積極的愛を示すにある事を忘るゝ者ではない。乍併同時に又是等の比喻がイエスの倫理的教訓の最も適當なる發表として見らるべきものである事を信せねばならぬ。何となれば茲に神にまで屬せられて居る愛の精神は同時にイエスが萬人に對して要求さるゝ所の理想的態度の描寫であるからである。故に是等の比喻はイエスの倫理訓の眞髓を發揮するものであつて、同時に彼れの『神の福音』の中心思想を披瀝するものである。

宗教的
形式に於ける
倫理訓

神は作業者
に非ず
主は非作業者
に非ず
又刑に執し
行非ず

ある。依て吾人は先づ單純に此の比喻の宗教的意義を記述する事に依つて其の中に含まれたるイエスの倫理訓を最もよく闡明する事を得るであらう。

路加傳十五章の比喻の顯著なる大眞理は然らば以下の如くであらう。

(一) 神は當時のパリサイ人や今日の或者が今尚ほ考へる如き、唯勝手な規則を作つて無慈悲無容赦に之に照らして人々を審判し又は報償する所の作業者オウスガイ又は法律の制定者ではない。人は須らく神に關する此の誤まれる胃潰の思想を抛棄せねばならぬ。神の嚴格は愛の誠マケに外ならぬ、即ち一人の子供を彼れの大きな生命に引着け彼自身にまで立ち歸らしむる神の熱心の發現に外ならぬ。さればパリサイ人の罪人に對する嚴格一遍の態度を以て之を神の性質に當嵌めるが如きは以ての外の僻事である。三比喻の何れも極力斯かる謬見を否認して居る。試みに斯かる謬見が成立つとせば其結果は如何であらうか。つまり左の結果に到着するであらう『大切な羊は迷ひ去つた、之を誼ふて勝手に行く所に行かじめよ。個人的財産の一部たる貴き貨幣は紛失した。探す勿れ求むる勿れ、唯忘却し去れ。愛兒は父の家

より離れ去つた、父の凡ての愛情から自らを離れしめた。彼は豕の食物を食ふ運命に陥るのは當然である。彼を誼へ而して忘れ去れ。』比喻はイエスが左様な神を承知して居らぬ事を示して居る。彼は罪人に對して斯かる態度を取るまじき事を示すべく、人が迷へる小羊に對してすら多くの慈悲を有するではないかと訴へられたのである。

(二) 神の愛顧を意味す。イエスは此の比喻に於て神が常に人類を顧慮し給ふ事を主張されて居る。『世には我が如何になるとも顧みる者がなし』と云ふ如き自暴自棄の絶望の感念が時として人心を襲ふ時に當りて、神汝を顧み給ふと云ふ此イエスの保證はげに無上の福音である。然り神は吾人を顧み天は吾人に就て無限の興味を有するのである。此の思想は比喻中に度々繰り返されて居る(七、一〇、二二、三二節)。神との密接なる同情より來る聰明睿智は最も明確に物の價值を判断するものであるが、神は其の同情と聰明とを以て吾人を顧み給ふのである。結局何物か果して人間の如く偉大なる物があらうぞ。人間の如き貴き價值ある物果して何處にか居らう。

神の愛顧
と愛慮

一個の動物は時として愛すべきものがあらう、貨幣も亦尊重すべき價值があらう。さりながら何物を以てか一個の失はれたる息子に代へる事が出来やうか。距離も隔絶も死も衰弱も不幸も屈辱も以て子に對する親の愛情を冷却せしむるに足らない。寧ろ是等は親の悲哀を増し加ふる原因となるのである。さりながら是等の父の悲歎は如何に大なるものがあつても、一人の人間が正義と生命と神とに叛いたと云ふ一事實に比べて見れば眞に數ふるに足らぬものである。人心が其の最大の慈悲心を發揮した場合から推して考へても、神が此無限の伏能を有して居りながら誤つて迷ひ出でたる自己の愛子に對して如何ばかりの愛慮を抱き給ふかを察するに餘りあるであらう。羊牧者ですら迷へる羊を顧み、婦人すら失へる貨幣を求め、人間の父すら不孝の放蕩兒を顧みるではないか、何ぞ況や慈愛限りなき天父に於てをや。之はイエスの心に取りて最も單純なる當然の眞理である。『爾曹は神の子に非ずや』とはイエスの反覆茲に主張せる所である。神は愛慮し給ふ、汝の不在は家庭に於ける甚だしき缺陷である。他の羊等は羊の中にあ

り、貨幣の殘部婦人の手中にあり、而して他の兒等は家庭の中にある。然るに汝は獨り離れ去つて又歸らず、一種の物足らぬ悲しき感に常に全家の中にあり。如何なる喜悅も汝無しに全からず、否寧ろ凡ての喜悅は汝の在らざるが故に悲しみの種となるではないか。げに神が罪の子に對する愛顧の情緒は之に優りて美はしく描き出された所はないと思ふ。

神の愛を
求むる

(三) 凡て是等の比喻は神が人間を顧み給ふの故を以て、彼は進んで迷へる人を捜し求め、人の彼に戻り来るを甚だしく喜び給ふ事を示して居る。此點に就いてエルスキン E. Skene が云ふた言は眞である、曰はく『基督教とは何ぞや。人に對する神の無限の愛を信する事は是れなり。神は迷へる者を捜し索めん爲に來り而して遂に之を見出さずんば已まざるなり』と。此の神の求むる所の愛及び求め得たるの喜は、前條神の顧慮の思想の中に自然に含まれて居るものであつて今更詳述する必要を見ない。比喻中の多くの詳しき形容は神の倦み給はざる搜索追求と戻り來りし時の大喜悅とを明示して之を離別の悲哀と對照せしめて居る。吾人は人間最高の愛の現はれた

人は神の
爲に造ら

る犠牲的忍耐並びに艱難の中に、神自らの大愛の姿を認める事が出来ることイエスは主張せられたのである。神は實際吾人の心中に斯く物語り給ふではないか。イエスは悪人が神に歸り行く時に『天に於て喜びあらん』云々と云はれて居るに反して、當時のパリサイ人はブラムマーの引用せる語に依れば『神に叛ける者が此の世より亡ぶる時に神の前に喜あらん』と云ふ語を發して居つたこの事である。此語は即ちイエスが飽くまで人を神の子と見て居るに反してパリサイ人等は毫も其の觀念がない事を證明して居るではないか。

(四) 特に是等の比喻は人間は神の爲に造られ神と生活を共にすべく造られて居る事を意味して居る。イエスの思想に従へば人が神より離るゝ事は吾人が必然零落すべき『遠國』に旅立ちする事である。神は一切の愛の根源であるから彼と共に在る事は凡ての生命凡ての光明及び凡ての喜悅を意味するのである。故に神と共に在り神の大なる目的に參與する事にのみ人生の眞意義が存するのである。而して之は結局人が神に歸り行く時に彼は

初めて『自己に歸る』のである事を意味する。即ち人は斯くして自己を見出し郷里に歸り永久の生命に達するのである。是は宗教の眞意義に就ての基督の觀念に外ならぬ——即ち宗教とは生命である、神自身の生命を分與さるゝ事である。

無慈悲の精神

(五) 放蕩息子の比喻の終りの部分は夫自身の特別な教訓を有して居る。人は肉慾や汚情に依ると等しく無慈悲の精神を抱く事に依つて天父より離れ去る事が多いとの教訓である。實際此の比喻は二人の失はれたる息子の比喻と稱すべきものである。

二人の子の何れの場合に於ても罪は父の態度と意思とに倣はない所に存する、即ち神の犠牲的な眞愛の生命に學ぶ事をしない所に存する。弟が父の家に戻り來り父と生活を共にするの幸福に入つた事を見て少しも喜ばない所の長子は彼自身決して父の眞の子ではない。彼れの無慈悲なる精神は遠國の遠きが如く父の心より遠く隔つて居る。是ぞ神よりの距離である。故に父は此の長子を受して彼をも救はんとする希望から頻りに彼れに勸め

長子の罪

(二十八節) 優しく説得し (三十一節) 一種の悲しみを以て之を譴責したのである (三十二節)。

此の長子はイエスが責めんとしたるパリサイ人の精神其の儘を代表するものである。げに吾人は弟の罪と兩々對照して兄の罪をも認めねばならぬ。即ち彼は何等眞の愛を有しない、罪惡又は悔改に就ての父の至情を解する事が出来ない、其の子の戻りしを喜ぶ父の喜に入る事が出来ない、而して一匹の羊を捜し得た喜を分つ隣家の人々の好意にすら及ばないのである。是れ昔も今も共通なるパリサイ的精神ではないか。

亡ぶるに神より離れる事な

(六) 此の比喻の示す所に依れば失はるゝとは即ち神より離れ去る事である。げにエマルソンの云ふた如く『放蕩とは多くの時や金を浪費する事ではない、唯汝の生涯の進路以外に之を費消する事である』。その如く墮落とは神が吾人に要求し給ふ進路以外に迷ひ出づる事である、即ち家より離れ父の前より去り其の愛の精神に背馳する事である。之に反して救はるゝとは唯神と生命を俱にし其の愛に與かる事に外ならぬ。是等の意味を外にし

て滅亡とか救済とか云ふ語は全く無意義である。

以上余は迷へる羊と失へる貨幣と放蕩息子の三比喻に於けるイエスの明白なる宗教的教訓を可成り詳細に説き明かさんと努めた。何となれば其中に存するイエスの倫理的教訓の意味を闡明せんと欲せば先づ勢ひ其宗教的教訓から初めねばならぬからである。而して是等の比喻に於ける倫理訓は自然に以下の如く概括せらるゝであらう。

(一) 若しもイエスの思想に於て神は作業主若しくは法律制定者の態度を取り給はぬならば、況んや人間が其の同胞兄弟に對して斯かる態度を取るべきでない事は明かである。

(二) 若しも神ですら絶えず凡ての人間を顧み給はざるを得ざるに於ては、況んや人が其の相互の關係に於て互に他人の喜憂を顧慮すべきは云ふ迄もない。イエスの倫理は何人の善事も吾人に取つて無關係の事ではなく、而して他人が正義と善と幸福と生命とに離るゝ事は吾人に取つて決して對岸の火災視すべき事ではない事を要求する。

此等の比
喩中の倫
理的教訓

(三) 更に明かに是等の比喻の教訓は、イエスの倫理が理想とする生活は其の中に積極的なる進取の性質を有せねばならぬ事と、何人も自己に立ち歸り眞生命にまで到達する事に於て初めて大なる人生の喜悅を見出す所のものである事を示して居る。

(四) 而して人は神の爲に造られ神と生活を偕にすべき性質のものであるとの宗教的原則は見遁すべからざる倫理的意義を伴ふて居る。茲にも亦吾人の凡ての道德的奮闘並びに凡ての社會的努力の根柢たるべき信念が存して居る、即ち人は根本的に倫理的存在物であつて、其の倫理的理想の實現を外にして豊富なる生活を營む事は不可能である事、而して彼は彼れの道德性が自らに要求する所の凡ての物を成就するに非ざれば、決して眞の自己を見出す事は出来ない事を信するの信念である。

(五) 而して放蕩息子の比喻の終りの部分に於ける倫理的教訓は是亦決して見遁し得ぬものである。そは人が眞乎に倫理的なる生活に達し得ざるのは、決して唯肉慾や汚情の爲のみでなく、確に又他人に對する同情の缺乏

から生ずるものであるとの明確なるイエスの洞察を示して居る。是は人生を愛として見る所のイエスの根本的倫理觀の自然の結論たるに外ならぬのである。

是等の比喩の倫理訓と密接の關係あるものはイエスが彼のザーカイに向つて『それ人の子は失ひしものを尋ねて救はん爲に來れり』と云はれた一言である。イエスの倫理訓の實現は即ちイエスの生涯其物である。

是等の恩寵の比喩と關聯して路加傳にのみ特有なるイエスの短き三語がある。第一は凡ての制度以上に愛の尊重すべき事、例へば是等の制度の最も大なるものである安息日ですら『人の爲に設けられたるものにして人は安息日の爲に設けられたるものに非ず』と云ふ確信を表はして居る。吾人は曩にパーキットの重證句並びに馬可傳の研究に於て此の點を明かにした。路加傳には以下の如くある『主かれに答へて曰ひけるは偽善者よ爾曹のおの安息日には其牛や驢をとき厩より牽出して水を飲まさる乎、況て此婦はアブラハムの裔なり、十八年サタンに縛られたる其結を安息日に解く

愛は凡ての制度以上位す

べからざらん乎』(十三ノ一五—一六)。イエスが茲に感じられた義憤は、彼の反對者が示せる純粹なる法律的的精神並びに慈悲の行爲に對する其純然たる無頓着に對して發したのである。イエスは茲にも亦其の行爲と言語とを以て、凡ての儀式又は制度の最高なるものすら、唯愛の故を以て人の爲に盡すと云ふ基礎の上にも其存在の理由を有する事を論じられた。従つて如何なる場合にも其等の制度は愛の奉仕の妨害となる事を許さないのである。

純然たる無私の奉仕の精神は此外十四章十二節より十四節までに鼓吹されてある『又かれを請る者に曰ひけるは爾午餐あるひは晚餐を設くるごとき朋友兄弟親戚また富める隣の人を請くなかれ、恐らくは彼等また爾を請きて其報答を爲さん、爾筵を爲さば貧乏痲疾跛者瘖者などを請け、然らば爾福なるべし、蓋彼等は爾に報ゆる事能はず、義しき人々の廻らん其時なんぢに報答あればなり』此の全教訓の下に横はる原理は明かに是である、曰はく汝自身と汝の奉仕とを最も必要ある所に與へて報償を得んが爲に與へ

報償を思ふに必ず愛を實行す

てはならぬ。愛の生活を常に指導する所のものは『必要』であつて『報償』ではない。余思ふにイエスは茲に一定の社會的法則を定めて居るのではない、併し彼は事物の根柢に到達する大原理を宣言して居るのである。彼は生涯の根本的動機を決定せんとする凡ての人々に向つて提出して居る所の問題は思ふに以下の如くであらう。汝は眞に愛の名に於て人の爲に盡さんと欲するのであるか。汝は決して報償の爲ではなく單に人の缺乏を充す爲にのみ眞に無私無我なる精神を以て他人に盡すのであるか。實際最も缺乏を感じて居る者は却つて彼の富める者又は汝の親戚の間にあるかも知れない、彼等は恐らく汝の友情及び深切を最も切に要求するであらう。他の一方に於て普通に貧乏人として認められて居るものでも、招待を受けて却て甚だしく恩をきせられた様に思ふて一種の耻辱を感じる場合がないことも限らぬ。其場合に於て汝は彼等に對する尊敬を示す或他の特別なる方法を講せねばならぬ。要するに根本原則は無私の愛が他の凡ての場合に於けるが如く、社交的の生活に於て吾人を指導する力であらねばならぬ事を意味す

救す所の愛

るのである。疑もなくイエスの此原理は常に社交的生活を大に單純にするのみならず、非常に社交其の物の意味を價值多からしむる事は毫も疑を容れない。

以上路加傳に特有なるイエスの恩寵の言は最も適當に十字架上のイエスの祈禱を以て其の掉尾の一言とせねばならぬ、即ち『父よ彼等を免し給へ其の爲す所を知らざるが故なり』と云ふ情意並び至れる驚くべき愛の祈りである。勿論之は故意ある教訓ではない、併しながら此の一言は疑もなく彼が眞生命を辿る所の凡ての弟子の特徴であらねばならぬと信じられた所の精神を自ら其行爲に於て實現して居る。恰も彼が神は人の罪を免す所の愛に於て缺くる所があらうとは想像し得なんだ如くに、彼は人の愛が斯かる場合に斯かる祈禱となつて發表さるゝまでは決して其完成に達したものでないと思へられた。斯かるイエスの考が自然と此の驚くべき祈りとなつて流露し來つたのは毫も怪しむに足らぬ。

二、警戒の比喩

吾人がイエスの教訓の恩寵の方面より眼を轉じて、審判並びに警戒の方面の研究に移る時は、曩に路加傳の大體論の場合に論じた如く、其十一章より十六章に至る中央の全部は、凡て是れパリサイ的精神に對する種々なる警戒として認めらるべきものなるを忘れてはならぬ。此處に屬する比喩及び教訓は大略左の如くである。

愚かなる富者の比喩、附けたり、世上の事物に對する利己的耽溺に就ての警戒（二二ノ一四—二二）。

ガリラヤ人の虐殺及びシロアムの塔の崩壊の出來事。附けたり、災難に伴ふ無慈悲なる判断の警戒、並びに個人に於ける靈魂の絶對的要求を忘るる事の警戒（二三ノ一—五）。

果を結ばざる無花果の比喩。附けたり、無益なる生涯並びに唯無害なる生活に對する警戒（二三ノ六—九）。

宴會の首座の比喩。附けたり、自負驕慢に對する警戒（二四ノ七一—二）。無謀なる築城者及び國王の比喩。附けたり、豫め弟子たるの覺悟をなす

べきの要求（二四ノ二八—三三）之と聯關して九章六十二節の犁に手を着けて後を顧みる云々の語、及び十二章四十九節以下の『我れ地に火を投げ入れん爲に來れり』云々の語あり。

不義なる操會者の比喩。附けたり、靈的生活に於ける先見の明の必要、

及び富の善用に對する要求（二六ノ一—一三）。

富者シラザロの比喩。附けたり、富の濫用の避くべからざるの結果の警戒（二六ノ一九—三一）。

規定外の奉仕の比喩。附けたり、眞生命を辿らんとする者の大なる勞役の必要（二七ノ七一—一〇）。

パリサイ人と稅吏の比喩。附けたり、自ら足れりとする傲慢の譴責並びに謙遜なる悔悟の獎勵（二八ノ九—一四）。

愚なる富者の比喩に於て（貪慾なる兄弟の序文的出來事と共に）イエスは常に貪慾の精神に對して警戒しつゝあるのみならず、亦斯かる精神を防ぐに足る高尚なる動機を與へつゝあるのである。イエスの貪慾なる生活に

對する全議論は要するに左の一語で盡きて居る、曰はく『夫れ人の生命は其の所有の饒なるには依らざるなり』此の節に於ける貪慾を制するの動機に就てのイエスの教訓は以下の如く總括され得る。(一)生命は所有の夕暮に存せざる事。(二)所有の増殖よりも自我の成長を重んずべき事。(三)物質的繁榮が人の靈性を鈍らす力の甚だ危険なる事。(四)物質的目的は凡ての神聖なる大望心を防遏する事、即ち人は唯倉庫を建て貯藏物を増すべけんも、自己の生命を豊富にし神の國に於ける共同利益を増進する事能はざる事。(五)貪慾なる生活は終局避くべからざる敗亡を意味する事、即ちそは神に就いて富めるに非ず、神と永遠の目的並びに生命を共にする事は出來ないのである。

用心深き
僕の比喩

用心深き僕の比喩は(二二ノ三五—四八)は全部路加傳に特有なる物語に非ざれども、無用心なる生活と用心なる生活との對照並びに警告に於て他の福音書に比類なきものがあるから、吾人は茲に之を研究するを適當と考へる。イエスはパリサイ的精神なるものは最初より人心に存して居るの

ではなく、唯既に與へられたる内部の光を重する事なく、従つて後の光をも曇らす所の怠慢の精神より自然に人心に浸入するものであると見られた様である。ピーポデー教授 Prob. Peabody の言を引くならば『心靈的無感覺は智識的缺點に非ずして寧ろ道德的缺點なり、即ち人生の放漫にして無用心なる習慣より來る所の單なる懶惰及び飽滿の状態に原因する』。道德的盲目(五四—五九)及び嚴肅なる危機に處するの無能力(四九—五三)は無用心なる怠惰なる生活の自然の結果である(三五—四八)。故に凡ての修養及び進達に向つて拂はるべき代價は注意深き戒慎に外ならぬ。此の戒慎の缺乏はイエスの思想に依れば人生の最大強敵の一に屬する。而して此の物語に於てイエスは以下の教訓を與へられて居る。

(一) 凡ての人は生命並びに才能を信託せられたる家僕である。故に各人は其主人の歸來を時々刻々待ち受くる所の留守居の僕たる油斷なき注意を必要とする(三五—三六)。

(二) 吾人の注意深き忠實は吾人の主の賞讃と云ふ大なる報償を値する。

加之主は彼自身を益々大なる分量に於て吾人に信托する。神は大なる信任を以て吾人を試むるに方つて決して吾人の缺點なき忠誠を看過し給はない。吾人の生涯其物は其所に祝福を受ける (三七)。

(三) 吾人の試練が大なれば大なる程生涯の名譽は偉大である (三八)。

(四) 怠慢と不用心とは常に危険である。人は自己の最善を盡すに非ざれば決して安全幸福の時を有する事は出来ない。故に『爾曹も豫じめ備へせよ』と云はれた (三九—四〇)。

(五) 他人を信用せんと欲せば先づ自ら信用さるゝ者とならねばならぬ、即ち他人に對する信託の動機と自己が信託さるゝ動機とは同一である事。

(四一—四八に於てイエスは弟子を人の指導者と見て此の比喻を語られて居るのである)。使命の高きに従つて信任の度並びに之に對する戒慎の度は加つて来る。人の指導者たる者は愈々以て不用心の生活を送つてはならぬ。彼は其の親友の信頼に背かざるを期せねばならぬ。而して各自は若しも自ら失敗するならば彼は管に自らを危くするのみならず又實に多くの他人を

害する者である事を覺悟せねばならぬ。之に反して若しも彼が其の任を全うするならば彼は獨り自らを幸ひするのみならず、又大いに他人に力を添へる者である事を要する (四一—四三)。

(六) 忠誠は更に大なる信任を意味する、即ち次第に大なる人生の機會が身上に蝸集て来るのである。されば管に既に與へられたる信任の故のみならず、將來に於ける更に偉大なる信託の故を以て、吾人は益々現在の使命に忠實であらねばならぬ。然らずんば將來の機會は忽ちにして逸し去るであらう (四四)。

(七) 吾人は既に有する信任の位置が、利己的專横の爲に多少は其信任の権力を用ゆる事を許すであらうと云ふが如き巧なる誘惑に抵抗せねばならぬ。爾自身の成功の阿諛に對して益々戒慎せねばならぬ (四五)。げに成功と權力とは困難失敗よりは寧ろ大なる誘惑となり勝ちである。人が墮落し行く徑路は、初めに僅かの成功、次に多少の油斷、怠惰、自負自慢、安逸を貪り、他人の上に暴威を振ひ、成長は止まり、遂に腐敗墮落失敗に終る

と云ふ普通の順序を取るのである。

(八) 信[○]托[○]の[○]濫[○]用[○]の[○]正[○]確[○]に[○]し[○]て[○]避[○]く[○]べ[○]か[○]ら[○]ざ[○]る[○]刑[○]罰[○]は[○]常[○]に[○]吾[○]人[○]の[○]念[○]と[○]す[○]べき[○]所[○]で[○]あ[○]る[○]。人[○]は[○]誤[○]魔[○]化[○]し[○]て[○]忠[○]誠[○]の[○]褒[○]美[○]を[○]貰[○]ふ[○]事[○]は[○]出[○]來[○]な[○]い[○]。彼[○]れ[○]の[○]建[○]築[○]が[○]賤[○]物[○]で[○]あ[○]る[○]故[○]に[○]一[○]朝[○]難[○]局[○]に[○]處[○]す[○]れ[○]ば[○]根[○]柢[○]か[○]ら[○]崩[○]れ[○]て[○]しま[○]ふ[○]。字[○]句[○]通[○]り[○]に『其[○]の[○]報[○]ひ[○]を[○]不[○]信[○]者[○]と[○]同[○]じ[○]う[○]す[○]べ[○]し』で[○]あ[○]る[○](四六)。

(九) 審[○]判[○]は[○]人[○]の[○]有[○]す[○]る[○]光[○]明[○]の[○]多[○]少[○]に[○]準[○]ず[○]る[○]。多[○]く[○]與[○]へ[○]ら[○]る[○]者[○]は[○]多[○]く[○]要[○]求[○]さ[○]れ[○]る[○]。汝[○]の[○]信[○]任[○]大[○]な[○]る[○]に[○]從[○]ひ[○]爾[○]が[○]戒[○]慎[○]は[○]益[○]々[○]深[○]く[○]爾[○]の[○]忠[○]誠[○]は[○]益[○]々[○]大[○]であ[○]ら[○]ね[○]ば[○]な[○]ら[○]ぬ(四七—四八)。

以上不戒慎なる生活に對する種々なる教訓はイエスの宗教的確信から出でたるものであるけれども、同時に又明確なる倫理的解釋を許すものであつて、嚴格に云へば彼れの倫理訓に屬するものと云はねばならぬ。蓋し倫理的觀念は常に行爲の動機となるものであるからである。

ピラトがガリラヤ人の血を其の供物に混ぜし事の物語とシロアムの塔倒れて壓殺されし十八人の物語は、『凡ての人々よりも益りて罪ある者と意ふ

此等の教訓の動機は倫理的なり

悲慘なる出来事の教訓

果を結ばざる無花果の比喩

や、我れ爾曹に告げん然らず爾曹悔改めずば皆同じく亡ぼさるべし』と云ふイエスの問答に依りて明かなる如く、是れ第一に災難に罹かりし人々の上に無慈悲なる判断を下してはならぬ事と、第二に何人も常に自己の中に靈的生命の充實を缺いてはならぬ事の警戒を與へるものである。茲に與へられたるイエスの教訓の眞意は要するに内的生命の必要と云ふ事に歸する。即ち生命は唯生命より來る、人は自己の中に生命の種子を有さねばならぬ。人自ら悔改めて新らしき心を有するに非ざれば何事も成就されない。

果を結ばざる無花果の比喩は(二三ノ六—九)路加傳の配置に依れば直ちに前條の比喩に續くものであるが、こは單に無害なる結果なき生活に對する明かなる警戒である。茲にも吾人はイエスの眞摯なる人生觀を見る事が出来る。マテオの言に従へば『半ば神的なる生存の嚴肅なる特權を吾人が有する限り、不生産的なる無害の状態に於て此の生を送る事は最早決して無罪ではあらぬ』。果を結ばざる生活はそれ自身無益であるのみならず、有益なる生活を養ふべき地を空しく塞ぐものである。斯くイエスの教

訓の一片に於ても積極的なる調子が認められる。イエスは單なる消極的正義に於て満足されなかつた。人生は積極的に有益でなければならぬ。

宴會の首席の比喻（二四ノ七一―一二）に於てイエスは『凡そ自ら高ぶる者は卑ひげされて自ら卑ひげたる者は高くせらるべし』と云ふ大眞理を教へられた。勿論吾人は自ら高められんが爲に故意に謙遜を装ふ所の外交的傲慢を獎勵してはならぬ、蓋し品性に對する眞個の報償は品性なしに得らるべきでない事はイエスに取つて自明の理であつた。さればイエスは眞個の謙遜と眞個の高舉とを教へられたのであつて、心にもなき外形の謙遜は決して眞實に高められ得ないのである。

謙遜なるものゝ高めらるゝ事に就ての此の教訓は彼のパリサイ人と税吏との比喻の中にも更に明かに高調されて居る。パリサイ人と税吏との比喻に於てはイエスの顧みる所は毫も兩者の外見的行爲如何ではない、唯一方に於ける自負的傲慢と他方に於ける眞の悔悟の謙遜である。而してイエスは前者の精神が一切の成長進達を不可能ならしめ、又善賜を受くる事能は

ざる事が明白であると同時に、後者の精神はあらゆる成長あらゆる進達並びにあらゆる善事の根源其物である事を知り給ふた。彼れ曰はく眞個に謙遜なる者こそ眞個に高められるであらうと。

吾人は以上二個の比喻の教訓は實際同一である事を認める。神に對しては飽く迄信頼し、人に對しては飽くまで誠實なる、眞個の謙遜なる精神を有する人は、凡ての善事に着々進歩する道を取りつゝあるものであつて、彼自身が着々善且大になりつゝあるに相違ない。故に彼は人の知ると知らざるに拘はらず眞個に高めらるゝのである。而して人の稱讃も亦早晚其の上に来らざるを得ない、何となれば世界は到る處に眞の眞個ある者を要求するからである。斯くて人の眞個並びに眞名譽は首席に座る事ではなく唯之に座るの眞個を備へる事である。

無謀なる築城者並びに無謀なる國王の二比喻は（二四ノ二八―三三）豫じめ費用を計算する事の必要に關するイエスの勸めと『されば斯くの如く爾曹其の所有を盡く捨てざる者は我が弟子となる事を得ず』と云ふイエス

の註釋に依れば、此の比喩に於てイエスの明かにしたる信念は、吾人が豫じめ最後に至るまでの全費用を計算すると同時に、一切の利己的要求を喜んで抛擲するものに非ざれば、眞生命の弟子たる事出來ないと云ふ眞理である。言ひ換へればイエスの言は以下の如くである、曰はく眞生命の要求の意味を誤解する勿れ、召命の真相に爾の目を閉づる勿れ。而して凡て之に對して準備しつゝあれ。又彼の主義の爲め戦陣に臨む兵士や、眞理の大膽なる探求者や、熱烈なる戀人やの如く喜んで萬事を抛擲し去つて、而して宜しく宣言せよ『我が上に來る如何なる招致も我が捧げんとする犠牲の精神に超ゆるの要求をなす事能はず』と。以上は吾人がイエスの意を付度したる此の比喩の意味である。而して最後まで費用を計算することは、常に自己の所有を捨てるのみならず一切の利己心を捨つるの意味である。恰も忠勇なる軍人が君主の爲に身命其物を捧げて毫も悔ひないが如くである。げに吾人は自我を抛棄するに非ざれば眞の友情をすら全ふする事は出來ない、況んや靈的生命の完成に於てをや。

イエスの
英雄的召
致

路加傳に特有なる之れと同意義の語は『手を犁すきにつけて後を顧みる者は神の國に適あはざるものなり』(九ノ六二)の一言である。凡て眞理と正義と犠牲の愛の生活に於て彼に従はんことを欲する者は須らく先づ其の代價を計算せねばならぬ。既に計算すれば中途にして後を顧みるべきでない。イエスの衷情に存する人に對する眞の親切其物が一時的の好餌を以て人を誘ふに忍びないものがあつたのであらう。後に失望せんよりは初めから覺悟して掛かる事は幸福である。されば彼等はイエスの要求が如何に嚴格であり、戦はるべき奮闘が如何に慘憺であり、之に参加する人々が如何に眞面目であらねばならぬかを初めから理解する必要がある。イエスが是等の驚くべく勇敢なる要求をなす事を躊躇されなかつたのは、人類に對する彼れの偉大なる信仰を示すものであつて、彼は是等の嚴肅なる警告に拘はらず人が奮然起つて其の召しに應ずる事を豫期されたのである。彼れの主張は道德的生活に於ては斷じて半信半疑の態度を許さぬと云ふのである。中途半端はんぱは道德界に於ける禁物である。是は吾人が後章山上の説教の研究に於て見

危機に對する覺悟

んどする所の靈的生命の必然的統一に就てのイエスの信念の一部分である。『我れ火を地に投げ入れんが爲に來れり、我れ何をか欲む、既に此の火の燃えたらん事なり、我れ受くべきのバプテスマあり、その成遂げらるゝ迄は我が痛みいばかりぞや』(二二ノ四九―五〇)なる語に於てもイエスは同一、思想を自らに適用されつゝある事を思はざるを得ない。げにイエスは或嚴肅なる危機が自らを待ちつゝある事を見て早くも既に其れが爲に自らを身仕度されたのである。而して此の同一精神にまで各人を激勵されたのである。

人生の苦役に辟易する勿れ

規定以外の勤務の比喻も亦同一精神である(二七ノ七―一〇)。凡ての比喻に於けるが如く茲にも亦詳細の點は一々適合するものではない。イエスは唯宗教的生活の弟子たらんものは、日常最も苛酷なる勤務に對して忍耐深き準備の態度に居らねばならぬ事を、人間の主人と僕との關係に於て適當なる比喻を見出されたのである。此の比喻は徹底的なる倫理的生活を送らんと志す人が當然有さねばならぬ所の精神を暗示して居る。即ち其人は

忍耐持久して己の靈魂を救へ

金錢財寶に關する教訓

如何なる場合に於ても唯自己の義務を盡しつゝあるのであつて、何物も無く彼をして義務以外の奉仕を盡したと云ふ事を誇らしむるに足らぬものである事を謙遜に自認せねばならぬ(二七ノ一〇)。

勤務外の勤務の此の比喻と好一對たるものは、路加傳に特有なる『爾曹耐忍びて其生命を全うせよ』なる短き一句である。何となれば此の意味深長なる一語は嘗にエルサレム滅亡の危機に處するの道を示された許りではなく、更に深く眞理の弟子たらん者が終りに至るまで必ず有せねばならぬ所の忍耐持久の精神を鼓吹するものであるからである。

路加傳十六章に於ける二つの比喻に於て、イエスは十二弟子の一般的訓練の方針を繼續して、彼等を彼自身の精神並びに思想にまで導き、同時に彼等を圍繞するパリサイ的精神に對し、彼等を保護せんと努められて居る。是等の比喻に於て先づイエスは金錢に對するパリサイ人の貪慾を指摘しつゝある(一六ノ一〇、一一、一四、一九)。蓋しイエスは貪慾の精神は究極する所ろ人心の全部に食ひ入る事恰も劇薬の物を腐蝕するが如きものある

事を見られたのである。故に十六章の全部はパリサイ人の金銭慾に對する警戒と見る事が出来る。路加傳に於けるイエスの教訓の此の部分は、例に依つて人の内部的生命の道德的並びに心靈的法則の避くべからざる結果を指摘するものである（愚なる富者の比喻参照）。

不義なる操會者の比喻は、富の善用若しくは靈的生活に於ける先見の必要を示されたものと稱すべきである（二六ノ一—一三）。此の比喻はブランマーの所謂『驚くべき放膽的な文學』と見らるべきものである。此の比喻は凡ての比喻の解釋が一個の主要點を眼目とせねばならぬ事を示す最も顯著なる實例の一つである。若し此の主要の一點を常に眼中に於て考へるならば、其の文學は必ずしも左様に驚くべく粗笨なるものでない事を見るであらう。勿論操會者の行爲は正しくあると云はれたのではない、彼は不義なる操會者と稱せられてある。賞賛すべき唯一の點は彼れの現在の機會を利用して將來に對する備をなすの先見の明である。イエスは此の比喻の解釋に就いて、八節より十三節までの言語に於て此の比喻の濫用を豫防す

不義なる
操會者の比

べくあらゆる注意を惜しまれなかつた事を示して居る。十三節にある「一人の僕は二人の主人に事ふる事能はず、そは之を惡み彼を愛し或は之を重んじ彼を輕んせばなり、爾曹神と財に兼ね事ふる事能はず」なる語は馬太傳中にも見出さるゝものであつて、必然此の比喻の註解として茲に收むべきものごルカは考へたのであらう。殊に依ると一人の操會者の實際の出來事が其の頃イエスの見聞せられた所となつて此の比喻を考へ付かれたのかも知れない。而してイエスは常に彼れの心中に重荷となつて居つた所の道德的並びに心靈的生活に於ける人々の悲しむべき先見の缺乏（二四ノ一五—三五参照）に對する警戒を與へられたのであらう。即ち彼は靈的先見なき無謀者の好個の對照として此の不義なる操會者の例を引かれたのである。イエスの見識が明確であり其の愛が深くあればある程、彼は人々の頑迷にして悲しむべき人生の最大事に對する無頓着の状態を慨くのが強かつたのである。彼は罪の形容すべからざる愚かさを此の比喻の全意義の中心點とせられたと云ふ事が出来る。蓋し世の中には罪ほど愚かなるものはなく、

此比喻の
實際教訓

道徳的生
活に於け
る先見の
必要

第四章

馬太又は路加にのみ特有なるイエスの語に於ける倫理訓の研究

六十

如何なる語を以ても其の愚を形容する事が出来ないからである。

以下吾人は此の比喻の直接なる教訓並びに路加に依りて附記せられたる註解に就いて其の内容を調べて見やう。

(一) 第八節は道徳的並びに心靈的生活に於ける先見の明の缺乏と其の必要とを高調して居る。即ち人の行爲の必然なる結果に就いて將來に對する何等の豫想もなく、又人が物質上の事柄に於て常に示す所の先見の明を心靈上の事には全く缺いて居る事に就ての警戒である。イエスは茲に心靈的並びに道徳的の不定見即ち其場限りの日暮らし生活に就いて極力反抗して居る。又彼は現在の慾望の満足の爲に人生に於ける最も貴きもの、無謀なる濫用に對して警戒して居る。又彼は常に自己一身の名譽幸福のみならず、自己の子孫親戚並びに朋友の名譽と幸福とを破壊するが如き、無限の不幸に其身を委する事を警戒して居る。此の八節の簡單なる註釋に依りて暗示さるゝ問題は以下の數項である。汝は品性並びに信仰の確實なる成長の爲に常に備ふる所があるか。汝は汝の現在の立場、汝の現在の趣味享樂、汝

金錢を
愛の奉
仕の器
としむ

更に大
なる信
任の訓
練の爲

の現在の習慣並びに思想から必然生すべき結果を豫想したことがあるか。汝は將來に於ける或結果の爲に備へ、悔ひなきの老後の爲に備ふる所があるか。汝は決して疲らざる所の永久の價値の爲に適當なる資本を投じ其の永久の發達を期しつゝあるや否や。要するに汝は眞に將來の爲に活きつゝあるや否やが此の比喻中に暗示されたる問題である。

(二) イエスは如何に金錢其物も人の將來の最善の奉仕の爲めに善用せられ、人の貴き友情を將來の爲に得るに於て有効であるかを指摘されて居る。(九)。茲に示されたる勸告は人の爲に友情厚き親切なる奉仕をなし、將來奪ふべからざる愛と友情の大なる貯蓄を自己の爲になすが如き方法に於て、汝の金錢を善用せよと云ふのである。(改訂譯參照)。吾人は死を通して來世にまで吾人の金錢又は物品を携へる事は出来ない、併しながら吾人は永遠の友誼に於て其の愛の奉仕の結果を運び行く事が出来る。

(三) イエスは更に進んで、吾人は金錢の使用に於て比較的に小なる事に忠實であるや否やに依つて、更に大なる事に對する重要なる訓練並びに試

第四章

馬太又は路加にのみ特有なるイエスの語に於ける倫理訓の研究

六十一

驗を受けつゝある事を暗示された。若しも汝が比較的に低き勢力たる金錢をすら他人の爲に善用する事が出来ないならば、如何で汝は更に大なる更に豊かなる勢力、即ち祈禱の力や道徳的並びに心靈的感化や若しくは人生に於ける指導力等の信任を受ける事が出来やうか。『故に若し爾曹不義の財に忠しからずば誰か眞の財を爾曹に託けんや』(一〇—一一)。

(四)、又汝若し全然自己の所有に屬すと云ふべからざる外來の物たるに過ぎない金錢又は其他の財産をすら善用するに足らずとするならば、如何で汝は全然汝自身の内財的所有たる精神上の才能智識道念及び靈力等の信任を受ける事が出来やうか。即ち物質すら善用し得ざる者如何んぞ能く靈性の發達を遂ぐるを得んやと云ふ意味である (一二)。

(五)、終りに上記の思想と密接に關聯して、人は神と財に兼ね事ふる能はずと云ふ事が明記されて居る。そは靈性の統一上已む事を得ざる法則である (二三)。此の原理の暗示する所は、若しも汝が奉仕の爲に汝の金錢を善用し、神國の大目的の爲に凡ての小善を犠牲にする事が出来ないならば、

生命の必然的統一

汝は實に汝の金錢をして自己の神たらしむるのである。之に反して汝若し神に事へるならば汝は同時に利己的生活を續ける事が出来ないこと云ふ一事である。他の一方に於て愛の奉仕の生活に於ける神に對する忠勤は、吾人をして全然金錢又は利己心の束縛から脱却せしめる。二者は到底並立しないのである。戦時に於ける金錢の慾に就いてのグラッドストンの論評は、如何に金錢の慾が凡ての理想を顛覆する事に於て恐るべき力を有するかを示す一例である、而して現代の生活は到る處に類似の例證を以て充ちて居る。

富者とラザロとの比喩は是れ亦金錢の利己的使用が來世に於て齎らすべき避くべからざる結果を示すものであつて、現世に於ける倫理的教訓としては前條の比喩の教訓を更に具體的にしたものこと云ふ事が出来やう (一六ノ一九—三二)。

以上述べたる所の路加傳に於ける特別なる教訓は、主として其特有の比喩中に云ひ表はされてある。今之を概括すれば吾人の所謂恩寵の比喩は、

恩寵の比喩

富者とラザロの比喩

同情深き宥罪の愛（二人の負債者の比喩）自ら進んで人を助くる奉仕の愛（善きサマリヤ人の比喩）及び失はれたるものゝ爲に歎き悲しみ一度之を恢復し得るや限りなく喜ぶ所の積極的の愛（失へる貨幣と放蕩兒の比喩）を含蓄する。

吾人の所謂警戒の比喩は自己の生命の爲に備へずして空しく物を貯蓄するの愚なる事（愚なる富者の比喩）用心深き戒慎の必要なる事（留守居の僕の比喩）無益なる生活の否認（果を結ばざる無花果の比喩）傲慢なる者の低くせられ謙遜なる者の高くせらるゝ事（宴會の首席並びにパリサイ人と税吏の比喩）靈性の發達に於ける代價の豫算（無謀なる築城者及び國王の比喩）靈性に於ける先見の缺乏の愚、就中金錢の使用に於ける善悪二面の結果の法則（不義なる操會者の比喩及び富者とラザロの比喩）及び苛酷なる勤勞に對して常に忍耐深き準備の態度を取るの必要（特別なる奉仕の比喩）等である。

吾人が上記路加傳に特有なるイエスの教訓を、第二章重證句の場合に述

警戒の比喩の概括

重證句と照の比較對

べたる『人生の法則』中の倫理訓と對照し來るならば、吾人は兩者の間に明白なる類似の存するを見るのみならず、同一なる倫理的教訓の屢々高調されてある事を見出すのである。讀者の記憶する如く重證句中の人生の法則は道德的目的、證明並びに手段の三點に集合する事を見出した。而して其等の法則は、人生の目的に關しては吾人が宇宙の道德的傾向に充分の信仰を繋ぐ事が出來、世界の中心に於て愛の存在を發見し而して愛は生命なりてふ信仰の上に萬事を築き上げる事が出來る事を意味するのである。次に道德的證明に關する法則は、人が絶對に彼れの内部的義務の觀念に忠實であり且つ自己の最高の理想にまで眞實であらねばならぬ事を意味するのである。而して道德的手段に就ては是等の法則は人が彼自身の内的生命の統一を忘れてはならぬ事、並びに其の爲には飽くまで眞摯の態度を以て事に當り、無私の愛をして自己の全生涯の統御者たらしむるを以て自己の生涯の唯一目的となし、此の目的を達するに習慣並びに有効の法則に従つて飽くまで眞面目の努力を試みねばならぬ事を意味して居る。而して他人に

對する關係に於てそは同一なる人生の眞面目を意味し、善の感染力の法則を是認し、善の共有に於ける證明の必要を意味し、人格の尊敬すべき事と奉仕に依りて勝る、事の必要を意味し而して凡て是等は自己犠牲の愛の完成に外ならぬ事を意味して居る。

然るに是等の教訓の悉くが路加傳に特有なるイエスの倫理訓に於て一々見出され確かめられ擴充せられて居る。先づ第一に神の愛に於ける信仰と世界の中心に於ける愛の肯定に關して、彼のシモンと婦人の物語、並びに二人の負債者の比喻、善きサマリヤの比喻、失なひし貨幣、就中放蕩兒の比喻に優りて、何處にしか完全に云ひ表はされて居らうか。又何れの所にも愛は生命其の物であるてふ眞理が斯くも明瞭に表はされて居らぬ。而して凡て是等に於て、イエスは必要なる唯一の道德的證明として到る處に力強く主張されたのは、人の内的生命に伴ふ直接自足の證明である。警戒の比喻は凡てイエスの倫理的觀念及び要求の徹底的眞面目を證明して居る。而して人自身の靈魂の生命に關する其他の要求も亦是等の警戒の比喻中に

凡て是等
は路加傳
中に在る

結論

凡て能く反射せられて居る。

吾人は遂に以下の結論に達する事を得る。上述重證句の批評に依つて判斷しても、路加傳に特有なる教訓の一般的調子の信憑すべき事は疑ふべき何等の理由をも認むる事が出来ない。唯茲に吾人は馬太傳の場合に於けるが如く、一種の末世的なる色彩が、知らず識らず記者の先入主となれる時代思想に依つて、強められた事はないとも限らぬ事を許さねばならぬ。此の點を除いては路加傳中のイエスの教訓は、古來最も信憑すべき凡ての記録に於けるが如く、充分の信用を置く事が出来ること信ずる。

第五章 山上の説教の概論

以下の三章に於て吾人は、基督教の初代以來多くの人々が解説を試みた所の山上の説教を主題として、吾人の研究を進めるのである。批評學上の立場としては、此の説教に關する一切の文學を涉獵したゾットー教授 Professor Volz の精細なる研究の上に基づくを以て最も適當なりと考へる。余が此の方針を執る事を最も適當と考へる理由は、余の意見とゾットー教授の意見とが其の結論に於て殆ど全部相一致して居る事を見出すのみならず、又其結論は少くとも學者の大多數就中此の方面に於ける最近の研究を發表せる二人の學者に依つて確かめられて居る事を見るが故である。(二人の研究とはアレンの『萬國批評註解馬太傳』とハーナックの『イエスの言語』を指す)。

先づ第一に吾人の明言し得る所は『新約全書學者の間に一致されたる意見は、馬太傳第五章より七章に至るまでに於て、吾人は實際イエスに依りて語られたる談話の内容が保存せられてあつて、其の話題と内容とは充分に茲に記録されてある』と云ふ一事である。ハルナックは馬太傳の山上説教中にある九十七節の中五十八節までが最古の原材たるQに於て見出されたる事を信じて居る、而して『Qの中に於てすら山上の説教の大部分は一ヶ所に固まつて居る』と云ふても差支ないと考へて居る。而してQ中に存する山上の説教の其等の部分に就いて、ハルナックは『吾人は其中に最古の傳説として認められ得ない殆ど何物をも見出す事を得ない』と云つて居る。而してQに於ける凡て是等の材料に就いて彼は更に語氣を強めて以下の如く云ふて居る『部分に於ても全體に於ても、我等の主の山上の説教として傳へられて居る所の凡ては、混り物のない眞實正銘の刻印を押されて居ると判断せねばならぬ』。

勿論最初の談話の一部を成さざりし所の或要素が、馬太傳の此の説教の中に自然に導入つて來て居る。而して此の變態は其の部分の吾人に與ふる

最初の談話
中節に於

印象を多少變化して居る。(此の最初の説教中に含まれしや否やに就て最も多くの疑問を惹起せる句節は五ノ二五、二六、三一、三二。六ノ七一、七五。七ノ六、七一、二二―二三等なり)。

併しながら是等の後より入りし語ですら、イエスの實際の言葉でありし事を疑ふべき何等の理由もない。故に是等が最初の談話中に存せしや否やに拘はらず、茲に之を研究する事は吾人の目的に添ふものと云はねばならぬ。ゾオトーの言に據れば『附け加へられたる外來の物質と雖も、そがイエスの眞正の發言である以上、其の價值と信用とに於て毫も中核的物質と異ならぬ』のである。

次に此の説教の研究に當つて、實際學者の間に決定して居ると認むべき一事は、ゾオトーの所謂『馬太傳と路加傳とは其の主要なる點に於て同一の談話を傳へて居る……之は學者間に殆ど一致されたる説である』と云ふ一事である。馬太路加二福音書は同一説教を記録したのであつて、少くとも路加が削略を行つた理由の或者は理解されて居ると云つてもよい。即

馬太傳の
記録を研
究するの
材料を可
とす

ち馬太は充分の記録を残し路加は或る理由に依りて其中の一部を削略したに過ぎない。ゾオトーの言に據れば馬太は此の説教の最も多く完全なる記録を留めたものであるから、吾人は茲に研究の材料として馬太傳の方を撰んだのである。ゾオトー又曰はく『用語に於ても馬太傳の方が遙かに優れて居る……馬太がより善き記録を残した事の多くの證據がある……故に歴史的に考へて馬太傳中の此の説教は路加傳中の同一説教より遙かに多くの信憑すべき性質を持つて居る事を疑ふべき餘地がない……要するに此の馬太傳優勝説は殆ど凡ての今の學者の一致する所である』と。

果して然らば吾人は馬太傳中の山上の説教は、其の全體の内容に於て、イエスの眞正なる教訓を保つて居る事の確信を以て吾人の研究を初める事が出来る。普通の場合に於て吾人の倫理的研究の爲には、此の説教の句節が果して記録されたる順序に於てイエスの口から出たものであるや否やを問ふの必要はない。去りながら吾人の研究の材料は先づ之を全體の瞥見に照して其の適當なる場所を念頭に置く事は、其の意味を充分に捉へる事に

山上説教
全體の瞥
見

於て有益である。故に茲には山上の説教の余自身の概括を掲げ、其の参照としてゾオトーの論文中に與へられたる甚だ有益なる概括をも掲げて讀者の便益に供せんと欲する。余は以下の如く山上の説教を概括し得ると信ずる。

山上の説教の概括

(馬太傳五章三節より七章二十七節まで)

時代の精神に對照して宣言せられたる神の國の原理。

- 一、神國の臣民 (五ノ三一―一六)。
 - A、彼等の性質、其の祝福の根源 (五ノ三一―一二)。
 - B、世界の希望 (五ノ一三―一六)。
- 二、天國の義 (五ノ一七―七ノ二七)。
 - A、内的正義。パリサイ人の實行並びに解釋に對照されたる律法の最

大成就 (五ノ一七―四八)。

其の總論——題目 (五ノ一七―二〇)。

- (一) 殺す勿れの代りに憎む勿れ (二一―二六)。
- (二) 姦淫する勿れの代りに邪念を抱く勿れ (二七―三二)。
- (三) 誓ひの代りに單純なる正直の言 (三三―三七)。
- (四) 復讐の代りに利己を超越せる奉仕 (三八―四二)。
- (五) 神の愛の如き博愛——結論 (四三―四八)。
 - B、天父の前に於ける義——パリサイ人の人の前に於ける義と對照して内的なる孝の精神 (六章)。
 - (一) 父の前に於ける隠れたる慈善 (六ノ二―四)。
 - (二) 父の前に於ける密かなる祈禱 (五―一五)。
 - (三) 父の前に於ける密かなる斷食 (一六―一八)。
 - (四) 専心一意信じて神に事ふる者の天上の財 (一九―三四)。

C、人格に對する神聖なる尊敬の義 (七ノ一―二四)。

- (一) 他人を審かすして自らを審く事 (七ノ一―五)。
 - (二) 自尊の精神 (七ノ六)。
 - (三) 天父の愛に對する信頼 (七―一二)。
 - (四) 凡てを包容する愛の法則——己れの如く他を尊敬する事 (一二)。
 - (五) 天國に到る狭き門 (二三―一四)。
- ∇ 概括的結論。眞偽兩者の對照。結果に依りて知るべし (二五―二七)。

グオト―教授の概括

題目——理想的生活——其の特徴 使命、
發現、及び之に達するの義務。

- 一、理想的生活の記述 (太五ノ一―一六。路六ノ二〇―二六)。
- A、其の特徴 (太五ノ一―一二。路六ノ二〇―二六)。
- B、其の使命 (太五ノ一三―一六)。

- 二、其のヘブライ的理想に對する關係 (太五ノ一七―二〇)。
- 三、理想的生活の發現 (太五ノ二一―七ノ一二。路六ノ二七―四二)。
- A、行爲並びに動機に於ける發現 (太五ノ二一―四八。路六ノ二七―三〇。三二―三六)。
- B、神聖なる宗教的禮拜に於ける發現 (太六ノ一―一八)。
- C、信頼並びに献身に於ける發現 (太六ノ一九―三四)。
- D、他人に對する行動に於ける發現 (太七ノ一―一二。路六ノ三一―三七―四二)。
- 四、理想的生活を送るの義務 (太七ノ一三―二七。路六ノ四三―四九)。

山上の説教に於ける全體の思想の是等の概括と共に、此の説教中に現はされたるイエスの精神的發見とも稱すべき彼れ獨特の創見は那邊に存するかを見る事が大切である。是等の特種なる教訓は縱令全然イエスに初まつたものではないにしても、他の如何なる所に於ても見る事を得ざる程なる

此説教に於けるイエスの創見

程度に於て茲に發見さるゝのである。蓋し前にも云ひし如くイエスの獨創性は必ずしも前人がまだ云はざりし所のものを初めて云ひ出したからと云ふのではない。併しながら彼は其の驚くべき正確を以て何が真に重要であるかを辨まへ、而して之を左程に重要ならざるもの、中から撰び出して、之に其の顯著なる位地を與へて、其の根本義を終局まで徹底せしむるにイエスの獨創性は存するのである。此の點に關しゾオトーは曰はく『イエスの獨創性は偽より眞を別ち、一時的のものより永久的のものを別ち、不完全なるものより完全なるものを別ち、而して然る後に觀念並びに實行の全體を其の理想的の發現にまで齎らし行く所に存するのである』と。

イエスの言に似たるものが當時の學者等の言にも存する事の事實は少しも此のイエスの特徴を減するに足らない。何となればヅエルハッセンWell-hansen の云つた如く『イエスの原始性は彼が混亂せる無用の塊の中から真正にして永久なる所のものを見出して之に熱中し、而して最大の強さを以て之を高調し給ふた所に存する』からである。

イエスの
獨創性如
何

余自身の見る所に據れば、イエスの教訓の獨創性の問題は決して其の文句の起源に關する問題ではない。ロツツエが暗示した如く、同一なる道德的教訓を云ひ現はすに於て、其の言語に著しき類似の生ずるのは何も驚くに足らぬ事である。従つて非基督教的宗教に於ける凡ての價值ある要素に對して吾人が充分の尊敬を缺ぐの必要はないのである。イエスの偉大なる特徴は彼れの特別なる教訓が少しも他の宗教中に豫想されなかつたから偉らいと云ふのではなく、唯寧ろイエスを他の凡ての道德的並びに宗教的教師に比較し來る時に、忽ち彼れの驚くべき卓越が現はれ來り、其の生涯と教訓と感化との間に驚くべき統一があり、凡ての生命の中心其物と凡ての生活の秘訣其物とに對する深奥なる洞察を有し給へる點に存する。吾人は彼に於て何等の雄大なる推論や何等の精密なる議論の組織を見出さぬ、併しながら吾人は寧ろ彼れの離れ離れの格言すら毫も矛盾衝突なくして完全なる統一にまで組み立てられ得る程なる完全無缺の内察洞觀を發見するのである。

是等の特徴を出來得る丈簡單に解説すれば左の如くである。

- (一) イエスの教訓は一切の正義の完成力として愛を高調する觀念に於て、他の宗教道德に見る事を得ざる程の統一を人の精神生活に與へるものである。而して此の博愛に對する義務の觀念は世界の倫理的思想にまで特別な貢獻をなしたるものである。
- (二) ロッツエが暗示した如く、基督の教訓はそが他宗教と一致するが如く見ゆる所のものにまで一層深き意味を與へる事が其の特徴である。道德律はイエスの教訓に於ては人格的なる天父の聖旨となるのである。
- (三) 實行上から云へば道德上の全然新らしき方面を開拓したと云ふ事が出来る。即ち山上の八福と稱するもの、中に表はされたる所謂受動的なる忍辱の徳である。
- (四) イエスの教訓は道德にまで一個の全然新らしき精神を吹き込む。即ち子が父に對して抱く所の自由にして喜ばしき孝順の精神である。
- (五) ロマネス Romanes が暗示した如く、イエスの教訓はそが含蓄せざる

ものに於て等しく驚歎すべきものがあること云ふ事が出来る。ロマネス曰はく『基督の傳記中に後世の人智の發達例へば自然科学や倫理學や政治經濟學や其他の智識が之を割引きせざるを得ざるが如き何等の教訓も含蓄されて居らぬ。此の消極的議論はイエスが教へに關する積極的議論と同一の力を有する』。

(六) 併しながら他の凡ての點以上にイエスが世界の倫理並びに宗教にまでなせる廣大無比なる貢獻はイエス自身である。世上の如何なる人格も彼れと比肩すべき價值あるものはない。而して茲に宗教道德の生活に對するイエスの偉大にして比類なき貢獻が存するのである。

(七) 之と密接に關聯して、基督教の傳播に於ける世界の經驗も亦た彼れの倫理的教訓をして人類の生活に實現せしむるの不思議なる力を有する事を示すに足る。此の道德的實行の勢力は例へばレッキー Lecky の如き歴史家の明白に是認する所であつて、歴史的記録の證明する所である。フェアバン Fairbairn の言に曰はく『イエスに取りては愛のみが不滅の力と認む

山上説教
に於ける
イエスの
心的創見

べき唯一の道徳的動機である。此の不滅の力は時に應じて種々なる變態を來たすけれども其都度精力の減少を見ずして寧ろ其増加を見るのである。而して以上述べたる如き獨創性は吾人をして山上の説教に於けるイエスの心靈的創見を研究せしむるの理由となるのである。イエスの心靈的創見は以下の如く類別する事を得る。

一、眞の正義の性質。

- (一) 倫理的並びに宗教的生活の離るべからざる統一——神に對する關係の證據は人生に於ける實行上の結果なり。(太五ノ三—一二。二〇。二三—二四。四五。四八。六ノ一—二。七ノ一二。二〇—二七)。
- (二) 智識的並びに心靈的獨立の必要——自明の眞理の權威。(五ノ三—一。二。一七。二二。二八。三四。三九。四四。六ノ一。七。九—一三。二二—二四。二五。七ノ一二。二—二三。二四—二七)。
- (三) 眞個の正義は常に內的なり。(五ノ一七—四八)。
- (四) 愛は正義の總括なり——神自身の生命に與かる事なり。唯だ愛の要

求する所をのみ常に行へ。(五ノ四四—四八。三九—四二)。

- (五) 人格の無限の價值並びに神聖に對する深き尊敬の最も肝要なる事。(七ノ一—一四)。參照五ノ八。二二。二八。三二。四五)。

二、八福より推定すべき教訓。

- (一) キリストの深き樂天觀。幸福は苦しめる者にも可能なり。(五ノ三一—一二)。
- (二) 幸福の全然新らしき領分の發見——信仰と望と愛との體得より來る常住の幸福。(五ノ三一—一二)。
- (三) 幸福の第一條件は唯品性の中に存す。是れ明確に指摘せらるべきもの即ち八福の性格なり。(五ノ三一—一二)。
- (四) 前人の殆ど認めざりし善徳の發見——誤まつて消極的の徳性と稱せられたる忍耐溫柔の徳。(五ノ三一—一二)。
- (五) 是等は諸々の徳性中の根本的善徳なり——愛と稱する一個の寶石の諸断面の如し。(五ノ三一—一二)。

(六) 斯く愛の中に總括されたる諸徳の上に社會は建造されざるべからず。
(五ノ一三一—一六)。

三、生活、動機。

(一) 人の内的生命の必然的統一。生命の徹底的なる首尾一貫。(五ノ一八。一九。二二。二六。二八。二九。三〇。三七。四八。六ノ四。六。二二—二四。七ノ五。一二。一三。一四)。

(二) 世界及び人生の中心に於て萬有の愛の父なる神在まし給ふ。(五ノ四五—四八)。

(三) 若しも神が天父にして愛が生命ならば各人は互に兄弟なり、而して互に兄弟として相交はるべきなり。(五ノ二二—二四。三七。三九—四二。四四—四七)。

(四) 神の法則は神の愛の發現の一部なり。生命に達するの道は此の法則を避くるに非ず之を成就するにあり。此の法則の眞の成就は外部的並びに器械的に非ずして内部的並びに精神的なり。律法の淺薄なる

解釋の危険。(五ノ一七—四八)。

四、宗教的生命の中に含蓄されたる觀念。

(一) 神の恩寵は難行苦行に因りて得らるべき外部的の報賞に在らずして、偽りなき柔順なる精神に伴ふ内在的自然の喜悅に在り、愛は夫れ自身の報賞なり、是れ愛は夫れ自身生命にして人が自己を益々多く益々廣く他人の爲に與ふれば與ふる程其の生命は擴大すればなり。(五ノ一七—四八。六ノ一—三四。七ノ一—二七)。

(二) 若しも神が父ならば宗教的生命は神に對する眞個の孝道を盡さんとするの新希望を生み來るに至る(五ノ四五參照)——内的生命並びに内的報賞も事實なり。(六ノ一。四。六。一八) 故に凡ての宗教的行爲は神に接近する事の眞正なる希望の發現ならざるべからず。(六ノ一一—一八)。

(三) 若しも神が父ならば宗教的生命は父に對する自然にして單一絶對なる信頼の生活である。而して道德的並びに心靈的の潛勢力は絶對に

信頼すべきものである。(六ノ一九―三四。七ノ七―一一)。

山上の説教に於ける是等の主なる主張は、イエスの教訓の全體に貫いて居る幾多の眼目を高調して居る。即ち宗教の倫理的觀念、智的並びに心靈的獨立の必要、道德的生活の避くべからざる內的性質、人格に對する尊敬の必要、及び愛に於ける新生命の總括等が茲にも充分に發揮されて居る。是等の點を一々詳論する必要はないが、唯是等の思想が山上の説教中に如何に明確に如何に有力に表はれて居るかを注意すれば足りるのである。げに是等の原理は全説教に貫通して居る事を見るであらう。

茲に含蓄されたる宗教的生命の研究より轉じて、吾人は進んで次の第六章に於ては、人生の根本性質としての八福の詳細なる研究に入り、而して第七章に於ては全説教に發揮されたるイエスの偉大なる人生の動機の研究を試みんと欲するのである。

第六章 人生の根本性質に關するイエスの觀

念。八福の研究

人生に於ける根本性質とは何であるか。云ひ換へれば人の品性幸福並びに感化力に必要な資格は果して何であるか。此の問題は絶對的に緊要なるものである。正確にして權威ある答が會つて與へられたであらうか。

余はイエスの八福の美訓が恰も好し斯がる答を與ふる爲に存するものであると信する、茲に人生の卓越せる藝術家とも稱すべきイエスは、萬人の爲に人生の凡ての問題を捉へつゝ、明らかに彼れが當時の時代思想に反抗して、來らんとする兄弟相愛の新文明たる神の國の臣民が有すべき品性を指示されたのである。而して彼は是等の性格は同時に幸福の最大條件であつて、且又善に對する凡ての有力なる感化力の秘訣である事を宣言されたのである。

人生の誤まれる標準並びに虚偽なる行爲を見るに忍びずして、イエスは

當時の人々に向ひ「爾曹悔改めよ、而して心を新たにせよ」といふ警告を以て其の説教を初められた。其の新らしき心と品性とは彼が八福に於て定義する所である。

此の説教者は決して人生並びに人類の敵ではない。寧ろ彼自身が生命を樂しみつゝ、而して他人にまで其の樂しき大生命を與へるの力を自覺しつゝ、彼は牧ふ者なき羊の如く空しく荒野にさ迷うて、眞の條件を誤まりながら而かも幸福を熱望しつゝある憫むべき民衆の上に深き憫憐の情を抱き給ふたのである。其等の幸福に達する眞個の條件は彼が八福の中に指し示す所である。

イエスは又彼れの使命は世界の利己的文明を改革するにある事を明らかに自覺しつゝ、彼は此の世界を健全に保存する鹽となり、暗きを照す所の光となり、パンを膨らす所のパン種となり、來らんとする王國の活ける種子となるべき其等の人々を弟子として求め給ふた。而して彼は八福中の品性を有する所の人々のみ眞に世界に於て其の役に立つものである事を信せ

幸福

感化

愛は萬事の
の總括なり

られた。

他の處で彼は正義の全律法は神に對し人に對する愛の中に總括され得る事を示し給ふた。加之彼は如何なる永續的の幸福も愛の精神なきものには決して來らぬ事を信する程、人の靈性に大なる信用を置かれたのである。而して彼が又自己の眼前に掲げられた世界の最大目的は、人々が自己を神の子として認め相互を兄弟として認むる所の愛の生活の文明を地上に實現するに在りと確信されたのである。人生に於ける唯一の要求並びに此の世の改良に對する唯一の療法は、愛の生活を送ると云ふ一事に外ならぬ。茲に品性あり幸福あり勢力あるのである。イエスは斯く單純に而かも斯く深奥に此の問題を見られたのである。

去りながらイエスは此の八福の美訓に於て、恰も此の問題を更に一層單純にせんと試みられたかの如く、彼は此の抱括的なる愛の徳を其の要素に分拆して、宛然一個の高價なる寶石の諸断面を示すが如く、愛の發現の諸の方面を示さんと試みられたのである。若しくはイエスが愛の生命の進歩

愛の諸要素

の階段を示さんとして、單純なる謙遜の美德から出立して遂には勇敢なる犠牲の生涯の絶頂に達するに至る徑路を茲に示されたのであると見る事も出來やう。而して彼は同時に如何に是等の性格が祝福を人生に齎らすかを示さんと試みられた。最後に彼は斯く愛の生活の意義を定義し且眞幸福の源泉を示された後ち、更に進んで是等の性格を有する人々こそ、眞に地の鹽であり世の光であり、人生の活動社會に於ける最も有力有益なる勢力である事を言明し給ふたのである。

然らば山上の八福は『人生の地圖』である。積極的で單純で内的で深奥で、是等の教訓は遙かに舊約の十誡よりも徹底的で、而して新約の諸教訓中に於ても眞個に價值ある生活を示す所の最も完全なる言ひ現はしである。而して人苟しくも自己の本性を全うし出來得る限りの幸福なる生涯を送り生き甲斐ある生涯を全うせんと欲するならば、如何にしても是等の教訓を見逃がす事は出來ないであらう。

他の言葉を以て云へば、世界が曾て生み出した靈的生命の最大遠觀者が、

イエスの
人生の地

此の八福の中に彼が人生の根本的性質と認むる所のものを明確に披瀝して、以下の如く直言し給ふたのである。曰はく茲に品性と幸福と勢力との秘訣が存する。茲に吾人の海圖と吾人の航海日程が存する。

一、品性

イエスは先づ眞個の品性の要素を説き給ふた。

(一) 品性を形造る所の性質。

イエスが人生に於ける根本義として茲に撰び出した所の其等の性質は何々であるか。

『心の貧しき者』なる性質はドライヴァー Driver の所謂『忠實にして神を畏るゝイスラエル人の仲間』に適用されたる『貧』の字の慣用を思ひ起さしめる。ゾーの言に據ればそは『自己の靈的缺乏を感ずる事深く、従つて神に依頼するの切なる望みを抱く所の人』を指すのである。倫理的の性質から云へば、心の貧しき者とは謙遜にして教ゆべき虚心を保ち、肝膽を

第一福の
性質

吐露して赤心を人の肺腑に置くが如き性質の人である。謙虚にして腹藏なき態度は心の貧しき者に非ざれば持つ事が出来ない。彼等は傲慢と自負と自足と執拗とを以て満ちて居る所の心の富める者と正反對の位地に居る者である。イエスの見る所に依れば謙遜なる精神は虚偽なる卑屈心ではない。寧ろ反對に各人は彼自身の存在の價值と神の子としての使命とを知つて之を樂しまねばならぬとは、彼れの全教訓を貫いて居るイエスの根本的確信である。而して同時に各人は自己以外の兄弟にも其特殊なる人格と使命が存して居る事を知るであらう。果して然らば彼は自己の使命と天職とを樂しみつゝ同時に他人の其等をも等しく認識して、彼等を通して自らに來るべき大なる生命と奉仕とを喜ばねばならぬ。斯く一たび他人の價值をも認める時に、彼は自己の價值以上に自己を高く買ひ被ぶる事が出来ない。そこで相當なる自尊心を抱くと同時に他人に對しては飽くまで無邪氣なる謙虚と坦懐とを抱く事となる。此の謙虚の性質が理想的生活の此の圖面に於て最初に置かれた事は甚だ適當である。何となればそれは凡ての善き事に於

ける成長發展の第一條件であるが故である。教ゆべき性質と教へらるべき態度とは、凡ての學術の世界にまで入る門戸であると同時に、天國に達するの入口である。
故に眞個の品性は謙遜を其の隅の首石とせねばならぬ。
八福の凡てが明瞭に道德的性質に關係して居るが故に、『哀しむ者』なる語に依つてイエスは自己の罪の爲に悲しむ其の缺點を自覺して之を歎き而して眞に悔悟して居る所の者を意味された事は明らかである。イエスの興味は其の避くべからざる祝福を伴ふ所の品性の内的性質に集中して居る。されば心の悲しむ者とは、彼の自己の内心の状態如何に無頓着にして己が欲望の満足をのみ求むる所の者の正反對である。悔悟はイエスが眞の人に見出さんせられた彼の『新らしき心』の消極的方面である。それは小事に於てすら忠實に義務を遂行する事の條件でもあり且結果でもある所の鋭敏なる良心の不斷の働きを意味する。
品性に於ける如何なる進歩も斯かる悔悟の缺乏して居る所には不可能で

第三福の性質「克己」

「柔和なる者」とは常に自己の権利を主張し堪えず自己の利益を要求する所謂傲慢不遜なる者に對照して説かれたのである。彼等と正反對に柔和なる者は自己の當然の権利をすら強いて主張せぬ。寧ろ自己の権利が侵害された場合にも能く己れに克つて忍耐持久「凡そ事忍ぶ」のである。斯くて柔和は最高の克己である、最大の自制である。此の點は余が見たる柔和の三つの好定義に於て明らかに示されてある。トーマス Thomas 曰はく「柔和とは自制の最高位に於ける靈魂の状態である、凡べて短氣なる騒がしき復讐的なる精神の上に位せる尊嚴の心事である」。モーバリー Bishop Moberly 曰はく「神的柔和は力と克己と勇氣とを其の最高の程度に於て要するものである」。而してピーチャーも Becher も亦曰はく「柔和は憤怒の場合に於いて最良の氣分に自己を保ち且凡ての人を制する所の人の最高方面である」。又曰はく「何人に取りても柔和は人自らを持する所の最も強大なる心的態度である」。

第四福の性質「純潔」

果して然らば柔和は決して卑屈の徳ではない。柔和は一個の根本的善徳である。而して強き人たるに缺くべからざるものである。『飢渴く如く義を慕ふ者』とは高き品性に對する恒久不斷の熱心を有する者を指すのである。飢渴は執拗なる權威を以て吾人に臨むものである。其の如く吾人は品性其のものに對する満し難き渴望と、吾人の行爲精神二つながらに於ける最高の理想を追求して止まざるの精神を要求されたのである。是は『新らしき心』の積極的方面であつて殊に徹底的の誠意誠心を含蓄して居る。其の目的は品性の完全なる正義の追求である。其の熱誠は品性に對する奮闘の熱誠である。此の精神は彼の全く品性の事に無頓着であり、罪の念ひを胸中に宿す事を憚からず、而して正義其の物よりは正義の報酬を希ふところの人々の性格に正反對なるものである。眞個の正義を飢渴く如く慕ふ事は、即ち人の本性の最も深き傾向が神の正義に向つて進むに在る事を意味して居る。

云ふ迄もなく斯くの如く義を慕ふの精神は品性の最高點に達するに於て

「矜恤ある者」とは憫憐と同情との念に富める者を云ふ。彼等の反對は暴虐なる冷淡なる無容赦なる者である。仁慈は常に人に對する憫れみと好遇を意味するのみでなく、進んで他人の幸福の爲めに盡す所の積極的な親切を意味する。それは能く人を理解する事と聰明にして同情に富める正しき判断を抱く事である。それは如何なる外部的待遇よりも寧ろ其人の内部的人格に對して慈愛の心を抱く事である。而して斯くの如き眞個の矜恤は容易に得らるゝものでない。唯自己の實驗に依りて充分に人生の誘惑と奮闘を知り得た所のものにのみ望み得らるゝ所である。

人生に於ける一切の關係は斯かる眞個の慈愛を要求する事甚だ痛切である。

「心の清き者」とは云ふ迄もなく内心の純潔を意味する。イエスは斯かる心中の純潔は、人格の神聖に對する深き尊敬を抱く所のものにのみ屬する事を明らかに信じ給ふた。斯かる人は徹頭徹尾敬肅の態度を保ち、最も激

烈なる誘惑の下に其の敬虔の念を失はぬのである。而して社會的純潔は此の心中の純潔の主要なる形態の一つである。心清からずして社會の清まるを望むは不可能である。如何なる愛も此の眞個の尊敬を缺く所の者は純潔なる愛ではない。尊敬を以て愛することを得ないものは決して神聖なるものでない。而して此の理由を以て純潔なる愛は人生に於ける克己力の最大動機である。心の清き者は各人の靈魂に於て神の子を認め、従つて物としてではなく聖き人格として之に對するのである。社會的純潔は茲に其の源を發する。

如何に此の精神が必須なるものであるかは、個人又は人類に於ける道徳的進歩の凡ての研究者が熟知する所である。

「和平を求むる者」は單なる好人物ではない。彼は同胞兄弟の調和者たるに適する所の者、即ち進んで人々の間に平和を齎らし、人間を統一し給ふ神自身の事業に參與するに足る所の高き階級に位するものである。彼等は大事にも小事にも争を煽動し戦を惹き起す所のものと正反對に置かれてあ

る。彼等は舊約の箴言中によくも輕蔑的に擧げられて居る所の彼の低語者、他人の事に嘴を容るゝ者、人の噂を傳搬する者、お世話焼き、饒舌者、事件の煽動者等の爲す所に全く無關係なる人々である。和平を求むる者は管に憎悪の力に對して自らを防ぐのみならず、進んで他人の間に愛の勢力を増進するものである。

『義しき事の爲に責めらるゝ者』とは人類の間に正義と眞理を増進する爲に、如何なる困難をも喜んで忍び、各方面に開拓者たるの艱苦を冒し、犠牲と苦痛の中に見出さるゝ愛の最高證明を興へつゝある所の、貴き古今の人間の一團隊を含むのである。是は感情的なる、此世の快樂に耽溺する、贅澤なる生活を樂しむ如き者の有し得る徳性ではない。そは英雄的なる獻身にまで人を招く所の聲である、而して凡ての安逸なる信仰の人々に向つて左の如き質問を發して居る。曰はく、汝は眞に何物かを犠牲にしたか。汝は何處にか自らを擲つた事があるか。汝は眞に自らの人氣や評判を顧み

第八福の性質

八福の順序

ずして正義と純潔と眞理との爲に自己の確信を取つて動かかなかつた事があるか。汝は或る意味に於て預言者たりし事があるか、即ち神が汝に與へたる所のものを大膽に語つた事があるか。而して汝は愛の心の發表たる多くの小なき犠牲の行爲をなし親切なる注意を怠らない状態に居るや否や。イエスの此の教訓は斯かる詰問を發して居るのである。若しも此の終りの美德が此の世に存しないならば、如何に人生は貧弱にして賤劣に且一切の價値が掃蕩し去らるゝであらうぞ。

明らかに以上の諸徳は人心の根本的性質である。其の中の一つも完全なる品性を形造くるに於て缺けてもよいものはない。

扱て八福の美訓を最高の品性の略圖として全體から見渡す所で、イエスは八福の順序そのものに依つて、彼が説かれた品性の完全なる統一を吾人に示さんと欲せられたことを見るべきである。余の見る所を以てすれば八福の類別と順序との完全なる事が、實に此の記録の正確なる事の最上の證據である。

(二) 品性の進歩としての八福。

余は八福を各四つづゝの二部に別れて居るものと見做す事は、穴勝ち想像に過ぎた見方とも思へない。第一の一群は個人的の教訓であつて吾人自身の中に於ける神の國に就いて語られたのである。而して第二の一群は社会的の教訓であつて他人との關係に於ける神の國の建設に就いて語られたのである。加之八福全體が明確なる進歩を形造つて居る様に見ゆる、即ち一つの性質は自然に次の性質に導きつゝ、而して各自がそれ自身の中に既に前に出でた所のものを含蓄して居るのである。進歩として並びに統一としての八福は以下の如く類別する事が出来やう。

個人的。

- 一、謙虚なる心 (馬太傳五章三節)。
- 二、眞個の悔悟 (四節)。
- 三、最高の克己心 (五節)。
- 四、最高の品性に對する熱誠 (六節)。

社會的。

- 五、人に對する同情慈悲 (七節)。
- 六、人の人格に對する最深の尊敬 (八節)。
- 七、人々の間に平和を増進する事 (九節)。
- 八、人々の爲に犠牲となる事 (十節より十二節まで)。

一個の謙遜なる、人の教を喜んで受くる精神は明らかに第一に屬する。それは凡ての成長をして可能ならしむる第一條件である。即ち是れ嬰兒の心であつて之れなくんば決して正義の國に入る事を得ないのである。而して斯くの如く精神は最も自然に悔改めるまで人を導く。而して他の一面に於て眞個の悔改は必然謙虚を含蓄する。

斯くの如く憤怒の場合に能く自らを制する所の克己心は其の主要なる助けとして謙虚なる心と悔悟の精神とを要求する。最も能く他人に對して忍耐するものは最も能く彼自身の缺乏を知る所の者である。而して他面に於て此の最高の克己は凡ての徳の中の主徳として、正義に對する全身全力の

追求の準備となるのである。是れ即ち八福の四訓が示す所である。而して又此の最高の品性に對する徹底的なる熱誠は同時に謙虛と悔悟と克己とを含蓄する。

凡て是等の個人的性質は一轉して以下に述ぶる所の他人に對する愛の種々なる現はれとなるのである。吾人が曩に云ひし如く自己の品性の進達に熱心なる所の者は、即ち是れ他人に對して最も慈愛深く又最も同情に富めるものであらねばならぬ。而して謙遜が個人的成長の第一の條件である如くに、他人に對する聰明なる同情が眞個の社會的生活の第一條件である。美はしき人と人との關係は勿論他人に及ぼす勢力若しくは感化を其中より發生するものである。故に仁慈なるものに對する祝福は當然社會的祝福の劈頭に位する。而して眞實に正義を慕ふ人は人々に對して同情深く就中人々の品性に對する奮闘に同情を抱くが故に、彼は愛の生活の二大勁敵なる情慾と忿怒とに對して自らを潔くすることが出来る。而して心の眞正なる純潔の中に人に對する眞個の尊敬が生じ且人々の間に愛を増進する事が出

同情と尊
敬平和の増
進者

犧牲の愛

來るであらう。加之人格に對する尊敬は心の純潔より自然に發するものであつて、それは凡ての高尙なる個人的關係並びに凡ての有力なる感化の最大條件である。故に此の教訓は當然社會的美訓の第二に位するものである。同時に此の人格に對する尊敬は社會の根底に横はる所の凡ての關係の中に、最高の正義を要求するものであつて、又人に對する同情愛憐を豫定する事は云ふ迄もない。心の清き者は能く人の中に神を見るを得るが故に、人に對する眞個の尊敬を有し且同情を抱く事が出来るのである。而して又凡ての人の中に恭しく神の子を認めて之を尊敬する所のものは、人々の間に平和と愛とを増進せんと努めざるを得ない。彼は彼自身の尊敬の精神を以て之を世上に普及せしめ、凡ての怒りと妬みとを一掃し去る事を努めざるを得ない。而して斯くの如き平和を求むるの精神は心の純潔を必要とするは云ふ迄もない。

最後に人々の間に平和と愛の力を増進する事に熱中する所の者は、人の爲に自らを犠牲にするの覺悟がなければならぬ。即ち艱難と迫害とを忍ぶ

の決心が必要である。而して此の犠牲的愛は前に述べた凡ての性質を包含し、且其の上に諸々の徳を建て、而して其れ自身が最高最終の光榮となるのである。吾人は此の勇敢にして忍耐深き犠牲的愛よりも偉大なる何物をも知らないのである。

然らばイエスが品性の根本的性質と見做された所のものは以下の如く總括され得るであらう。即ち謙虚、悔悟、克己、最高善に對する熱誠、人に對する同情、人格に對する尊敬、平和の増進、並びに人の爲めにする犠牲である。

一、幸福

以上述べたる諸性質は同時に幸福の主要なる條件であるといエスは信じられた。げに『福なり福なり』と繰り返された所を見ても、彼が此の幸福と云ふ思想を第一に念頭に置かれた事が判る。彼は茲に此の世の律法と稱するものに對照して別個の幸福を數へられたのである。此の世の幸福は

此世の意
法八ヶ條

即ち左の如くであらう。

傲慢なる者は福なり此の世は即ち其の人の有なればなり。

無頓着なる者は福なり其人は安慰を要せざればなり。

權利を主張する者は福なり其人は地上の所有を擅にするを得べければなり。

あらゆる罪を犯すものは福なり其人は快樂の盃を干す事を得べければなり。

暴威を振ふ者は福なり其人は矜恤を要せざればなり。

心清からずして情慾を恣にする者は福なり其人は多くの淫婦を見る事を得べければなり。

野心を以て怒りと争ひを煽動する者は福なり其人は異教の神々の如くあるべければなり。

何等の犠牲をも捧げざる者は福なり全世界は即ち其人の有なればなり。而して是等俗世の判断に對峙してイエスは彼自身の判断を列擧し、以て

此世の意
法と正反

此の世の憲法の各條を一々打破せられたのである。彼が約束された祝福即ち幸福は、各々の場合に於て必然其の指示された性質の中から發生して來るのである。即ち吾人が茲に講究せんとするのは此の必然の關係に就いてである。

先づ第一にイエスは最高善即ち神の國を謙遜なる者に約して傲慢なる者に拒まれた。何となれば謙虛にして人の教へを受けんとする者に何時までも與へられずに居る如何なる善き賜物たまひものもあり得ない、彼は成長の第一條件を有し其の發展に對して何等の制限も置かれてゐないからである。成長する所の生命は永久の若さわかと永久の喜びとを有するの生命である。謙遜なる者は神又は人の與へ得る最善のものを受くべき資格がある。勿論イエスの云ひし如く、其の場合に於て最高善は内在的に其の人自身の裏に既に業に存在して居るのである。

如何なる幸福の根源が此の無窮なる進歩の可能性に優りて根本的なるものがあらうぞ。而して此の謙虛てふ單純なる道德的性質は之れが最大條件

として如何に確實なるものであらうぞ。げに進歩は最大の幸福であり謙虛は進歩の最大條件である。

次に又イエスは彼の無頓着にして良心の鈍れるものは決して最後の慰安を得る能はざる事を確信して居られた。此の良心の感覺を失ふ事は同時に最高最大なる幸福の條件たる種々なる個人的關係に就いての清き情操と感覺とを失ふ事である。良心一たび鈍れば幸福の根源たる凡ての事業と友情より來る人生最上の喜悅より自らを隔絶するのである。イエスは人間が到底悔ひざるの心を以て眞個の満足を得る能はざる様に相互密接の關係に於て造られて居るものなる事を知られた。彼等は人と人との間の個人的關係の爲に造られ、愛の實現の爲に造られ、而して奉仕の行爲の爲に造られたのである。而して愛に對する自己の罪に就いて何等の悲しみをも有せざる如き精神は、凡ての眞正なる樂園から炎の劍に依つて排斥さるのである。悔改むる者のみ眞に慰めらるゝ、即ち品性に於ける確實なる進歩の保證を以て無上の慰安を受くるのである。彼の良心の鈍れる人は常に自家存

在の目的を混亂する所の一種の無意味なる生活を送らねばならぬ。
悔ひし心と鋭敏なる良心とは人生が興へ得る最大喜悅の缺くべからざる
條件である。

次に柔和なる者即ち怒るべき場合にも能く自らに克ち得る所の人々に對
して、イエスは彼等が地を繼ぐを得る事の約束を立てられたのである。此
の地を繼ぐなる言葉は最初ヘブライ人の契約の觀念を表はす所の通用語で
あつたが、イスラエル人がカナンの地を得た後は、其の觀念が廣くなつて
地上に於ける神の民の凡ての物質的又は道德的又は心靈的優勝の位地に達
する事の形容語となつたのである。故に未來の生活若しくは新らしきメシ
ヤ的時代の宗教的希望から離れて單に倫理的見地から見ても、余は柔和な
る者が眞に現世來世の區別なく人生から最も多くの幸福を捉へ得るものな
る事と信ずる。イエスは柔和なる性格を以て人生の最も良き悅樂に達すべ
き正道であると推奨された。余は茲に數個の理由が存すると考へる。第一
柔和なる心に伴ふ謙遜と悔悟並びに自己の爲にのみ權利を主張するを肯ん

幸福の條
件として
己の柔和
を克

せない所の精神は、それ自身に於て不安不満の主要なる原因を除去するも
のなるが故である。ドラモンドが云ひし如く『傷つけられたる虛榮心、失
望せる野心、満たされざる利己心、是等は古より普遍なる人心不安の根源
である』。是等の原因を柔和なる精神は其の根底から打破するのである、而
して平和並びに喜悅を樂しむべき眞個の機會を自然に其人に興へるのであ
る。

自惚心の
除去

加之柔和なる精神と其の自然の結果たる謙遜の精神とは、そが自己を高
く買ひ被ぶる事なきが故に、常に他人より侮辱され輕蔑されたと云ふ如き
感じを抱く事がない。彼は萬物が自己に屬する事を感じないが故に、傲慢
自負の輩が甚だしく憤怒を感じる如き場合にも常に満足して喜びに満ちて
ゐる事が出来る。斯かる精神の人が人生を樂しむの度は甚だ大である。吾
人の自惚心を減少する事は人生に於て快憫である事の秘訣である。吾人は
其處に満足を學ぶ事が出来る。

他人の喜
びを分つ

而して又柔和なる者は自ら持する事謙遜にして他人に對する嫉妬の精神

を有せざるが故に能く他人の喜びにまで入る事が出来、而して眞の意味に於て人生一切の喜悅に参加する事が出来る。彼等は全世界を我が有として居るのである。

柔和の精神は又他人の上に自然の影響を興へるものである。萬事を自らに要求する所のものには他人も自然に反抗する。併しながら人は喜んで柔和なる者に善き物を興へる。柔和なる者は容易に萬人の好意を受ける、而して自から人生の最高善に到達する。

加之柔和なる者の克己心は人生の幸福に對して大いなる貢獻をなすものである。能く自らを制する者は他人をも制する。彼は常に其の手を空しうして居るから機會を失する事がない。彼れは常に高きものに向つて低きものを犠牲にし、永久なるものに對して一時的のものを犠牲にし、而して人生の意義が益々彼に取つて豊富である事を見出すであらう。人世最大の繼嗣は彼れのものたらざるを得ない。人生に於ける最も善き物は常に克己心ある者の爲にのみ備へられてある。如何なる所にも此の克己心なしに最高

克己者の幸福

幸福の條件として
品性の熱求

の成功及び進達を期する事は出来ない。

而して終りに柔和なる者は今一つの意味に於て人生の最大幸福を受ける。柔和は人自身の内部的生命を必然的に深くする。間断なく自己の最高の力を發揮し、自ら制するに最大の努力を以てする者は、自然に自我の中に或確實なる結果を生せざるを得ない、其の結果は人生の意義を次第に深くする事である。確かに柔和なる者は地を繼ぐ事が出来る。彼等は現世に於いても人生より最も多くの賜物を受けけるものである。

果して然らば柔和は幸福の一大根本的條件である。

飢え渴く如く義を慕ふ者は福なりとイエスは宣言せられた、何となれば彼等は彼等が渴望する所のもの即ち眞正の義を以て満たされる事が出来るからである。彼等は神の正義と其の生命とを分與さるゝであらう。イエスは明らかに神の生命を以て最も多く幸福なるものと考へられた。而して其の幸福は品性其物より来る幸福である。故にイエスは何人と雖も同時に品性に達する事なくして最高の幸福に達する事を得ると考へる事が出来ない。

そこで茲にイエスのなせる約束は、義人ならざる人間を假りに義人として取扱ひ之れに對する報ひを興へると云ふのではなく、寧ろ神の協力を受ける事に依つて人を眞の義人に變化せしむると云ふ約束である。品性に對する堪え難き渴望は必ず満たさるゝであらう。此の積極的熱望を有する所のものは到底眞個の品性に達する事なしに満足を得る者ではない。毀譽褒貶は彼れの顧みる所ではないが、彼れの日夜に苦しむ所は彼は實際如何なる品性を有するかと云ふ一事である。斯かる人は如何にして傲慢であり、悔ゆるの心なく、人を輕蔑し、人を譏り、克己心なく、虚偽不潔にして人を愛せざる如きものたるを許す事が出来やう。彼れの最深の大望心は正義に對するの大望心であるならば、神は決して彼を失望せしめぬであらう。彼れの渴望は必ず満たさるゝ。之に反して人若し最善の理想に向つて無頓着であるならば、彼れの品性上是れ程恐るべき缺點はない。是れ即ち人夫れ自身が造られた所の最高目的を抛棄した事を意味する、自己の軌道より彷徨ひ出でた事を意味する。彼は自己の存在する宇宙の目的と根本的に調和

幸福の條件として
憐愍の慈愛

を失つたのである。彼は神自身の愛の目的と常に戦を挑みつゝあるのである。故に彼は何等の永續する幸福も有する事が出来ない。

幸福の最も深き條件は熱心にして終始一貫せる品性の追求である。飢渴くわく如く義を慕ふ者は初めて品性の眞幸福を味はへる事が出来る。

次に矜恤きんじゆある者は神と人との矜恤を得るであらう。『凡べて爾が量る所の物を以て爾も亦量らるべし』。報償を喚起するものは多く不義不仁の人である。残酷なる人の態度その物が人の心を固くするに足る。彼は如何にして眞の同情を喚起すべきかを知らない。吾人が普通に感服しない人と稱する者は即ち彼等である。之に反して同情に富める人の日常の氣風が直ちに吾人の心を引き着ける、彼等は同情と親愛とを受けずに居らぬ。常に他人の生活と同情を保ち得る所の者は結局決して孤獨の境遇に陥る事はない。人或は世の賞讃を受け羨やまれ尊敬せられ而して畏れられる事は出来やう。併しながら若しも彼が無慈悲であつたならば、彼れの運命は終りに近づきつゝある。神は勿論の事、人も亦利己的生活の恐ろしき寂寞に於て彼を遣

すであらう。彼は人の矜恤を求むるであらう、而かも何處にも之を見出し得ぬ。彼は人と自己とを結び附ける結繩を斷ち切つたのである。彼は孤獨である。惻發で冷酷で利己的で經綸ある人々が茲に其の報ひを得るのである。彼等は幸福の最も確實なる源泉である友情の最も善き恩賜を不可能ならしめたのである。

無慈悲の損害

而して無慈悲なる精神は人の内的生命にまで更に大なる損害を與へる。根本的に愛の缺乏せる無慈悲の人々は神の恩恵をすら理解する事が出來ず、まして其愛を信じ之を受けろの力がない。『矜恤ある者は福なり』何となれば彼等は神人兩者の慈愛を受けろを得るが故である。

人生に於ける實際的に不遍なる法則は、他人は汝の齎らせる同じ貨幣を以て汝に拂ふと云ふ事である。即ち慈愛を以て慈愛に報ひ、快憫を以て快憫に報ひ、偽を以て偽に報ひ、不信用を以て不信用に報ひ、法律上の權利を以て同じ權利に報ゆるのである。

而して仁愛に對する祝福は更に深き根底を有して居る。人は個人的の關

係の爲に造られたるものである。若しも彼がそれなしに個人的關係が決して深くなり得ない所の其の同情を有しないならば、彼は凡ての幸福に向つて其の戸を閉づるのである。彼は同情の冷酷なる缺乏に於て幸福であり得る理由がない。

慈悲は幸福の一主要條件である。

心の清き者の祝福は神を見る事である。神を見るとは倫理的の言葉で云へば人格の最深最全の顯現を見るの謂ひである。而して神を見る事は大なる喜悅を意味するとイエスは確言された。吾人の最高の喜悅は常に吾人の人格的生活の中に存する所のものである。而して人格が益々豊富にして顯著なるものがあればある程、斯くの如き人格の顯現が吾人に與ふる人生の祝福はそれ丈け偉大である。故に神の生命の内容の如何に豊富なるかを知らる所のものは滾々として盡きざる幸福の源泉を有するのである。而して斯くの如きは心の清き者の幸福であるといへば主張されたのである。而して斯

扱てイエスの此の約束は決して無鐵砲のものではない。此の品性と此の

幸福の條件として清き心の

祝福との關係は密接にして避くべからざる種類の關係である。強き情慾に反抗して他人を尊敬する事は、自然に神御自身の顯現に對する更に高き尊敬にまで人心を導くものである。何となれば凡ての尊敬の念は實際同質のものであるが故である。故に人の中に神を見る事は自然に神自身を見るの力を與ふる事にならねばならぬ。故に心の清きとは即ち神を見る事である。

神の父たる事のイエスの根本的教訓も亦た吾人を之れと同一なる結論にまで導く。何となれば之は神が出來得る丈け充分に自らを人に表はさんと望み給ふ事を意味し、而して人の中に神を見るの明が次第に出來て來る事を切りに待ち給ふ事を意味するからである。併しながら人の人格でも神の人格でも、人格の最も完全なる最も深玄ある啓示は唯敬虔なる人にのみなされるのである。人間たる汝も野卑にして嘲弄的に、無頓着にして不敬虔なるものにならば、汝の最善にして最聖なるものを表はさんとはせぬであらう。縦令汝がしかなさんと試むるとも彼等は之を受くる事が出來ない。其の啓示の眞意義が彼等の眼光の達する以外に横はるからである。故にイエ

敬虔なる
者のみ啓
示を受く

見神の道

スは「家に眞珠を投げ與ふる勿れ」と云はざるを得なかつたのである。敬虔なる者にのみ神を見るの明が特別に與へらるゝであらう。而して敬虔は心の清き者に於てのみ其の最高に達するのである。

人果して神を見んと欲するであらうか。世には神を見るの靈眼に就いて又は見神に關する神秘の經驗に就いて語る者が多い。併しながらイエスの云はるゝには神を見るの道は爾の近くに在る爾の身邊にある。誰か神を見ん爲に天上に昇り又は地下に降らんと云ふ事勿れ。唯だ心を清くせよ、凡ての靈魂の中に神の子を認めよ、而して物件としてではなく人格として之を取扱へ。斯くイエスは見神の法を示し給ふた。人一たび此の境涯に達すれば如何に神は吾人に近くなり給ふぞ。イエスは吾人に向つて汝唯だ我れを見よ、直ちに其處に汝は我れを見出すであらうと云はれたのである。『爾我が兄弟なるいと小さき者の一人になしたるは即ち我れになしたるなり』
『我れを接くる者は我れを使はし、者を接くるなり』如何に迅速に必然的に吾人の心中の最小の不淨心が吾人の見神の明を曇らすかを見よ。敬虔の

念は人に到り又神に到る吾人の窓戸である、不淨の念は忽ちにして之を閉ざして仕舞ふ。果して然らば清心と見神とは決して偶然の關係ではない。神は清き心即ち敬虔の靈にまで自己を現はし給ふ、而して徹頭徹尾自己に對し又他人に對して敬肅謹嚴なるものにまで最も能く自らを現はし給ふ。人に對して唯だ義しかれ然らば爾は神を見出すであらう。「心の清き者は福なり其の人は神を見る事を得べければなり」之れを倫理的の立場から見れば、イエスが考へられた如き純潔の精神は、生命の統一と調和の觀念を人生に齎らし得るものなる事を意味する。眞に心の清き者は人を通して神を見、又神を通して人を見る。彼は神の生命の顯現たる人生の統一と調和を見出して其處に無限の喜びを味はざるを得ない。

心の清き事は最高の幸福を得る根本的の條件である。

『和平を求むる者』に對してイエスは神の子として認めらるゝ事の幸福を約束せられた。是を倫理的の言葉で云へば、品性及び靈性の最高級に屬するものとして認めらるゝの幸福である。斯くの如きは毫も怪しむに足らぬ、

幸福の條
件として
の平和を
求むる事

何となれば平和と愛を人生に増進する事は即ち是れ神自身の事業其物であるが故である。されば此の事業に熱中する所の者は「受くるに非ずして與ふるの喜び」を神より分與さるゝ事が出来る。彼等は天父の業と其の喜びにまで子として參與する事を得るのである。げに彼等は神の子であり又しか稱へらるべき者である。彼等は神と一心同體たる事の意義を益々深く了解し、其の最高の人格的關係を益々切に實驗するに至るであらう。彼等が人に對する神の至愛の目的を知り、自ら神の靈の働きに參加する事多ければ多き程、彼等の愛の自覺が強くなり神の子たるの喜びが深くなるのである。而して彼等は他人が次第に彼等の精神を認めて、神の子として彼等を尊敬するを見て一層の喜びを感ずるであらう。私心なき平和を求むる所の生活は決して永久に誤解さるゝものではない。

平和を求むるの事業は明らかに人生の幸福に達する道である。

イエスは單に幸福の見地から見てすら八福の最後の性質を高調するに毫も躊躇せられなかつた。彼れ毅然として宜はく「義しき事の爲に責めらる

幸福の條
件として
の犠牲
の爲に

る者は福なり天國は即ち其の人の有なればなり』と。イエスは人は愛の爲め又義の爲めに造られた者で、此の使命を果さんが爲に勇敢なる犠牲的奉仕の行爲に出でねばならぬ事を知り給ふた。故に何等の躊躇する所なく、彼は直ちに豫言者の實驗に訴へ、又彼自身の英雄的招致たる『爾曹十字架を負ひて我れに従へ』と云ふ警語を叫び給ふたのである。『我が飲む所の盃を爾曹も亦飲むべし』而して彼れの如く其の弟子たる者も亦『盃を取りて謝す』るに至らねばならぬ。一面人の罪惡にまで毫も其の目を掩ふ事なく、他面人の伏能及び光榮を信する事の深き、古來の宗教的聖賢中イエスに優れる者は一人もない。彼には毫も嚴酷に失する如き態度がない。唯だ彼は人の勇敢なる獻身の精神に訴へ、同時に彼等の誠忠なる燃ゆるが如き服従を期待されたのである。彼はヒントンの云ふた如き『凡ての苦痛は犠牲の中に總括され得べく而して犠牲は喜悅の器物である』事を知られた。ジョージ・エリオットが云ひし如く『吾人は廣き考へを以て獨り己が爲のみならず世界の己れ以外の人々の爲に同情同感をも有する事に依りてのみ彼の偉

人に相應はしき人生最高の幸福を有する事が出来る。而して此の種類の幸福は屢々之と共に多くの苦痛を伴ひ來るものである。之がイエスの所謂其の生命を得んとする者は之を失ふべしなる人生の一大矛盾中に含まれたる眞理である。『一粒の麥若し地に落ちて死なすば唯だ一つにてあらん、若し死なば多くの實を結ぶべし』實は唯だ苦痛の中にのみ結ばるゝものである。果せるかなイエスは此の勇敢にして犠牲的なる獻身の愛にまで天國の幸福を約束された。此の約束は柔和なる者の場合に於けるが如く單に伏能的であるのみならず寧ろ現實的に得らるべきものである。自ら喜んで自己を犠牲にする所の愛は既に天國を有する、即ち其の人自身の心の中に天國は既に現在するのである。げに愛は最高の賜物であつて他の凡ての幸福を含む。それは最高の生活である、神自身の生命である、『生命の生命たる所以である』愛には失敗がない。之れのみは永久なる一物である。斯かる愛の所有者にまでキリストは『我が父に恵まれたる者よ來りて世の初めより爾來備へられたる國を嗣げ』と云はざるを得ないであらう。此の世の中の

最善のもの、然り永久の最高善は愛にまで屬する、否な愛その物である。『義しき事の爲めに責めらるゝ者は福なり天國は即ち其人の有なればなり』。天國とは即ち最高善の謂ひである。彼等は何人にも優りて神の生命と喜悅の最も深き意義を曉る事が出来る。

犠牲的の愛は幸福の最高條件である。

凡て是等の教訓に於てイエスは人生幸福の問題を輕々に論じられたのではない。彼は皮相の見を以て一時の氣休めを彼等に與へるが如き不眞面目なる態度を取り得ざる程に人を熱愛し給ふた。彼は人をして最も深く最も永久に幸福ならしめんとするには多くの安逸を貪る人々のなすが如く淺薄なる事物の表面に思ひを留めてはならぬ、寧ろ深く人心の奥底にまで貫通し、如何に偉大なる者が彼れの中に存するかを見て、直ちに其の偉大なるものを満足せしめねばならぬ事を知られた。故にイエスが幸福の條件として規定し給ふた所のものは何れも皆根本的で且つ徹底的なるものゝみである。乃ち茲に山上の八福に於て人生の幸福に對する最大の條件が披瀝され

八福の性質は凡て幸福の根本條件なり

たのである。是等の資格は品性成長の避くべからざる條件であり且つ最大の事業並びに最高の友誼の條件である。而して是等のみ眞に人生の幸福を保證するに足るものである。

三 感化

而して又此等の根本的性質中に感化の主要なる條件が存するのである。何となれば是等の性質は第一に他人に影響する所の自然の勢力であるが故である。何等の偏見邪念なき公正にして快潤なる人は自然に他人の間に信用を博するに至る。而して自己の缺點を知るの謙遜なる態度は能く他人の反對を和らげ、且つ自負心の強き者には到底望み得ない美はしき奉仕の精神を實現せしめるものである。嚴格なる克己の精神を以て自らを制する所の人は最も確實に他人を制し得る所の人である。正義の追求に對する熱誠はそれと共に大なる確信を持ち來たすものである。思慮深き同情と他人の人格に對する眞個の尊敬、他人の價値を見出して喜んで之が爲に自己を犠

八福の性質は凡て幸福の根本條件なり

性にするの精神は、人に對する吾人の感化力をして絶對的に確實ならしむるに足るものである。

是等の性質は又幸福の最大條件として必然他人に影響を及ぼすものである。幸福それ自身が人を己れに引き着け他人の心を捉へ且他人を支配する力となる。而して斯かる人は彼れが其の充ち足れる喜びに依りて、眞正なる健全なる圓滿なる生涯を送りつゝある事を示すが故に、彼は他人の上に強大なる感化力を有せざらんと欲するも得ざるのである。

更にイエスは八福の是等の性格を有する所の者は地の鹽世の光である事を宣言して、其の他人に對する感化の如何に善良なるかを示し、來らんとする兄弟相愛の新文明を促進するに於て如何に有力なるものなるかを明示されたのである。茲には勿論自己の品性の中に既に此の新文明の要素を有する所のものは最も有力なる感化力を有する分子である。品性は傳染力を有する。吾人は他人をして成らしめんと思ふ所のものに先づ自ら成らねばならぬ。八福中にイエスが列擧されたるが如き各性質は地上に實現さるべ

幸福なる
生活の感
化力

善の感
染力

神國建設
の基礎

き兄弟相愛の新文明の活ける種子である。

而して是等の性格の人々は來らんとする新文明の直接若しくは間接の働き手と成るものであるから一層重要な位地を占むる者である。斯かる人の一舉手一投足は眞社會の建造に貢献すること偉大である。彼等は常に高遠なる理想を夢み若しくは遠大なる目的を望見する許りではない。人々の間に平和を齎らし、他人の爲に犠牲となり、以て着々其の理想國の實現を早めつゝある。斯くて八福の美訓の中に吾人は感化の最大條件を見出すのである。

茲に於てか吾人は左の結論に達する事を得る。品性と幸福と感化とは人生の三大要素である。而して此の三者の主要なる條件をイエスは八福中に指し示されたのである。げに茲に吾人は純然たる倫理的方面に於ても（宗教的方面は云ふまでもなく）人生の地圖と航海日程とが眼前に展開されるを見るのである。

故に八福に於てイエスは彼れの眼前に在る『弟子達』に向つて以下の如

其一、品

總括三則

く云はんとし給ふたのである。我れは何よりも第一に汝等が品性を有せん事を望む。我が列擧した所の性質は品性の眞個に根本的な性質である。是等は世俗的の徳性ではない。世俗は毫も之を美德と稱せぬであらう。而して是等は我が弟子の多くの者に依つてすら寧ろ補助的な而して單に消極的な徳性として認めらるゝであらう。さりながら是等は皆缺くべからざる根本的の美德であつて、是れなしには眞個の品性に達し得るのである。余は爾曹に品性を望む。斯くイエスは其の弟子に語り給ふたのである。イエス又曰ひ給はく、我れは又爾曹に幸福を望む。我れの之を望むは其の求むる所の何たるを知らざる者の如く漠然たる者ではない。我れは充分に其の價值を知るが故に爾曹も皆な等しく之に與からん事を望むのである。即ち人生が與へ能ふ所の最善にして最大なる、最深にして而して最も豊富なる幸福である。而して我れは爾曹に此の幸福を望むに際して我が熱心神に祈る所のものは、神が爾曹の中に謙遜と悔悟と克己と執誠と同情と純潔と平和と犠牲の精神とを發揮し給ひ、其の根底をして益々深からしめ給は

其三、幸

んことである。我が爾曹に望む所のものは人生最善のものであつて、人生最善のものは即ち成長の幸福、克己の幸福、友情の幸福、奉仕の幸福、献身の幸福、神を樂しむの幸福に外ならぬ。

其三、感

而して我は又爾曹が感化力を有せん事を望む。即ち地上にありて缺くべからざるものとならん事を望む。兄弟相愛の來らんとする新文明は其の指導者として我が茲に述べたる如き性質を有する所の人々を要求する。爾曹の知る如く異邦の君主は其の民を司どり其の大なる者は彼等の上に權を執る。さりながら爾曹の中にはしかすべきでない。誰にても爾曹の中に大ならんと欲ふ者は爾曹に使はるゝ者とならねばならぬ。而して何人にも爾曹の中に首たらんと欲する者は爾曹の僕とならねばならぬ。『斯くの如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず却つて人に役はれ又多くの人に代りて生命を與へ其の贖ひとならん爲なり』我れは指導者たるの價值を知る、故に我れは爾曹が人を感化し此の世に貢獻する所の者たらん事を望む。斯様にイエスは教へ給ふたのである。

第七章 山上の説教に於ける人生の大動機

山上の説教全體の概論が吾人に暗示する如く、前章八福の研究に於ても吾人は全體の説教に貫く根本原理を知らず識らず研究しつゝあつたのである。さりながら其等の根本原理は、イエスが此の説教に於て指示し給ひし所の人生の大動機に就いて、吾人の研究を進める時に益々明らかに現はれ来るであらう。

若しも愛即ち無私なる友情を以て人生に於ける唯一缺くべからざるものとすとのイエスの主張が正當であるとするならば、然らば個人に取つても國民的生活に取つても、個人的品性に取つても社會的奉仕に取つても、地上の生活の爲にも永遠の未來の爲にも、凡ての人に對する終局の問題は眞正なる智慮ある終始一貫の愛の生活を送るの道を學ぶ事に存する。吾人に取りて之よりも深く之よりも難く又之よりも肝要なる事業は何物も存しな

終局の問題

問題の困難なる所

イエスの解決

い。とは吾人の生活に於ける終局の問題であつて人生の一切の問題は結局茲に歸着するものである。而して人生の凡ての教育に於ける最後の試験は、イエスの思想に據れば唯だ左の一問である。曰はく、人格とは爾に取りて何程の意味を有するものであるか、爾は實際に人の良友となるには如何なる意味なるかを知つて居るか云ふ一問である。

吾人は凡て愛が人生の終局問題なる事を信する事が出来やう、併しながら之が實現に於ては全く絶望の如く思はるのである。吾人が成し能はざる所の唯一事は、他人に對する全く無私無我なる愛を抱くの境遇にまで達するの一事であると思はるゝ事が屢々である。實際吾人は如何にして一切の猜疑や嫉妬や怨恨や誹謗や憎悪や慾情やを脱して、美はしき友情と貴き相愛の精神にまで達する事が出来るか。誰が此の道を示し能ふか。誰が吾人をして其の道を踐むの力を有せしめ能ふか。茲に此の問題の最も困難なる部分が存するのである。

初て山上の説教に於てイエスは先人の未だ能くし得ざりし程明確に萬人

の爲に此の問題の解決を與へ給ふた。而して此の愛の活現に對するイエスの有力なる解決が吾人に取りて最も肝要なるものである。イエスが茲に解決して明示せんと試みた所のものは、愛の生活の困難よりも、寧ろ其の實行され得べき可能性と又之を實行すべき方法に關してである。而して山上の八福に於て真正なる愛の要素を定義した後、イエスは愛の生活の四大動機を人々の前に明示されたのである。是等の動機に依つて第一に憎惡の念を去り（太五ノ二一―二六）情慾を制し（五ノ二七―三二）虚偽を棄て（五ノ三三―三七）復讐の念を去り（五ノ三八―四二）パリサイ的正義を排斥し（六ノ一―一八）輕侮の念を除き（七ノ一―一二）而して真正にして寛容なる愛を人生に齎らす事が出来るのである。即ちイエスが人生の大動機として主張し給ふ所は、第一人の内的生命の統一ある事、第二彼自身の律法完成觀、第三各人が互に兄弟たる事の事實、而して第四神は吾人の天父たる事の四個の原理である。

四大動機
(思想)の

是等の四大動機の中の三個は山上の説教の主なる部分に一々適合する、

山上の説教に於ける適合

即ちモーゼの律法の精神的完成に對しては完成觀の動機が適用され、天父に對する隱微なる正義の實行に關しては天父觀が適用され、人格に對する神聖なる尊敬に對しては同胞觀が適用されるのである。勿論是等の理想の何れも説教の或る一部分にのみ局限されて居らぬ事は明らかであるが大體に於て斯かる適用を見出す事が出来やう。而して第四の動機たる内的生命の統一と云ふ思想は説教全體の背後に横はるものであつて、イエスは人性の根本法則として屢々高調せられ、又茲にも數次反覆されたる所の思想である。

是等の動機は果して人生に於て有力であるか。彼等は眞個友愛の生活にまで吾人を救ひ上げる力が實際にあるや否や。吾人をして腹藏なく之を精査せしめよ。吾人が實際的にイエスの倫理の力を試験するには之に優れる方法がない。

勿論凡て是等の動機はイエスの一大中心思想にして其の使命の存する所たる神の天父觀——倫理的に云へば世界の中心に於ける愛の存在の確信——

神の天父觀に其根

動機は果して有効なりや

中に含蓋さるゝのである。而かも四個の各々は或る點まで獨立の力を有するのであるから吾人が別々に講究する價值を認める。

一、内的生命の統一

第一にイエスが山上の説教に於いて屢々吾人に訴へられた所のものは、近世心理学の主要なる主張の一つである吾人の生命の統一てふ原理である。イエスの思想に據れば律法を守る事も之を破る事も結局同一原理にまで歸着する。即ち『是等の誠めの至微き一つを破る』は其人に取りて最大の誠律を破ると等しき禍ひである(五ノ一九)と主張された所以のものは、誠律に對する人心の統一上已むを得ざるに出でた思想である。人を輕蔑し人を審判し若しくは人を怒る所の精神は凡て同一なる心の發現であつて、共に皆當然なる論理的結果を收むべきものである(五ノ二二、二六)。四肢五體の一に存する惡事は忽ち全身に感染すること確實であるから、若しも全身を救はんと欲せば斷然其の五體の一を刺り去るより外に仕方はない(五

ノ二九、三〇)。生命統一の原理は單純と明瞭と正確と眞實を缺く所の片言隻語の中にすら大いなる危險が潜んで居る程に普遍的なる原理である(五ノ三七)。げに如何なる人生の目的も天父の性質と完全なる調和を得たるものに非ざれば全く安全ではない(五ノ四八)。義しき品性の眞個の報酬は彼の人には見られざるも『隠れたるに見給ふ父』に依つて與へられる所の避くべからざる内的報償である(六ノ一、四、六)。若しも靈眼の統一を缺くならば全生涯は忽ち暗黒になる。従つて人は二人の主事に事ふる事が出來ない(六ノ二二、二四)。自己の中に惡念の潜む時には決して他人にまで道德的判斷を向ける事は出來ない、潜める惡念は恰も眼中の梁木の如く自他に對する洞察を妨ぐるものである(七ノ五)。常に他人の身になつて見る事的一個の單純なる原理は凡ての正義を成就するものである(七ノ一二)。生命に達するの道は唯だ一條の狭き路である(七ノ一三、一四)。

斯くの如くイエスは其の教訓の此の部分に於て内的生命の統一の原理を反覆適用されたのである。全體の内部的生命は一個の統一である、そは凡

て一體より發するものである。生命の如何なる部分も全體から離れて獨り昇降する事は出来ない。如何に潜める善惡の念も全體に普及せず居らぬ。此の内部的影響の及ぶ所は飽くまで無制限である。此の故に凡ての罪は其自身の最も大いなる刑罰である、罪は罪を孕むが故である。斯くの如く又凡ての最小の善も其自身の最も良き報酬である。故に品性に對する吾人の奮闘に於て、吾人は雜駁にして外部より來る所のものを或は攝取し或は排斥するのではない、寧ろ吾人自身の撰擇に伴ふ避くべからざる單純明確なる結果を吾人自身の中に受けるのである。

苟しくも自己の生涯を反省する人ならば、彼は自ら知りつゝ己が最善を盡さずして、而かも厭ふべき道德的停滯状態を自己の生涯に造り出さない場合がない事を知るであらう。之に反して吾人の意志が一たび或る一點に覺醒さるゝや、同時に其の凡ての點に於て強めらるゝ事の如何に確實なる事實であるかを知るであらう。之をイエスの教訓に従つて云ふならば、唯だ愛のみが生命である。而して若しも人は愛の爲に造られたる者であるな

二個の標
準は兩立
せず愛は生命
の種子

らば、我が中に存する憎惡の一小念も我が中に死を招くものである。之に反して愛の最小事も生命を來らす。果して然らば縱令吾人の理想と目的が其の最低の程度に在りて、未だ神は吾人の天父なる事を知らず、人は吾人の兄弟なる事を悟らず、唯だ己が現世の生活にのみ腐心する如き状態にあるとしても、尙且吾人は「余をして死なしむる勿れ。我が生命は一個の統一なり、而して愛は生命にして憎みは死なり。されば余をして余自身の生命の爲に愛する事を學ばしめよ」と叫ぶ事が出来るのである。げに愛は他人の爲ならず我れ自らの爲である。此の生命の統一の原理に基づいて、生命自らに對する飽く事を知らざるの愛情は、人を驅つて益々愛の生活にまで前進せしむるのである。

實際吾人は如何に他人に依りて侮辱せられ、従つて其の人の罰せらるべき價值が充分である場合に於ても、嫌厭若しくは憎惡の念を抱く事は吾人の衷に死を來らせる事であることを實驗せざるを得ない。此の他人の行爲は飽くまで輕蔑すべき下劣の行爲であるかも知れない、併しながら彼れの卑じ

むべき精神をして我が中に同じ下劣の精神を惹起さしむるならば、それこそ一層有害なるものとなるのである。彼等をして其の悪を遂行せしむると否とは我が彼等に依りて同じ悪心を抱くに至るや否やに因りて定まる。而して此の原理は一個人に對する如く人類間及び階級間にも同じく適用される。他の國民を憎む所の國民は憎まれたる國民に劣らざる刑罰を受くるのである。吾人が愛に反對なる精神を抱く時に吾人自身の生存の目的其のものを失ひつゝあるのである。憎悪の最小念も死を値ひする、而してそれ故に断然如何なる代價を拂つても切斷せねばならぬ。之に反して眞愛の最微なる者も善を價ひする。善き子であり善き兄弟であり善き夫であり善き父であり善き友であり善き隣人であり善き市民である事、是等は人生の凡庸なる大道と稱すべきものであつて、而して是等は生命の種子若しくは生命の擴充と稱すべきものである。即ち他人に對する單純にして正直なる且私心なき親切は自ら他に傳染して己が類を増殖し、人生に於ける愛の動機をして自然に且容易に凡ての人の衷に起らしむるものである。

人動もすれば生命の統一に就てのイエスの此の嚴格なる原理を否定して自ら斯く私語せんとする傾きがある、曰はく「吾人は一の場合に失敗しても他の場合に大いなる相違はあるまい。一の場合に憶病で首齧兩端であつても他の場合に勇敢で果斷である事が出来やう。今吾人の愛の實行に全心全力を盡さぬとも後日盡し得るの機會があるであらう。吾人は不淨の情を抱きつゝ同時に完全なる誠意を抱く事が出来やう。吾人は不正直であつても同時に絶潔を保つ事が出来やう」などと獨語するのである。併しながら之は凡て不可能の事に屬する。而してイエスの嚴格にして許す所なき要求は、彼が吾人に向つて更に完全なる更に徹底せる愛、即ち完備せる生命其ものを要求し給ふの聲である。是れ人の性質其の物が内的生命の完全なる統一を必要とするものなりとのイエスの深き確信を云ひ表はす所のものである。

一、成就に關する思想

前述生命の統一の原理は自然にイエスが以て人生の第二の動機と認むる所のものを引き出す事となる。即ちこれは物の終極にまで徹底せしめずんば已まざる所の完成力であつて、依つて以て圓滿なる結果にまで到達せしむる所のものとして極力主張し給ふたのである。吾人は假りに之をイエスの成就的動機と稱する。吾人は完全なる結果を收めんと欲せば正義の律法を成就せねばならぬ。恰も吾人の思想の生活に於て最大の困難は理性の要求を終局まで推し究める事なしに途中で研究を中止する事から生ずるが如く、吾人の實際生活に於ても凡ての不満足なる結果は、吾人が人生に於ける正義の原理に就て本當の熱心を以て飽くまで之を實行せんと努むる事がないから生ずるのである。故にイエスは此の成就の思想を以て山上の説教に於ける彼れの教訓の基音とし給ふたのである。即ち彼は「我が來るは律法と預言者を廢てんが爲に非ず之を成就せんが爲なり」と云ひ給ふた（五ノ一七）。吾人は義務の法則の最小點にまで服従せねばならぬ（五ノ一八一―一九）。吾人の正義は最も嚴格なりしパリサイ人の正義にも優らねばならぬ。

吾人は殺人の行爲の背後に横はる怒と輕蔑の精神を撲滅して、其の代りに和解を求むる所の精神を養成せねばならぬ（五ノ二一―二六）。吾人は淫靡の行爲の背後に横はる不潔の情念を撲滅する爲に如何なる代價をも辭してはならぬ（五ノ二七―三〇）。吾人は嘗に吾人の誓を成就するを以て満足せず、更に進んで最も單純なる眞實即ち一切の誓を不用ならしむる所の眞個の誠實を我がものこそせねばならぬ（五ノ三三―三七）。吾人は嘗に正當なる復讐の範圍を守るを以て満足するのみならず、寧ろ進んで凡ての復讐を否認し、其の代りに愛の積極的精神を以て之に對するに至らねばならぬ。こは他人の利己心が汝に要求する所の物を遙かに超越する所の愛の奉仕の大精神である（五ノ三八―四二）。斯くして吾人は正義の律法を其の圓滿なる結果にまで成就する事に依りて萬人に對する愛を完成し、且天父の眞の子となる事を得るのである（五ノ四三―四八）。吾人は人の目の前に自ら正しとするが如き外形上の正義を以て満足する事なく、寧ろ隠れたるに見給ふ天父の前に隠れたる内的正義を自己に要求するに至らねばならぬ（六ノ

一、四、六、一八)。地上に於ける外界の所有を顧みる事なく寧ろ永久に吾人に伴ふべき内的品性の財寶を熱求せねばならぬ(六ノ一九―二一)。吾人は眞個に愛の生活に達すべき道は狭く且つ險しき事を認めつゝ、而かも之を攀するの覺悟を有せねばならぬ(七ノ一三―一四)。而して凡ての敬虔なる儀式や凡ての外形的義務の遂行以上に天父の聖旨を成就することを第一の目的とせねばならぬ。(七ノ二一―二三)。

以上述べたる所に據れば、イエスは生命並びに幸福に達するの道が出来得る丈神の律法を避ける事に非ずして、寧ろ之を完成する事に存するを認められたのである。即ち律法の精神を其の終局の到達點にまで遂行し、之を生命の奥底にまで要請するに存するのである。イエスの思想に従へば神の恩寵はある格段なる不愉快の行爲、甚だしきに至つては難業苦行の如きものを成すに依つて得らるべき外形的の報酬ではない。寧ろ神の律法の眞の成就是外的並びに器械的に非ずして内的並びに心靈的である。文字の末に非ずして寧ろ其の底に横はる精神である。例へば一切の物を殺す勿れと

律法の眞の成就は
外的的なる
器械的なる
精神的なる
部分的なる
的なる

の佛教の殺生戒は、一匹の蚊の生命を高めることが出来ても人の生命を向上せしむる何程の力もない。又猶太人の捧物さいげものや潔事に關する最も精確なる遵奉は、律法の主要なる精神を守る事の代りに其等の主要點から時間と注意とを奪ひ去るの效果より無い。修道院的なる出世間主義と一切の持戒的勤行とは眞個の正義を弘め、いのみならず、寧ろ正義の大なる要求を除外する傾向を有するのである。

尙又律法の器械的的外形的の遂行は到る處に精神的傲慢を助長するの事實を認めねばならぬ。之を行ふ人は自己が要求されたるよりも遙かに多くを成し遂げたかの如く思ふて、當然或る特別なる尊敬を神と人とより受くるの資格ある如くに考へるのである。世には或る外形的の行爲を以て正義若しくは宗教の誤りなき徴しるしと認める程危険なる事はない。されば人々は自己の遵奉しつゝある其等の外形的規則を以て直ちに之を正義の一般的標準と立つるの誤謬を常に警戒せねばならぬ。イエス彼自身は是等の外形的試験の何れにも服従する事を絶對に拒絶し給ふた、それが潔めの儀式或は斷食に關

律法の外的
形的の危険
的なる

する事、或は税吏罪人と交際する事、或は安息日の外形的規則其他如何なる事であらうとも、之を以て彼れ^の精神の態度を決定するの試験としては断じて是認し給はなかつたのである。

之に反して律法の内部的意義とも稱すべき眞個の心靈的なる遵奉の精神は必然人を謙遜に導くのである。何となれば此の眞個の遵奉が人の内的完全を要すると云ふ明確なる思想は、必然人をして道德的成長の無限の伏能にまで靈眼を開かしめ、従つて律法の完成を期すれば期する程其の到達點の益々遼遠なるを悟らざるを得ないからである。律法の外形的遵奉は人を誇らしめ、其の内部的遵奉は人を謙らしむるとは即ち此の意味である。

扱て此の徹底的成就の思想は吾人をして無我的愛の生活を送らしむるに於て一個の有力なる動機となるのである。イエスの意に曰はく、若しも汝が汝に害を及ぼした所の者との關係に於て眞に正義と平和と生命に至るの道を見出さんと欲するならば、汝は彼の殺す勿れと云ふ神の誠律に従ふを以て自ら足れりとする事なく、寧ろ進んで眞に其の他人と和らぎ又之を愛

律法の内的完成の爲めには、人間的な道徳を越え、神聖なる道徳に到達する。

義務は、大に生命の途に到達する。

するの境遇にまで進み行く事を期せねばならぬ。誠律の文句を守れば足ると云ふではない、其の奥に潜める意義を飽くまで發揮せねばならぬ。誠律は單に汝をして最大の生命に至らしむる所の道を暗示するに過ぎない。故に汝は其の道に於て進み得る丈け遠く進まねばならぬ。斯くて汝は初めて其の誠律を成就すると云ひ得るのである。律法の一點一劃をも逃げ盡さずして遺してはならぬ。律法の最小點も忽かせにしてはならぬ(五ノ一七一)。(五ノ二二)又汝は汝がなさざるを得ざる所のもの以上を爲せ、而して愛の精神が汝に暗示し得る一切をなさんと試みよ(五ノ三九―四二)。斯くてこそ初めて汝は眞の平和と自由と生命とを見出す事が出来るのである。イエスが寸時も忘れ給はなかつた事は義務則神意と云ふ一事である。而して神意は則ち吾人の生命であつて断じて吾人の生命の局限ではない。若しくは之を倫理的の言葉で云へば、義務は人間の存在其の物の法則に外ならぬものであつて、唯だ其の法則に従ふ事にのみ人の圓滿なる生命は存するのである。斯くて義務は吾人に更に大いなる生命と恩寵に達するの道を指し示し、毫

も吾人の生命を阻害する所のものとはならないのである。然るが故に義務の法則に背く事ではなく、又義務の法則を無視する事ではなく、寧ろ進んで之を歓迎し全心全力を傾注して、之れが完全なる成就を期する事に依つて吾人の真正なる生命は腐ち得らるゝのである。故に吾人は怖るゝを要せぬ、完全なる服従は完全なる生命に導く。

山上の説教に就いて吾人が屢々聞く所は、それが正義の最高なる標準を主張するが故に人に對する嚴格なる審判となるに過ぎないと云ふ事である。

余は之を以て其の主要なる思想を誤解したるの語であると考へる。何となればイエスは茲に従來考へられたる所を全く反對なる義務の法則の觀念を主張して居らるゝのであつて、其の律法觀に據れば律法それ自身の中に之に束縛さるゝの感から全く解放さるゝ自由の約束を含蓄して居るものなるが故である。即ち律法は人生に重荷を負はせるものではなく却つて之を解除するものである。義務を以て單に吾人自身の性質の法則とする近代の義務の觀念と全く一致して、イエスは神の律法を神の愛に反對して考ふべき

由新しき自

ものとは見ず、寧ろ神の律法は其の愛の權限の最も貴き部分であると見られたのである。吾人の性質の法則なるが故に當然生命に達するの道であり、神の愛の法則なるが故に吾人をして益々成長する生命に導くの道であるのである。故にイエスは含蓄的に云ひ給ふには、若しも汝が眞に神の愛を信するならば汝は彼れの意志に逆らふべき寸毫の望みも持たぬであらう、汝は如何に一見難く見ゆるとも眞個の生命に達するの愛の暗示として凡ての誠律を是認すべき筈である。而して人が斯く律法を見る時に彼は寧ろ義務の命令を歓迎し決して之に反抗する事はない。彼は自由を與へられたのである。即ち彼自身の意志に基づいて義務の進路を選ぶのである。彼は全く異なる見地から義務を見る。彼は義務の一切を歓迎する所の新精神を有する。略言すれば彼は律法を成就せんと欲するのである。

扱て若し人義務に對する此の新らしき感じを以て、正義の律法を成就する事に熱中するならば、彼は種々なる外形的の遵奉を餘義なくさるゝ事はなく、寧ろ彼れの生命の内的精神に重きを置き、凡ての誠律が結局歸着す

る所の愛の眞精神を其處に發揮するに至るであらう。一切の外部的行爲は此の内的生命の源泉から流れ出でる。然り而して斯くの如く一切の利己心を除去して愛に依れる律法の成就をなさしむる所の最大の動機は、神を天父とし人を兄弟とするのイエスの信仰に於てのみ見出さるのである。吾人は以下に之を講究せんと欲する。

三、「爾の兄弟」

吾人が他人に對して眞個の愛を抱くに至るのは、其人が吾人の愛を受くるに足る價值ある事を信するが故である。故に吾人はイエスの天父觀に含蓄されたる人類同胞の思想の上に吾人愛の基礎を置かねばならぬ。疑もなく神は吾人の天父であると云ふの思想、即ち倫理的に云へば世界の中心に愛が存在すると云ふ信念から自然に引き出さるゝ所の觀念は人が同一なる天父の子たる兄弟として相互に愛すべきものであると云ふ一事である。イエスに取りて人類同胞觀は彼れの天父觀の自然の推論に外ならぬのである

山上の脱教に於ける此の應用

が、其の爲めに愛の動機として毫も其の獨立の價值を減ずる譯ではない。寧ろ其の中に避くべからざる力が存すればこそ必然的の結論となるのである。イエスは人をして彼等が或は怒り或は輕蔑し或は憎む所のものは彼等の兄弟である事を記憶せしめんと欲したのである。兄弟なるが故に彼等は結局相互に親和すべきものである (五ノ二二—二四)。汝の敵若しくは迫害者すらも兄弟として愛すべき者である (五ノ四四、四七)。彼は又兎角他人を審判せんとする人々に警告して、彼等が暴露しつゝある所の過誤は即ち其の兄弟の過誤である、彼等が自己の缺點を棚に上げて頻りに他人を批評せんとするの傲慢は即ち彼等の兄弟に向つて誇るのである事を示されたのである (七ノ三一—五)。

然らば吾人若し人を愛せんとするならば、吾人は先づ彼等が我が兄弟なる事を信せねばならぬ、詳しく云へば (一)吾人の生命は我が生命と分つべからざる程に密接に編み込まれてある事 (二)彼等は全く我が如きものなる事而して (三)眞の意味に於て彼等はイエスの眼中に神聖にして無限の價值ある人

同胞さるは如何なる意味ぞ

格として映する所の所謂神の子である事を信せねばならぬ。一度以上の信念を抱くに至つて吾人は他人を憎み或は輕蔑し或は非難し或は殺害せんと欲するの氣に成り得ないのである。今左に少しく以上の三點に就きて述べやう。

先づ第一に人は我が兄弟である云ふ事は吾人の生命が相互に不可分の編み込まれてある事を意味する。イエスの根本的原理に従へば、吾人は何はさて置き先づ吾人自身の生命の爲に人を愛するの必要がある。吾人は教育學上に於て、多く自我の實現とか豊富にして増大する所の生活とか云ふ事を口にするのである。果して然らば吾人は生命を豊富にし若しくは増大ならしむるに於て絶對的に吾人を妨遏する所のものは即ち利己的生活である事を明らかに認むべきではないか。イエスの立場から見れば『利己的の修養』なるものは言語上の自家撞着である。利己的生活の全傾向は情愛もなく結果もなき寂寥即ち荒涼たる砂漠の生活たるに過ぎない。之に反して人己が生命を増大せしめんと欲せば彼れの取るべき唯一の道は、他人に

他人との
不可離的
なる關係

對する獻身の愛に於て全く自己を與へるの一事に存する。然らば吾人をして最も明らかに左の一事を自覺する所あらしめよ、即ち吾人に堪え難き嫌厭の情を起さしめ、吾人と何等の共通の點を有せざるが如く見え、時として忘るべからざる損害を吾人に與へ、其の精神其物が吾人の稱贊を博する能はざる如き、凡て是等の缺點ある人々は、吾人の到底如何ともする能はざる方法に於て密接に吾人の生命と關聯するものであるとの自覺である。果然彼は吾人の兄弟である。彼を愛する事に於て、縱令彼が吾人の愛を輕蔑するとも、吾人は自らの爲に博大なる生命を見出すであらう、何となれば愛夫れ自身は生命であるが故である。

而して次に他人は吾人の兄弟であると云ふ事は、吾人が好むと否とに拘はらず彼は眞に甚だしく吾人と類似して居るものなる事を意味する。吾人は時として全く他の階級に彼を置かんと努める、併しながら若しも吾人が自ら詐はらざるならば、彼が大體の主要點に於て恰も吾人と等しきものである事を是認せざらんと欲するも得るのである。即ち彼は吾人と同一な

根本的類
似

る諸々の能力を有し、同一なる二重の天性を有し、同一なる變遷し易き性質を有し、同一なる偉大の可能性を有し、而して同一なる共通の大利害を有する所のものである。而して是等の吾人と共通なる點は、要するに凡て階級と階級とを區別する所の諸點よりは遙かに大いなるものである。義務は時として吾人に他人の罪過を判斷する事を命ずる、而して往々之を非難せざるを得ない場合に遭遇する、然かも吾人は無慈悲なる熱心にまで陥つてはならぬのである。

然らば根本的に他人は吾人に等しきものであると云ふ此明確なる觀念を以て、吾人は眞に他人の位地に於て自らを置き、所謂他人の身になつて考へて見るの修行をなさねばならぬ。吾人をして最も明かなる想像を以て、馬太傳七章十二節のイエスの格言の原理を適用せしめよ。而して吾人が他人に與ふる所の待遇は吾人若し之を受くる時に自らが如何に感ずるであらうかを自問自答せしめよ。吾人は他人の上に支配權を有すべきものではない。吾人は就中輕蔑の念を除去せねばならぬ。吾人は他人の立場に立つて

類似點を
判別する同情ある
總會

事物を見、而して他人の異なる性情や異なる階級や異なる人種より來る相違點を以て、彼等が吾人と全く別種の存在物であるとするの謬見にまで吾人の良心を陥れてはならぬ。歴史上の最も恐るべき殘酷の行爲は、此の人の同一と云ふ眞理の否認から自然に流れ出でた結果に外ならぬ。

而して又此の他人は吾人に等しき者であると云ふ事は、恰も吾人が他人の未だ認めざる所の多くの美點が我が中に存する事を自覺するが如く、其の如く彼れの中にも吾人の眼に映せざる高貴なる方面が多々存する事を認めねばならぬ事を意味する。茲に氣質上の相違が美點の多くを吾人の眼より隠し易きものである。吾人は彼れの長所に吾人の注意を注ぎ其の弱點に注いではならぬ。凡ての場合に於て正確に他人の内的生命にまで透視する事は容易の事でない、況んや若しも吾人が冷淡にして同情なき精神を以て之に對するに於ては、能く他人を洞察する事は全く不可能である。げに吾人は他人を理解する上に於てすら所謂利己心より懸け離れたる一種の餘裕ある心を要するのである。

吾人にして若し他人の理想とする所のものを同情を以て認識するの位地にまで進まないならば、未だ以て現代の人類共通の意識にまで到達せりと稱する事は出来ない。彼の理想を見て之を熱愛するの情緒、他人の爲に獻身的に生活し、又は犠牲的に死するの英雄魂、是等は決して吾人の狭き徒黨や人種にまで限られたるものではない。吾人は眞に吾人と甚だしく類を異にする如く見ゆる人々——勞働者、資本家、黒奴、白人、教育ある者、無智なる者、鋭敏なる者、痴鈍なる者——の生活に於ける隠れたる理想にまで吾人の眼光を注いだ事がある乎。人の根本的同一を無視すべく或は人種的或は階級的障壁を設くる事は断じて基督教的愛の法則の眞解釋と稱する事は出来ない。吾人は常に吾人自身のものとして稱する人々にのみ尊敬と信仰と愛とを負ふばかりではなく、世界の萬民にまで同一の義務を負ふ者である。イエスの教訓に據れば吾人は何人にも失望すべきでない。而して吾人は個人としても亦國民としても吾人が此のイエスの根本法則を徹頭徹尾是認するに至るまでは、決して終局の平和を有する事は出来ないであらう。

而して最後に他人が吾人と等しいと云ふ事は、彼が同じき缺點と誘惑と奮闘とを有し従つて同一なる悔悟と苦悶とを有する所の人間である事を意味する。而して吾人若し眞に之を信するを得るならば、如何に時として他人を賞讃する事能はざる場合に於ても、常に彼を憫れみ又彼れの眞の幸福を企圖する事は出来得べきである。吾人の眼には恰も一種の殻の如く彼と世界とを隔離する所の頑固にして傲慢なる彼れの態度のほか見えぬかも知れぬ。併しながら吾人は密かなる處に於ける彼れの苦しき自己反省や苦悶奮闘の辛らき經驗を知らずに居るであらう。彼れの奮闘は縦し失敗に終ることも、少くとも其の瞬間に於ては眞面目に神にまで訴へつゝあるのである。彼は吾人の兄弟である、彼は吾人に等しくある。吾人は彼を愛する事が出来る、吾人は彼を愛さねばならぬ。

斯くの如く又各人が神の子なりと云ふ命題は其の言語の陳腐なるに拘はらず決して平凡なる思想ではない。茲に倫理的並びに宗教的動機は明らかに相接觸する。併しながら其充分なる倫理的内容は此の問題に關するイエ

人は皆な
神に愛せ
らる

スの宗教的意義を講究する事なしに發揮さるゝ事は出来ない。
先づ第一に人は神の子なりと云ふ事は、イエスに取りて彼の吾人が憎悪
する悪人と雖も尙且天父の子であつて、神によりて愛せられ待ち望まれ探
し出される所のものである事を意味する。神は吾人を愛する、その如く神
は彼をも愛する。吾人は神の子であるとは如何なる意味なるかを認めなが
ら、同時に等しく天父の子である所の他人に對して殘忍酷薄の精神を抱き
得る理由がないのである。

無限の伏
能

然り而して各人が神の思想に於て一個の位置を有すると云ふ一事は、彼
れ自らの中に無上の價值を有し、無窮の生命の力を有し、無限の伏能を有
すると云ふの意味を含蓄する。彼は神の生命の分與に與かる以上は、智識
と力と品性と成長に於て如何なる制限をも置く事を許さない。吾人が常
に念頭に於て之を尊敬する事恰も神が之を念ひ給ふ如くせよと命せらるゝ
所のものは、即ち斯くの如き無限の伏能を有する所の神の子であるが故で
ある。而して吾人が眞に斯かる伏能に含蓄されたる無限の前途に就て考ふ

兄弟は審
判官なら
ず

る時に、斯かる貴き人間の爲に忍耐持久なる犠牲の愛を神と共に抱く事に
於て何の不思議もないのである。神が顧み給ふ所の者は充分に吾人の愛を
値する所のものである。
而して若しも彼が汝の兄弟であるならば、汝も亦單に一個の兄弟であつ
て決して審判者たるの役目を演ずべきものではない(七ノ二―五)。彼が汝
に等しければ等しき程汝は益々汝の兄弟の上に冷然と臨んで彼を判断する
の資格を有せざる者である。速かに裁判官の椅子より下り來れ。而して若
しも何者かを審かんと欲するならば汝自身を審きて人を審いてはならぬ。
而して汝がその兄弟の人格の價值及び神聖を表はす所の其同じ尊敬をば、
汝自身に對しても有せねばならぬ。而して汝は何者をして我が内的生命
に指をさし、其の根源に於て之を汚さしめてはならぬ。汝はその最高善
を發揮する爲に唯だ敬虔なる人々にのみ其の心事を打明くべきである(七
ノ六)。

四、「爾の父」

吾人が進んでイエスの第四の動機に到達するに及んで、神を天父とするの此の思想、即ち倫理的に云へば世界の中心に愛存すてふ思想は、山上の全説教に於ける基礎的斷案であつて、屢々其の中に云ひ表はされ、且其の全教訓に一貫する所の大原理である事を見ざるを得ない。人類の間に平和を増進する所のものは神の子として認めらるべきである（五ノ九）。人類の異嶽なる生涯の目的は恰も孝子の心の如く、天父なる神にまで榮光を期するに存する（五ノ一六）。神と生命を共にする事、眞個博愛の精神を表はす事、是れ即ち人が天父の眞の子である事を示すものである（五ノ四四―四八）。天父は其の子供等に眞の孝心を望み給ふ、即ち彼自身の心に等しき眞の愛を望み給ふ。而して之れ以外の精神から發生する所の如何なる行爲に於ても満足を見出し給はない。彼れの恩寵は其他の者の上に注がれないのである（六ノ一、四、六、一四、一五、一八）。人は神が彼等を知り給ひ且

山上の教に於ける此の原理の應用

人は愛の爲に造らる

世界の中心に於ける愛

つ彼等を受し給ふ事の深き信任を以て祈りに於て神に近づくことが出来る（六ノ八、九―一三。七ノ七一―七二）。而して若しも神が父であり、世界の中心に愛があるならば、人は確かに一切の憂慮を取除かれて信頼と平和の中に生活する事が出来るのである（六ノ二五―三四）。

此の天父觀はイエスの凡ての他の動機の根底に横はるものであつて、他の動機が發生し来る所の確信である。そは汝自らが愛の爲めに造られたる者であり、愛が汝自身の性質の法則である事を意味する。唯だ愛のみが汝の天性に調和を齎らし得る。愛無しに汝は常に自らと矛盾衝突せざるを得ない。故に若しも汝が責めては汝自身の性質に於て統一を有せんと欲するならば汝は何よりも先づ愛を學ばねばならぬ。

而して愛は常に汝自身の性質の法則のみではない。神が天父なりとの此の思想は、即ち世界の中心に愛が存在し、宇宙全體が愛の意思に加擔する事を意味する。即ち之を宗教的の言葉で云へば神は汝の父である。汝は父の愛に應へざらんと欲するも得ない。イエスは此の宗教的主張を最も力強

く高調して居らるる。

イエスが屢々繰り返へされたる『爾の父』と云ふ語の中に、甚だ密接なる個人的なる關係が含蓄されて居る。蓋しイエスの意は吾人の罪を赦し給ふ所の神の愛は、吾人をして悔ひたる謙遜の心を以て吾人の兄弟にまで同り愛を與へしめねばならぬと思はれたのである。苟くも吾人と神との關係を明知する所の者ならば、彼の人の負債を赦さざる僕の比喩中に最も痛き諷刺を感ぜざるを得ない。吾人に對する神の忍耐深く罪を赦し給ふ愛の眞意を覺る事は、即ち是れ吾人の同胞兄弟に對する寛容と愛の精神を發揮せしむるに相違なきものである。而して此の温かき宗教的の觀念中に最も純正なる倫理的確信が植え附けられて居る。此の確信は即ち曩に吾人が云ひし如き、宇宙には道德的傾向存し、而して全宇宙は愛の精神に加擔するものなりとの保證に外ならぬ。餘りに廻り遠き解釋を避ける爲に、吾人は寧ろイエスの宗教的の言ひ表はし方を其儘保存したのである。天父なる語は宗教的であると同時に倫理的であるが故である。

天父の愛を分與する

神を愛の父とするの思想は、又父の生命を分與するものが愛の人とならざるを得ざる事を意味する。其の反對に吾人が未だ人の罪を赦さざる精神を抱く間は断然神の生命から閉ぢ出さるゝ事を意味する（五ノ二三—二四。六ノ一四—一五）。而して之は決して神の方面に於て人の罪を赦すに躊躇し給ふが故ではない。缺點は人の方面に存するのである。現に人間の友情に於てすらも吾人が最高の精神を發揮し來らざる時に兩者の關係は必然阻害せらるゝではないか。況んや吾人と神との關係に於て心中の惡念が分離の籬かきとならない事が出來やうか。げに兄弟に對する憎みや妬みや怨みや又は他人の失敗を喜ぶの劣情やが、一個の誘惑として吾人に臨み來る様では、吾人は未だ卑しむべき低き状態に居るのである。吾人は斯かる精神を以て神に近づく事は出來ない。是れ吾人と神との間に横はる越ゆべからざる障壁である。

又神を活ける愛の天父とするの思想は、愛が神の生命其の物である事と、従つてイエスの思想に於ては愛即ち生命である事を意味する。之に反して

眞個の勝利

憎悪の念は如何なる幸福をも齎らし能はぬ。ぞは人を愛し又自ら愛せらるる吾人の力を弱める許りで、其の結果吾人の中に存する生命の流れを冷却し、吾人をして必然的に狭小なる生活を送らしめ、人生を楽しむの資格を滅せしむるものである。加之そは決して他人の上に眞の勝利を博せしむる所以でない。汝が蒙らしめた如何なる不正も、例へば他人を殺すの行爲ですら何等の利益を汝に與ふる事が出来ぬ。ブラツニングは其の詩 "Athev" の終りに於て此の思想を披瀝して居る。(詩は略す)。

他人に對する終局の勝利は、他人の憎みを愛に變せしめ、凡ての怨みを棄て、心から汝を愛するに至らしむる程の、美はしき精神を養ひ來る事に依つて、汝自らに勝つより外に之を得るの道はない。オルジール、デユウェー Orville Dewey は以下の如き言を發せる時に彼は明らかにイエスキリストの教訓を體得しつゝ、あつたのである、曰はく『凡そ憎みとか嘲りとか輕蔑とか云ふ如き人類間の種々なる關係は甚だしく煩悶と懊惱とに充ちて居るものである。人と交際するには唯だ彼等を愛するの外はない。即ち賞讃

愛によれる勝利の幸福

天父に信賴するの精果

天父親は他の動機を根柢とする

を以て彼等の徳行を見、憫れみと寛容とを以て彼等の過ちを見、宥赦の精神を以て彼等の不義を見るの外はない。汝の全心の工夫を絞つて或る他の仕方を考へ出さうとしても汝は決して發見する事は出来ない。汝の敵を憎む事は汝の益にならぬ、彼を殺す事も汝を益せぬ。宇宙間の何物も唯だ彼を愛するより外に汝を益する事は出来ない』と。而して之が眞の勝利であり又双方の爲の眞生命である。

而して神を天父とするの此の思想、即ち世界の中心に存する活ける愛を信するの信仰は、吾人をして信賴と平和と希望と勇氣との生活を送らしめ(六ノ四、六、八、九―一三、一八、二五―三四)。神の如き愛の生活を送らしめ(五ノ四四―四八)。而して何物をも恐れざる奉仕の生活を送らしめる(五ノ三九―四二)。而して凡て是等は最も重要なる意味を有する倫理的の結果である。

以上述べたる所の四個の原理は人生に於けるイエスの偉大なる動機である、即ち彼れの生活の秘訣と稱すべきものである。凡ては世界の中心に於

ける愛即ち我等の父なる神と云ふ一個の信仰から流れ出づる。而して凡ては一個の精神即ち愛にまで歸着する。凡て是等の思想の背後にはイエス自身的人格が毅然として立つて居る。即ち神の愛を實現し且つ解釋すると同時に、人に對する完全の愛を明らかに吾人に示して、吾人をして其種の愛を信じ且つ彼自身の人格に接する事に依つて、少くとも其の愛の幾分を自らのものとして捉ふる事を得せしむるものである。此のイエスの活ける人格の存在に依りて彼れの大思想は初めて圓滿なる意義を發揮したのである。神は父である。愛は偏る事かたよは出來ない。故に生命は一個の驚くべき統一である。而して罪は夫れ自身の最大の刑罰であり、愛は夫れ自身の最大の報酬である。終始一貫の愛の力は吾人の中に存する。

神は父である。故に彼れの命令は吾人の生命である。而して律法を守る事も律法より釋かるゝ事も、正義も自由も、皆な共に律法を完全に成就する事から來るのである。即ち律法が期待する所の精神を人生最深の奥底にまで徹底せしむるより來るのである。徹底せる愛の力は吾人の中に存する。

愛の力の源泉

神は父である。故に各人は我等に等しき神の子であつて、我等と同じ生命に於て編み込まれて居るものである。恩寵に充てる愛の力は吾人の中に存する。

神は父である。而して愛は生命である。無限にして永久なる愛は萬物の中心に存する。吾人は神の愛に對する根本的信仰から出發するが故に、思索しつゝ同時に生活する事が出来る。思想と實行とは伴ふのである。神の如き愛の力は吾人の中に存する。

終始一貫にして徹底せる恩寵に充てる神の如き愛よ。此の愛の四方面は密接にして離るゝ事が出來ない。若しも吾人が終始一貫にして徹底的ならんば、吾人は決して恩寵豊かに神の如くなる事は出來ない。

イエスの倫理的教訓の統一並びに抱擁的なる事は、山上の説教に存する人生の四大動機中に殊更能く現はれて居るが故に、神を父とするの思想から演繹して、是等の動機の概括を倫理的の形式に於て茲に略記する事は有益であらうと思ふ。而して斯くする事は以上の全體の議論を簡單に再説す

る事になるのである。

山上の説教に表はれたる人生の大動機

一、『爾の父』(五ノ九、一六、四四―四八。六ノ一、四、六、八、九、一四、一五、一八、二六、三二。七ノ一、二二)。

こは凡ての他の動機の根底に横はる最大動機にして、一切の信念が源を茲に發する所の確信なり。其の含蓄されたる意味左の如し。

(一)汝自身は愛の爲に造られたり、愛は汝自身の本性の法則なり。唯だ愛のみ本性に調和を齎らすを得、夫れなしに汝は常に汝自身と矛盾衝突せざるを得ず。

(二)而して世界の中心に愛存す。宇宙は愛の意志に加擔す(神は汝の父なり。汝は父の愛に應へざらんと欲するも得ず、即ち神の愛の生命に接觸するを免かるゝ能はず)。

(三)故に愛のみが生命なり。最高生命たる神自身の生命を分與さるゝの謂なり。

(四)斯くして吾人は信賴と平和と希望と勇氣との生活(六ノ四、六、八、九―一三、一八、二五―三四)。天父の如き愛の生活(五ノ四四―四八)。

及び不撓不屈の奉仕の生活(五ノ三九―四二)を送る事を得るなり。

二、生命の統一。人生は凡て一體より成る。如何なる部分も分離しては存在せず。『人は二人の主に事ふる能はず』(五ノ一八、一九、二二、二六、二八―三〇、三七、四八。六ノ四、六、二二―二四。七ノ五、一二、一三―一四)。

(一)若しも人が一個の統一せる存在者ならば、何處に潜める善惡の念も忽ち全體に貫き、其の同種類の繁殖を來たさずんばあらず。

(二)而して若しも唯だ愛のみが生命にして人は愛の爲に造られたる者ならば、然らば我が中に存する最小の憎惡も死の爲に働き、我が中に存する最小の愛も生命の爲に働くなり。

- (三) 斯くて此の原理は純正なる愛に於ける徹底的終始一貫の努力を惹き起すものなり。
- 三、義務の法則を成就する事。『我が来るは成就せんが爲なり』『爾曹の義しき事パリサイ人に優らすば云々』(五ノ一七―二〇、二一―四八。六ノ一、四、六、一八、二一。七ノ一四、二一、二四)。
- (一) 若しも人生義務の總括は愛にして、汝は眞に愛の爲に造られ愛は即ち汝が生存の法則なりとせば、然らば愛は生命其物にして、義務の遂行は汝の生命をして大ならしむるもの、決して之を局限するものには非ず(宗教的の言にて云へば、若しも神が眞に爾の父ならば則ち神の命令は爾の生命にして毫も之を束縛するものに非ず)。
- (二) 故に義務の法則を破り又は避け又は廢棄するに非ずして、寧ろ之を歡迎し全力を注ぎて之が完全なる成就を期する事は吾人に眞生命を齎らす所以なり。即ち義務の法則の一點一劃をも閑却せず之を遂行するは是れ神の意志を成就する所以なり。

- (三) 乍併若しも義務の總括は愛ならば其の完全なる成就は外形的の遵奉個條を増加するに非ずして、唯だ吾人の内的精神に愛の完全なる支配を來たらするに存す。即ち律法の籐を造るに非ず、心に満つるより外に溢るゝものたらざるべからず。之れ即ち律法を守る事なり、イエスの所謂成就なり。
- (四) 而して若しも人が愛の爲に造られ愛が人の生命なりとせば、此の内的精神に於ける愛の完全なる支配は諸々の善行が因つて以て發生する源頭にして、決して外來の壓迫的權力に非ず、従つて律法にまで束縛さるゝの感は去りて眞の自由は來るなり。
- (五) 斯くて此の原理は純正なる愛に於ける一生懸命の極端なる實行を生ぜしむ(五ノ二〇参照)。茲に注意深き警戒と大善の爲に小善を犠牲に供する必要は含蓄せらる(五ノ二九―三〇)。
- 四、『爾の兄弟』(五ノ二二―二四、四四、四七。七ノ三一五、一二)。
- (一) 人々の生命は相互に不可離的に編み込まる。『我等互に肢たるなり』既

に一體の肢たる以上は人を害して自ら利する能はず。故に汝自身の生命の爲に汝の兄弟に對する關係を忽かせにすべからず。

(二) 他人は甚だ吾人に類似するものなり。即ち凡ての主要なる天性に於て、同じ理想を抱く點に於て同じ缺點と誘惑と奮闘とを有する點に於て人は相互に酷似する者なり。故に汝若し人に愛せられん事を望まば汝に等しき此の他人に汝の愛を拒む事能はず。

(三) 他人は吾人と等しき一個の人格を有す。神の子たる神聖にして無限に價値多き人格を有する同胞は、吾人の忍耐持久なる犠牲の愛を値するに足るものなり。

馬太傳五章に於ける四大動機の適用例證

以上の人生に於ける四大動機はイエスが馬太傳五章の種々なる例證に依りて人生の諸問題に適用せる所である。即ち憎悪、汚情、不眞實、及び復讐の精神に對する教訓として表はされたのである(五ノ二一―四二)。積極的愛の生活を送るべき理由として是等の動機を講究した時に、吾人は既に

不潔の罪に對する統一成就の思想

不潔の根底的罪

イエスが如何に憎悪の念に就いて各方面から教訓を垂れ給ふた事を見たのである。併しながらイエスの種々なる例證の中に表はれたる彼れの此の方面の思想を今少し詳しく研究する必要があると思ふ。

先づ第一に不潔汚情に對する教訓として、イエスが適用された人生の動機は、生命の統一と律法の内的成就との二大思想である。即ち罪は如何なる場合に於ても先づ内心の承諾から始まつて外形の行爲にまで表はれて來るものであるから、現在未だ何等の目に見ゆる行爲が起らない場合でも、人の内心は其の根底に於て全然不潔に陥つて居るかも知れない(五ノ二八)。而して是等の心意的状態は的確迅速に肉體的状態に影響する、即ち人の全性質を通じて其の不潔を傳播し、正義の爲の一切の奮闘力を薄弱ならしむるものである。一度誘惑と闘つて之に敗るれば益々之に反抗する力を減少し來るのである。斷乎たる反抗は最初に於て最も必要である。人が全心全力を注いで奮闘すべき所は茲に存する(五ノ二九―三〇)。

加之、不潔の罪は社會の根底其の物に影響するところ偉大である。社會

を組織する眞の分子は即ち家庭であつて、家庭は人生の最も親密なる關係を意味するが故に、不潔の罪一たび茲に入りて人の人格の神聖を傷けるに於ては、人生の自餘一切に對する其の影響の重大なる實に測り知るべからざるものがある。そは全人を汚して仕舞ふ。彼れの生命の残りば空虚なる響きを發する。人若し自ら好んで此の點に罪を犯すならば如何なる他の罪か能く犯し得ないものがあらうぞ。基礎一たび傾けば其他は知るべきである(五ノ三二)。吾人は此の點に於て罪より免がるゝ爲に如何なる高き代價をも拂はねばならぬ(五ノ二九—三〇)。

吾人は人の人格に對する根本的の尊敬を、純潔の徳の根底として飽くまで尊重せねばならぬ。確乎不動にして終始一貫せる純潔の徳に含蓄さるゝ人格の尊嚴は、他の凡ての性格に優つて重要なものである。何となればそは最も美はしき個人的關係を保つ事の主要條件であり、而して吾人の衷情に於ける最深最善の部分と密接なる關係を有するが故に、最も隠微にして巧妙なる誘惑に對する最大の防禦力となるが故である。自他の人格を尊

不潔の罪の誘惑力

内部的の救

天父觀より來る動機

重するものは如何にしても不潔の罪を犯す事は出来ぬ。

斯くて不潔の罪より脱却する事は絶對的に内部的の修養に基かねばならぬ。單なる遁世主義又は消極的の修行は之に打勝つ事出来ない。唯だ高尚なる愛のみが能く下劣なる愛に打勝ち得る、即ち此の罪をして單に思想に於てすら起るを許さない程なる夫れ程の人格尊重の念あつて、初めて吾人は一切の汚情を征服する事が出来るのである。

神を天父とするの思想も亦た此處に其の適用を見出すのである。何となれば人若し眞に神が父なる事を信するならば、自己の天性の法則に於ける神の意を尊び、法則その物に於ける神の愛を信じ、而して何等の不平なく自ら進んで熱心に其等の法則を成就すべきが故である。故に彼は常に明白なる外部的の汚行を避くるのみならず、他人の生命の内部的聖所を聊かにも潰す事を敢てせぬであらう。而して他人に對する最高の愛、即ち神の思想と愛とを體得する所の愛心に於て、決して單なる情慾の中に見出されない所の無数の向上的要素が存在するものである。斯かる愛心の奥底には

有限なる地上の人格間に存する愛の關係をして永遠の世界にまで持續せしむるに足るの確實なる基礎として、神自身の愛を信するの信念が横はるのである。神に對する斯かる信仰は又無窮の愛の生活を前途に望むの希望を吾人に與へ、神が現在に於ても將來に於ても常に祝福し給ふものとして、自己の愛を尊重し其の力に信賴するを得せしむるものである。蓋し吾人の愛は神自身の愛の一部分であるが故である。

而して又此の不潔の罪に對して人は兄弟なりとの思想より來る人生の大動機が大いなる防遏力となるのである。何となれば人が他の人格の無限の價值と其の神聖とを認むるや否や、彼は如何にしても他人を一個の物件として取扱ふ事が出來ないからである。又彼は自己の罪惡が無限の貴き伏能を有する一個の靈魂を未來今世有形無形共に恐るべき耻辱にまで陥らしむる事を知るが故である。何人も眞に其の嚴かなる意味を考へつゝ同時に愉快なる回想を抱く事は出來ない。のみならず他人の純潔を汚すの打撃は同時に己れ自身に對する同一の打撃である。茲にも亦人は奴隷として他人を

同動機より來る動機

取扱ふことにより己れ自らも亦奴隷とならざるを得ないからである。吾人は分離すべからざる様に相互に結び附けられてある、而して吾人が他人を量る所の樹目を以て自らも必然的に量らるゝものである。人を汚して自ら汚れざる事は斷じて不可能である。

而して同一なる四大動機は又虚偽に關しても適用され得る（五ノ三三—三七）。イエスは之に關する教訓を結ぶに三十七節にある『爾曹唯だ是々否々』と云へ之より過ぐるは惡より出づるなり』と云ふ一語を以てせられた。之は彼が明らかに内的生命の統一の原理を示しつゝあるのである。何となればイエスの意は爾が安全に人生に處するの道は唯だ單純なる眞直なる純正なる眞實を把持するより外にない、之れ以外は凡て危険であると云ふにあるが故である。而して此の主義は又言語に於ける虚偽は人の生活の全部を危くするものである事を示す。人は一事に虚偽であつて他事に何の影響もない事は出來ない。一方面に虚偽を語る者は他方面にも虚偽を語る必要に迫られ來り、及ぼして到る處に虚偽の行爲をなすに至るものである。人

虚偽の罪に對する動機

統一の原理

あり若し或る一點に於て汝を詐るならば汝は他の點に於て決して全く其の人を信用する事は出来ないであらう。虚偽はイエスの主張に依ればそれが或は語られ或は行はれ或は表面に表はれ或は密かに隠され其他如何なる状態に於けるにしても眞に一大事である。従つて此の原理は又虚偽がそれ自身に於ての詛ひであり、其の避くべからざる報ひを伴ふものである事を意味して居る。人若し彼自身の眞實を勝手に弄ぶならば、遂には自ら眞實を語る事が出来なくなり、従つて全く信用を失ふに至る事明かである。外交的言語の習慣は品性を傷ける事大である。常に他人を疑ひ、自己の生活を常に空虚にし、其の結果自らを信用する能はざるに至つて、他人の信用は悉く地に墮つるのである。

イエスの例の成就の思想を虚偽の罪に適用して考へれば、茲にも亦吾人が内的生命に戻り行くの必要を認めねばならぬ。汝は人に誓盟を要求する事に依りて其人の虚偽を治する事は出来ない（五ノ三四—三六）。寧ろ吾人は何等の誓をも必要とせず又之をなさんとせざる程の精神を我が衷に養

成就の思想

ひ来らねばならぬ。イエスが茲に『更に誓ふ勿れ』と云はれた時に、彼は單に律法の内的成就の原理を堆し擴めつゝあるのであつて、或る新らしき外形の命令を興へつゝあるのではない。若し此の命令を外形的のものと考へるならば、それは全くイエスの意味を誤解するものであつて、彼れに精神に違背するものである。彼れの意に曰はく、汝は汝の衷心に於て自然に人の信用を持ち来らす程なる眞實を有し、従つて何等の誓をなす必要をも認めない程に正直であらねばならぬ。況んや己が虚偽を掩ふべき手段として誓をなすが如きは以ての外のことである。眞實を語ると云ふ事の背後には、第一眞理を常に考へる事、事物を有りの儘に観る事、中正公平の態度、凡ての偏見、執拗、術數、詐偽等より脱却する精神状態が横はるのである。其處には唯だ『是々否々』と云ふが如き極めて單純にして透明なる言語に於て自らを云ひ表はす程なる單純にして透明なる品性が存せねばならぬ（五ノ三七）。故に眞理は誓ひの外部的工夫に依つて無理に他人から引き出さるべきでない。眞理の存せざる所より眞理を得る事は出来ない。されば誓に

非ず約束に非ず唯だ内外大小一切の事に於て策略や虚偽の精神を心から厭ひ棄つる所の真情至誠のみ人をして全く此の虚偽の罪から脱却せしむるを得るのである。即ち虚偽の罪に對してイエスの律法の成就觀は如何なる關係を有するやと云ふに、彼の一切の虚飾偏見曖昧等を憎む所の徹頭徹尾正直なる透明純粹なる精神にまで人を立ち戻らしむる所に存すると云ふのである。

而して人を兄弟とする思想も亦虚偽に對する有力なる防遏力である。凡ての虚言不正直及び至誠の缺乏は汝の兄弟に對しての罪である、即ち愛を損ふの罪である。如何なる罪も虚偽より大いなるものはない。友情が忍び得ざる一事は虚偽である、何となれば斯かる友情は實際何の根據もない友情であるからである。一切の友情と一切の社會は互に信任すると云ふ基礎の上に打ち建てられねばならぬ。而して人若し眞實でなく從つて信用さるべきものでないならば、彼は即ち社會の根底其物を顛覆すべき或る事をなしつゝあるのである。

同胞觀の
原理

加之不眞實の態度虚偽の精神は絶對的に自家撞着である。何となれば凡ての人は神及び凡ての他人より正直なる取扱を受けん事を要求するものである以上は、彼れも亦其の同じ取扱ひを他人に與へねばならぬ事は明瞭なるが故である。而して他人を汝の兄弟であり汝と等しき性情を有するものであると云ふ思想は、汝が夫れ故に自らせられんと欲する所のものを、他人も亦汝よりせられん事を望む所である事を知らねばならぬと云ふ意味である。されば汝が他人より受けんとする所のものを他人に拒むべきものではない。

而して人は無限の伏能を有する一個の人格たる神の子として、彼は飽くまで眞實を汝に要求する價值がある事は云ふまでもない。

斯くの如く又神を天父とするの思想も亦眞實を進むる有力なる一動機となる。誓は特別に神に對してなされるものと想像されたのであるが、さりながら神は常に凡ての人の中に手近く存在し給ふのであつて、人の一言一は悉く神の前に存するものであるから、之に對する責任は誓のあらゆる形

天父觀よ
機
來る動

式と等しく決して免がるゝ能はざるものである (五ノ三四—三六)。而して天父は此の眞實の律法を吾人の天性即ち生命の法則として吾人の爲に造り給ふたのであるから、吾人は己が生命其の物を毀損する事なしに此の法則に背く事は出来ない。而して吾人と天父との關係は所謂眞實なる創造主に對するの關係であるから、吾人も亦他人との關係に於て同一なる眞實を保たねばならぬのである。汝が神より求むる所のものを同じく汝の兄弟にまで與ふべきは當然である。

以上吾人は四大動機を虚偽の精神に適用して考へたのであるが、更に進んで是等の動機を復讐の精神に當て依めて見やうと思ふ (五ノ三八—四二)。復讐の精神は勿論憎惡の精神の發現であり愛の根本法則の違犯である、而して其罪の性質は自然と吾人が既に論じた所のもの、中に含蓄されてある。乍併此の點に於けるイエスの思想の適用は殊更に必然的である。モーゼの律法の遵奉者は「眼にて眼を償ひ齒にて齒を償ふ」と云ふ如く、其の種類に應じて復讐を制限する事を一種の美德の如く考へたのに對して、イエス

復讐に對する四大動機の適用

は博愛の大精神に依つて復讐の全精神を除去するに非ざれば、此の方面に於ける何等の勝利も博したと稱すべきでない事を主張せられたのである。何となれば若しも愛が生命であり憎みが死である事が眞であるならば、然らば復讐の如何なる精神を抱く事も、其人の衷に惡の確實なる影響を生ずる事は明らかであるが故である。

而して此の復讐の精神に對する勝利はイエスが常に主張する所の所謂正義の法則の内的成就から生ずる自然の結果であらねばならぬ。彼が馬太傳五章の三十九節以下に於て例證を示したる如く、人は彼の憎惡の念が要求する所のものに遙かに超越せる正反對の精神、即ち愛の奉仕の精神を發揮し來らねばならぬ。イエスは愛の精神に依つて他人の利己的憎惡の念が要求するもの以上をなし得る事を主張された。愛は復讐以上の報ひを得るものである。汝の奉仕の精神は汝の敵の利己的要求に打勝つであらう。汝は右の頬を打たるゝ時左の頬をも向け、下着を取らるゝ時上着をも之に與へ、一里の公役を強ひらるゝ時に二里も行き、借らんとするものを卻くる事な

成就觀の適用

きに至るであらう。茲にも亦イエスは何等の外形的なる破るべからざる法則を興へつゝあるのではない、寧ろ復讐の精神から人を救ひ得る彼の徹底的なる内的精神の種々なる例證を以て、それが愛の法則の真正なる成就である事を明示せられたのである。げに復讐の念に打勝ち得るのは唯だ此の徹底的なる愛の法則の成就のみである。

他人を兄弟と見る思想に含まれたる動機も亦此點に關して同一結果を生ずる。例へば眞の父母が不孝にしてその愛に背き而かも傲慢に利己的要求をのみ常にする所の放蕩兒に對して、如何なる態度を取るべきであらうか。斯かる場合に於ける慈愛深き父母の悲しみの答はイエスの例證の意味を最も能く證明するであらう。父母は其の子に向つて『我が子よ汝の需むる所ものは小事である。若しも眞に汝の爲に善い事であるならば、如何なる事をも喜んで汝の爲に盡すの力が我にある事を汝は知らないのであるか』と云ふであらう。最大最高の眞の愛を有する者のみイエスの是等の教訓の眞意を解する事が出来るのである。

同胞觀の適用

天父觀の適用

而して又神を天父とするの思想は無慈悲にして復讐的なる精神を人心から驅除せざらんと欲するも得ない。無慈悲にして復讐的なる精神の尙ほ存する所には、神に對する何等の孝子的關係も、寛容奉仕の愛の生命を神より分與せらるゝ事も、斷じて成立しないのである。是れは『先づ爾の兄弟と和らぎ後來りて爾の禮物を獻げよ』(五ノ二三—二四)。なるイエスの命令と、『爾曹若し人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを除し給はん、然れども若し人の罪を免さずば天に在ます爾曹の父も爾曹の罪を除し給はざるべし』(六の一四—一五)。なる赦罪の條件の教訓中に明らかに主張されたる所である。吾人は此の復讐の精神を神の愛と對照せしめて考ふる時に、イエスの天父觀の人生に於ける動機が最も能く茲に表はれて居ることを見る。即ち若しも神が父であるならば彼れの生命は寛容奉仕の愛の生命である、果して然らば愛は生命であつて憎みは死である、故に人は唯だ敵すらも愛するの外はない(五ノ四四)。斯くしてのみ彼は神の生命を分たるゝ事が出来る(五ノ四五)。斯くてのみ彼は又神の如き生命を理想として

進む事が出来る (五ノ四八)。之れ以下の標準を取る事は最も普通にして因襲的なる資格に甘んずる事になるのである (五ノ四六一四七)。税吏や罪人と何の擇ぶ所があらう。

斯くの如くイエスキリストは山上の説教に於て是等の四大動機を發表し給ひ、且之を人生の凡ての問題に適用し給ふたのである。是等の思想はイエスに取りて其の道徳的動機の源泉である。是等の動機が凡て神を天父とするの信仰に根ざして居るの事實は、如何にイエスに取つては倫理的生命が宗教的生命に基くの已むを得ざるかを示し、而して人に對するイエスの使命は管に是等の動機を指し示すのみではなく、寧ろ彼れの偉大なる精神に依つて吾人をして其等の思想を信せしめ給ふたのである。即ち神が天父であり世界の中心に愛がある事の眞理を信するの力を吾人に與へ給ふたのである。こは言ふまでもなくイエスの偉大なる人格と思想の人生に齎せらるる福音である、生命である。

結論

第八章 結論

今吾人がイエスの倫理的教訓の全體の研究の結果を總括し來るに方つて、吾人が到底見通がす能はざる所の事實は、山上の説教其のものがイエスの教訓中にある凡ての最も主要にして根本的なる所のもの、總括の一種であると云ふ一事である。疑もなく福音記者馬太の思想に於ては其の積りであつたらうが、事實に於ても亦確かに其の通りである。何となれば山上の説教の吾人の研究に於て明らかにされた如く、其の中には神に關し人に關し而して生命に關せるイエスの偉大なる中心思想が明かに見出さるゝからである。茲に神及び人に對する愛の生活と其の愛が含蓄する所の凡てのものが最も明確なる言語に於て云ひ表はされてあるのである。

如何に山上の説教が其種の總括として適當なるものであるかは、吾人がイエスの心靈的發見と名づけた所の、此の説教の主要なる原理中に充分示

山上の説教
其の總括
イエスの
教訓の
總括

其の終る
證據

されてあると思ふ。即ち品性幸福及び感化の基礎的性格として、彼の山上の八福に於ける理想的生活の諸特徴中に完全に統一されて表はされて居ると思ふ。詳しく云へば凡ての時處位に於ける友情ある生活の必要條件たる愛其物の眞の要素は茲に發揮せられ、又此の愛の教訓中に含蓄されたる人生の四大動機が同じく此の説教中に披瀝されてあるのである。

前數章に亘れる吾人の研究の諸題目を回顧し來る時に、茲にも亦山上の説教が凡ての倫理訓の總括である事を見出すであらう。先づ第一にシムミールズの支柱句の凡ての意味が此の説教中に表はれて居る、即ち眞摯と絶對的眞實と内的生命と獨立と並びに人格に對する尊敬とを以て特徴とする生活の必要を高調されたのである。尙又彼れの教訓が彼れの時代思想と全然反對して居る事を示す所の徹頭徹尾倫理的なる宗教觀が其中に表はれて居る。而してイエス其人に於ける慈愛と權威との驚くべき調和が其中に表はれて居る。

トの重証
パーキットの

而して又山上の説教中には、パーキットの所謂重證句なるもの、中に表

シムミールズの
支柱句の支
倫理訓

句中の倫
理訓

はれたる人生の法則の一つも缺乏して居らぬと云ふ事が出来る。即ち普遍的なる奉仕的なる而して犠牲的なる愛の優勝なる力。世界の中心に愛存すとの根本信念。使用、習慣、効驗、警醒の必要、善の感染力の法則。人格に對する尊敬。子たる者の資格の無上價値の認識。人の罪を免すの要求。

凡て是等は重證句中の特徴であつて同時に山上説教の教訓である。

加之、山上の説教夫れ自身が最古の原材たるQ中の少なからざる部分を組成して居る。即ち二百一節より成るQの内五十八節は山上の説教中に見出され、且つQの残りの部分も全然此の部分と調和を保ちつゝある。此の判断の誤まらざる事はQに關するハルナックの最後の結論に於て確めらると思ふ、氏曰はく

『イエスの此のQなる語録と馬可傳とは共に有力なる位地を占める、併前者は後者より一層有力である。就中我等の主の使命中にある默示録的若しくは末世的要素を高調して之を其の純粹なる宗教的並びに倫理的要素の上に置かんとする如き傾向は、Qに於て常に有力なる駁撃を受けて居る。』

すQと調和

此の原材は我等の主の人類に齎せる使命の中心題目たりし所の思想を傳ふるに於て最大の教權たるものである——即ち神觀に關する天啓、悔改めて信すべき道徳的命令、並びに此の世の罪を捨て、天國を取るべき事の教訓は、即ち是れQに於ける中心思想であつて、之れ以外に何物もイエスの使命として認むべきものはない』

而して吾人が山上の説教の教訓を馬可傳の中に表はされたるイエスの使命、救世の方法、動機、目的、其の教訓の革命的要素、愛の誠律の中に存する大なる逆説と其社會的應用等に對照し來る時に、吾人は茲にも亦或様式に於て山上の説教中に繰り返へされない所のものが極めて僅少である事を見出さねばならぬ。而して之と略ぼ同一なる事は馬太傳並びに路加傳に特有なるイエスの教訓に就ても云ふ事が出来る。

吾人の研究はイエスの教訓なるものが、一個の學術的に組織せられたる系統に於て、吾人の前に展開されて居るのではない事を示し得て餘りある。寧ろ反對に其處には凡ての組織が全く缺乏して居る。従つて一見種々なる

馬可傳及
路加傳
の特色
を調和
する

學術的
系統
の學
問的
研究

場合に於て語られたるイエスの言葉の雜駁なる集合であること見ゆるのである。凡て宗教的並びに道徳的生活に關してイエスが語られる時に、彼は自己の正確なる意味を踏み外さない爲に常に同一の形式に於て物事を取扱はんとする小心翼翼たる一個の素人教學者の如く語られなかつた。寧ろ彼は眞個の徹底せる内容が互に相適合せざるを得ないことを知るが故に、形式や組織には一切無頓着である所の一個の名匠の如くに物語り給ふたのである。

然りと雖も、イエスの教訓の熱心なる研究者は、實際其の教訓中に驚くべき一貫の統一が存する事を見ざるを得ないのである。而して事實上イエスの倫理的並びに宗教的教訓の全部が唯だ一個の思想即ち神を天父とするの彼れの信仰より流れ出づると云つても決して過言でない。斯くして彼れの教訓全部が彼自身の孝子の心の直接なる反射であること云ふ事が出来る。此の神を天父とするの信仰、世界の中心に愛存すと云ふ不動の信念、而して全宇宙が正義の意志に加擔すと云ふ確信、凡て是等は單に一個の宗教的

然りし
イエスの
教訓の
統一
を徹
底的
に調
和す

信仰のみではなく、寧ろ凡ての眞摯にして希望ある道徳的生活に必要な偉大にして根本的なる道徳上の確信である事は吾人が既に明かにした所である。ミューアヘッド教授 Muirhead が最近の萬國徳育會議に於ける中心問題を總括して云つた言は左の如くである。『ヘーゲルは人が自身を信ずるの信任は宇宙並びに神に對する信任と略ぼ同一である』と云つたが、個人に就て眞なる事は亦人類全體に就ても眞である。げに斯かる自信なしには、如何なる最後の確信を以て能く人類の理想に訴へる事が出来るかを見る事困難である。』此の神を天父とするの思想、此の世界の中心に愛存すとの確信をば、イエスは單に其の終局の論理的結論にまで推し擴めて、是を人生の各方面に適用せられたまでの事である。而して彼れの教訓の殘餘の全部は單に是等の論理的結論の細説並びに適用と認むべきものである。

斯くの如くにして此の天父觀の根本的確信から直接に生じ来る所の事は、
 (一)、愛が最高の生命であり凡ての眞生活の總括並びに目的である事、而して此の愛は神の愛の如く價值ある者にも價值なき者にも一樣に公平に與

神を天父とするの思想の推論の要素

へらるべきものである事、而して其愛は喜んで人に事へ喜んで犠牲に供し而して喜んで人の罪を赦す所の愛である事である。而して此の同じ原理から、品性と感化と幸福との主要條件が此眞個の愛を組成する所の要素であると云ふ結論が生じて来る。又神を天父とするの此の確信から生活の四大動機が生じ来る事は吾人の既に論じた所である。次に神を愛の父とするイエスの思想は、

人生の最高善

人格の價値

内的正義

(二)、個人に於ても社會的生活に於ても人生の最高善は神の支配即ち愛の勝利に外ならぬ事と、

(三)、各人は無限の價值ある神の子であるが故に、常に其の如く尊敬せられ従つて決して手段としてではなく常に目的として取扱はるべきものである事を意味する。尙又同じく起り来る思想は、

(四)、若しも衆徳の帶は愛であるならば、正義は飽くまで精神的であり、自己の内心より發するものであり、決して外部より規定せらるべきものではない事と、